山村　豊子

８曲ばかり、聴いてみた。この時代の芸人のことはよく知らないが、山村の俗曲は、すぐに上手い歌い手だと感じた。命があれば、現在の歌謡曲も、見事に歌いこなしただろう。節回しは、現在の内海桂子の歌唱に、近い物を感じた。声は、内海よりもやや高音で、自由闊達だが。

（民謡　関の五本松）

(１)♪アー、関の五本松、ハどっこいしょ、一本切りゃ四本(しほん)、あとは切られぬ夫婦(みょうと)松、しょこほい、しょこいちりきやの、まつほい♪

(２)♪アー、表(おもて＝思て)来たかや、ハどっこいしょ、裏から来たか、私ゃ裏から思て(おもて＝表)来た、しょこほい、しょこいちりきやの、まつほい♪

(４)♪アー、花は色々、ハどっこいしょ、五色(ごしき)に咲けど、主(ぬし)に見返る花はない、しょこほい、しょこいちりきやの、まつほい♪

（収集プロフィール）

山村　豊子（やまむら　とよこ、１８XX～１９XX）

純日本的な俗曲や「流行唄 はやりうた」で大正末期から昭和最初期の人気大衆歌手。

＊「なつめろダイアリー」より

昭和最初期の山村豊子さんキャッチフレーズが「日本一名声」、俗曲歌手では当時日本一の知名度だったようです。民謡『関の五本松』は山村さんの代表曲のひとつ。

(１)♪アー、関の五本松、ハどっこいしょ、一本切りゃ四本(しほん)、あとは切られぬ夫婦(みょうと)松、しょこほい、しょこいちりきやの、まつほい♪

(３)♪アー、帰ろ帰ろと、ハどっこいしょ、口には云えど、酔うたふりして膝枕 、しょこほい、しょこいちりきやの、まつほい♪

(５)♪アー、毎度毎度の御贔屓を受けて、オリエントレコードで御礼申す、しょこほい、しょこいちりきやの、まつほい♪

この歌唱はニッポノホン(のちの日本コロムビア)大阪支社「オリエント」旧式録音発売。

＊曲

大津絵

かっぽれ

詠歌

地蔵和讃

どんどん節

串本節

オヤオヤ節

（初代）鈴木 正夫

　大物の民謡歌手であるが、軍歌や流行歌もかなり残しており、その歌唱には歌謡曲歌手とひと味違った味わいがあるようだ。民謡に関しては、全国の民謡を軽々と唄いこなしており、これだけ多様な趣きと発声を、第一級のレベルで表現できる人というのは、現在では稀な存在なのではなかろうか。この曲は、静かな夜想を、ほのかな哀愁と望郷に満ちたメロディに乗せて、味わい深い。

　「月に故郷の唄がある」

　小舎の屋根からついとでた　虫が鳴く夜のお月さま　便りきくよな見えるよな　お坊の寝顔を浮かべてる　あそこ辺りの空の下　おらが国さの声がする----

(収集プロフィール）

鈴木 正夫（すずき まさお、1900年（明治33年）1月- 1961年（昭和36年）9月28日）は宮城県丸森町出身の民謡歌手。1931年（昭和6年）レコードデビュー。

娘には歌手の鈴木三重子がいる。初代と二代目がおり、現在活動しているのは息子の秀（二代目）である。

紅白出演歴（初代）

第1回NHK紅白歌合戦…常磐炭坑節

第2回NHK紅白歌合戦…新相馬節

第4回NHK紅白歌合戦…花笠音頭

第6回NHK紅白歌合戦…相馬盆唄

第7回NHK紅白歌合戦…常磐炭坑節

　主な曲

＊戦線日記　（佐伯孝夫：作詞、佐々木俊一：作曲。昭和十三年二月新譜）

＊雨の戦地で　（眞木一葉：作詞、 佐々木俊一：作曲。昭和十三年）

＊一筆啓上　　（共唱・能勢妙子 佐伯孝夫：作詞、新郷久・曲　昭和１３年）

＊麦と兵隊　　（とらんしっと詩社：作詞、佐々木俊一：作曲。昭和十四年）

＊戦線お国自慢　（共唱・米山博夫・波岡惣一郎：　辰田国雄：作詞、山田栄一：作曲。
　　昭和十四年）

＊月に故郷の唄がある　（若杉雄三郎・詞　佐々木俊一：作曲）

＊坊やお聞きよ　（門田ゆたか：作詞、島口駒夫：作曲。昭和十八年）

＊野毛の山　　（小沢直与編曲　ビクターオーケストラ）

＊いもがらぼくと　　（共唱・野崎聖子）小野金次郎：作詞、小沢直与志：作曲。昭和二十九年。宮崎県新民謡。

＊お立ち酒　　（山形県民謡）

中国地方の子守唄

　この唄は、中学のときに習ったのだろうか。典型的な子守唄で、６０歳過ぎの私でも、聴くと素直に眠くなる。岡山県出身の方々は、この曲のタイトルを残念がるようだ。とても広い地理的範囲になってしまうので、歌の概形が把握しにくい、というのだ。島原や竹田のように、井原の子守唄、としてくれていたら良かったのに、ということらしい。まあ、いまさら変えるのは難しいと思うけど。街おこし隊が、お願いしてみたら、どうだろう。正当な根拠があるのだから、素気無くはされないだろう。唄としては、とてもいいと思う。その主目的も、十分果たしているのだし。親の愛の、深さ切なさも、存分に感じるし。
（日本古謡、編作曲：山田耕筰　昭和３）
１　ねんねこしゃっしゃりませ
　　寝た子のかわいさ
　　起きて泣く子の　ねんころろ
　　つらにくさ
　　ねんころろん　ねんころろん
２　ねんねこしゃっしゃりませ
　　きょうは二十五日さ
　　あすはこの子の　ねんころろ
　　宮詣り
　　ねんころろん　ねんころろん
３　宮へ詣ったとき
　　なんと言うて拝むさ
　　一生この子の　ねんころろん
　　まめなように
　　ねんころろん　ねんころろん
（収集プロフィール）
山田 耕筰（やまだ こうさく、Kousaku Yamada、1886年（明治19年）6月9日～1965年（昭和40年）12月29日）日本の作曲家、指揮者。山田 耕作としても知られる。
日本語の抑揚を活かしたメロディーで多くの作品を残した。日本初の管弦楽団を造るなど日本において西洋音楽の普及に努めた。また、ニューヨークのカーネギー・ホールで自作の管弦楽曲を演奏、ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団やレニングラード・フィルハーモニー交響楽団等を指揮するなど国際的にも活動、欧米でも名前を知られた最初の日本人音楽家でもある。軍歌の作曲も多く手がけている。
＊二木紘三のうた物語より
原曲は岡山県井原市高屋町あたりで、歌い継がれてきた子守唄だとされています。この地に生まれ育った声楽家の上野耐之（うえの・たいし）が幼時に母親が歌ってくれた子守唄を、師事した山田耕筰の前で歌ったところ、心を動かされた山田耕筰がすぐに独唱曲に仕上げたと伝えられています。発表は昭和３年（1928）４月４日（異説あり）。
上野が歌った歌詞は、現在歌われているのと若干違い、次のようなものでした。
ねんねこしゃっしゃりませ　寝た子のかわいさ
起きて泣く子の　ネンコロロン　つらにくさ
ねんねんころいちや　今日は二十五日さ
あすはこの子の　ネンコロロン　宮参り
ーーー
まめになったら　絵馬買うてあげましょ
絵馬はなに絵馬　武士絵馬あげましょ

洒落（しゃれ）男　二村　定一・榎本　健一

　楽しくリズミカルで、皮肉とほのかな哀愁に満ちた作品。一緒に、踊り出したくなるような、ウキウキとした雰囲気がいい。３分の１くらいは、ディキシーランドに繋がっている感じだ。この時代から現代まで、人間の基本的な生活（生き様）は、そう変わっていないのかも知れない。そう感じさせる、歌詞とメロディーだ。
（作詞：Lou Klein、作曲：Frank Crumit　日本語詞：坂井透、唄：二村定一／榎本健一　昭和５）
１　俺は村中で一番
　　モボだと言われた男
　　己惚（うぬぼ）れのぼせて得意顔
　　東京は銀座へと来た
２　そもそもその時のスタイル
　　青シャツに真っ赤なネクタイ
　　山高シャッポにロイド眼鏡
　　ダブダブなセーラーのズボン
３　吾輩の見染めた彼女
　　黒い瞳でポップヘアー
　　背が低くて肉体美
　　おまけに足までが太い
６　君は知っているかい僕の
　　親父は地主で村長
　　村長は金持ちでせがれの僕は
　　独身でいまだに一人
７　アラマアそれは素敵
　　名誉とお金があるなら
　　たとえ男がまずくても
　　私はあなたが好きよ
10 財布も時計もとられ
　　大事な女はいない
　　恐いところは東京の銀座
　　泣くに泣かれぬモボ
＊日本ではエノケンの歌という印象が強いけれど、エノケンのレコードとしては戦後（昭和２５年前後）のものしかない、ということです。人口の膾炙への経緯から推測すると、当時の舞台等での歌唱はエノケンの方が先だったのでは？と思うのですが。
（収集プロフィール）
坂井　透（さかい　とおる、明治４０年頃～１９７０）東京出身の、ジャズ・バンジョー奏者 、ギタリスト。慶応義塾大学卒。
大学在学中に「洒落男」(オレは村中で一番 モボだと言われた男…)を作詞。昭和5年二村定一の歌でレコード化され、のちエノケン(榎本健一)が自分の持ち歌として歌った。卒業後、コロムビア・ジャズ・バンドに入団するがすぐ退団。10年頃、満州に渡り、18年まで滞在。その間、ダンス・ホールにも出演。戦後、大森の米軍クラブでギターを弾くが、まもなく現役を退き、空調用のパイプの製作業に転じた。
＊絵本昭和の流行歌より
坂井は慶應大学の学生にして、カレッジジャズバンドのバンジョー奏者であった人物。この「洒落男」の伴奏をしているのはアーネスト・カアイ・ジャズ・バンドとなっていますが、これはその慶應のジャズバンドを母体としたもので、坂井氏自身もウクレレの演奏をしているようです。実はこの坂井透という人は自分自身でも「村のしゃれ男」というタイトルでこの歌を唄っています。二村定一の「洒落男」は昭和5年1月にビクターから、「村のしゃれ男」は同じ年の3月にコロムビアからとなっています。
＊二木紘三のうた物語より
原曲がアメリカでレコーディングされたのは1928年で、その２年後の昭和５年（1930）に日本語盤が発売。原曲タイトルのcaballeroはスペイン語からの外来語で、紳士・騎士という意味。A gay caballeroは「陽気な伊達男」といったところ。原詞は、ブラジルのリオデジャネイロから彼女を探しにやってきた男が、「ひとりぼっちよ」という女の言葉を信じてバルコニーから忍び込んだところ、女の亭主に見つかってさんざんどやされ、ほうほうの体でリオデジャネイロに逃げ帰った、という筋書きです。
１番のモボはモダンボーイの省略形で、大正末期から昭和初期にかけて最先端のファッションで都会を闊歩した若者を指します。その女性形がモガ、すなわちモダンガール。
２番のロイド眼鏡は、アメリカの俳優ハロルド・ロイドが映画の中でかけたところから流行った眼鏡で、太縁の円形眼鏡。セーラーのズボンは、1857年にイギリス海軍が制式採用した水夫服（セーラー服）を模したズボンで、裾が広くなっているのが特徴。今風に言うと「ベルボトムのパンツ」です。田舎の

青年が都会の最先端のファッションと信じる服装で銀座にやってきたわけですね。

華の昭和名歌３００　第　：君恋し　木村時子＆高井ルビー

「君恋し」は最初、作詞・作曲ともに佐々紅華です。時雨音羽の作詞で発表される前にオペラ歌手によって２回吹き込まれています。1回目は1926年の高井ルビーによって、2回目は1928年木村時子です。作詞作曲はともに佐々紅華。歌詞は若干ことなります。木村時子版は台詞入り。高井ルビーは、浅草オペラの歌手。（異説として。　実は佐々紅華とは結婚していませんので「妻」ではありません。）高井ルビーによって最初に吹き込まれたのは1926(昭和2年)年のこと。
＊楽曲の長さ（資料により、誤差あり）
高井ルビー　版　３分５５秒
木村時子　　３分５６秒
二村定一　　２分５５秒
佐藤千夜子　　３分０８秒　＊
　木村の歌唱は、下手ではないがやや平板で、今聴くとやや時代がかっている。中盤から、セリフになり、芝居が延々とつづく。そして、歌（３番）に戻り、４０秒たらずであっけなく終る。その当時は、それが求められた形なのだろうが、今となってはそれ故に、あまりいいとは思えない。高井の歌唱は、オペラ風で、柔らかな感情が伝わってくる。あと佐藤千夜子版は、基本は二村版とほぼ同じだが、前奏が短く、流麗なアレンジになっている。さすがに、堂々たる胸に響く歌唱。
＊ 木枯らし吹きて　思いは深し　夕陽を沈めて　哀れを誘わず（月影さみしい：木村版は）　君恋しーーー　高井版
（収集プロフィール）
木村 時子（きむら ときこ、1896年3月12日～1962年11月13日）日本の歌手、女優、声優。オペレッタ風の童謡レコード『茶目子の一日』の茶目子役で知られる。本名は-とき。
　来歴
1896年（明治29年）、宮城県に木村ときとして生まれる。
上京し、帝国劇場歌劇部の三期生となる。1915年（大正4年）、ジョヴァンニ・ヴィットーリオ・ローシーが指導する帝国劇場歌劇部の歌劇『ボッカチオ』で初舞台を踏む。松井須磨子の「芸術座」に参加する。
『茶目子の一日』（ニッポノホン、1919年10月）1919年（大正8年）、佐々紅華が企画したオペレッタのレコード『茶目子の一日』（ニッポノホン、現在のコロムビアミュージックエンタテインメント）の録音に「七声歌劇団」名義で参加、主人公の茶目子を演じ、お母さん役の天野喜久代、先生役の加藤清と共演した。
1920年（大正9年）8月、根岸興行部の「金龍館」館主・根岸吉之助が浅草公園六区に「根岸大歌劇団」を結成、この設立に参加する。1923年（大正12年）9月1日の関東大震災で浅草は壊滅、浅草オペラは終焉に向かい、同歌劇団も1924年（大正13年）には解散した。
1930年（昭和5年）ころは、「木村時子一座」を構え、浅草の音羽座等でレヴューの公演を行っており、同年7月にのちにあきれたぼういずで知られる川田晴久が入団している。同年11月1日に開

業した「玉木座」で同日旗揚げした「プペ・ダンサント」の設立に参加した。その後、古川緑波、水の江滝子らとともに舞台に立ち、「浅草の女王」と呼ばれた。
1935年（昭和10年）、当時、千葉県千葉郡津田沼町谷津海岸（現在の同県習志野市谷津）にあった阪東妻三郎プロダクション関東撮影所（のちの谷津遊園）の最後の作品、サイレント映画『彦左と九馬』に出演している。同撮影所は同年閉鎖された。
1945年（昭和20年）8月15日に第二次世界大戦が終結、戦後は声優として活動した。1954年（昭和29年）、出演していたNHKのラジオドラマ『ウッカリ夫人とチャッカリ夫人』の映画化作品に、俳優として出演している。
1962年（昭和37年）11月13日、死去。満66歳没。
　ディスコグラフィ
『茶目子の一日』、作詞・作曲佐々紅華、ニッポノホン、1919年
『毬ちゃんの繪本』、作詞・作曲佐々紅華、ニッポノホン、1919年11月
主なフィルモグラフィ
『彦左と九馬』、監督長尾史録、阪東妻三郎プロダクション / 新興キネマ、1935年1月20日、浅草・電気館
『ウッカリ夫人とチャッカリ夫人 やりくり算段の巻』、東京映画 / 東宝、1954年3月10日、東宝系
『その後のウッカリ夫人とチャッカリ夫人』、東京映画 / 東宝、1954年8月15日、東宝系
＊高井 ルビー（たかい るびー、1895～1962年1月17日）日本の歌手、女優。埼玉県大里郡寄居町出身。一部のレコードに天田 春美（あまだ はるみ）という別名義も用いている。夫は作曲家の佐々紅華。本名は佐々 いゑ（さっさ いえ）、又は佐々 エイ、佐々 エイ子とも。
　経歴
大正期～昭和初期の浅草オペラでソプラノの歌姫として活躍。歌手・井上起久子に師事し、「高井ルビー」という芸名は彼女に付けられたという。 なお、芸名の由来は駆け出しの頃大学生のパーティに招かれた際、指輪がないので小道具の指輪をはめて行き、学生に「あっ、高いルビー」と言われたのにちなんだと言われる。 後にオペレッタ風の童謡歌劇や流行歌などを吹き込んだ。同じく浅草オペラで活躍した二村定一などとのデュエットをした。 ちなみに「君恋し」は二村定一よりも先に吹き込んでいる。
1927年（昭和2年）に作曲家・佐々紅華と結婚し、数年後芸能界を引退する。その後は夫・紅華とともに故郷の埼玉県寄居町へ居住する。夫の死後静岡へ移り住んだ後、1962年（昭和37年）1月17日死去。享年66。
＊大正時代「浅草オペラ」で活躍、昭和初期にもビクター御伽歌劇(童話唱歌)録音の高井ルビー＝天田春音＝天田春美＝佐々いえ(1895 ～ 1962.1.17)さん。埼玉県大里郡寄居町出身。1918年頃(大正7年)、井上起久子に師事。1919年、松竹系列の「新星歌舞劇団」参加でデビュー。関東大震災後も浅草オペラ上演を唯一続けた「金龍館」オペラ女優→1925年に東京松竹芸能入社。井上さんが述べられた高井さんの本名は、天田春音(あまだはるね)。「高井ルビーは私の弟子で、私が芸名をつけたんです(井上起久子さん・談)」。1926年ニッポノホンで、名曲『君恋し』初レコーディン

グ＝『君恋し(佐々紅華作詩作曲編曲・高井ルビー歌唱・ニッポノホンオーケストラ伴奏)』1929年にオリエント再発売。1930年、コロムビアで別名・天田春美録音『乙女の恋は弱きもの(佐伯孝夫作詩・前田多喜男作曲編曲・天田春美歌唱・コロムビアオーケストラ伴奏)』発売。戦前歌謡研究家・大川晴夫氏コメントでは「高井さんは佐々紅華氏と結婚で芸能界を引退」。

ディスコグラフィー

高井ルビー名義

御伽歌劇・童謡

「かくれんぼ」（1924年）相良愛子・木村時子と共演。

「遊覧電車」木村時子・宇津見清・柳田貞一と共演。

「わたしのお家」木村時子・宮城信子・柳田貞一と歌唱。

「鯰の裁判」柳田貞一・明石須磨子・園春江と共演。

「お彼岸」柳田貞一・明石須磨子・園春江と共演。

「ちょいとお待ち」柳田貞一と共演。

「ノンキナトオサン」堀田金星・井上起久子・城沢敏夫と共演。

「茶目子の一日」（1929年）平井英子・二村定一と共演。

「毬ちゃんの絵本」（1929年）平井英子と共演。

流行歌

「ドンが鳴る迄」明石須磨子・園春江とのトリオ。

「恐はやの恐はやの」明石須磨子・園春江とのトリオ。

「君恋し」（1926年）

「銀座小唄」（1929年）

「カフェー小唄」

「深川」

「アラ失礼マア失礼」

「お夏狂乱」

天田春美名義

「乙女の恋は弱きもの」（1930年）

参考書籍

清島利典『日本ミュージカル事始め 佐々紅華と浅草オペレッタ』刊行社、1982年（佐々紅華の伝記。私生活のことまで詳細に書かれている）

石川桂子『大正ロマン手帖-ノスタルジック&モダンの世界』河出書房新社、2009年（浅草オペラのページに高井ルビーの写真が掲載されている）

橋本　一郎

　演歌でよくあるタイトルなので、初めて聴くまえは、７０年以上も前の曲だし、私は泥臭いド演歌なのだろうと思っていた。ところが、聴いてみると、軽いタンゴ調の洒落た歌謡曲。すこしのアレンジで、すぐにも社交ダンスに使える。橋本の歌唱も、メロディーによく乗って、別れの傷みと、ほのかな哀愁を醸し出している。当時の人々は、その時代背景を考えると、平成を生きる私達よりも、何十倍もエキゾチックな感じを受けたであろう。橋本の歌声は、節回しが現在の歌謡曲歌手に近く、違和感がとても少ない。

「別れの波止場」　（木下潤：詞、飯田三郎：曲。昭和十三年。タイヘイ盤）

一度別れの　船出をしても　また逢える日の　あるものを　涙みせるな　小夜しぐれ----

（収集プロフィール）

橋本　一郎（はしもと　いちろう、１９ｘｘ～１９ｘｘ）昭和初期から、１０年前後、中堅程度の活躍をみせた歌手。活動は続けていたようだが、資料不足のため、それ以降の経歴は把握できなかった。数種の変名で、４、５社からレコードを出している。（これは、把握したものだけの数なので、実際は、１０社以上、５名義以上かも。）

＊「男度胸で」　野村俊夫：作詞、飯田三郎：作曲。昭和十三年。タイヘイ新黒盤。

＊「東京恋しや」大木惇夫：作詞、 阿部武雄：作曲。昭和十一年。この河崎一郎も他の歌手同様、様々な名前で吹き込んでおります。タイヘイ専属名の橋本一郎が よく知られているようです。

＊一条　弘　名義で、タイヘイから「塹壕夜曲」。

＊河崎一郎名義の「片羽鳥」が好きで　一条　弘も含め、多少集めましたが　大船一郎は初めて聞きました。アサヒは１２年暮れから１４年中頃と本に書いて有りましたが、この歌声を聴くと、もっと若い、１０年ごろの感じですね。貴重な音源聞かせて頂き、ありがとうございました。

＊昭和１１年にﾀｲﾍｲが出した映画主題歌３３曲のうち、橋本一郎が９曲、喜代丸が７曲、二人のﾃﾞｭｴｯﾄ１曲で、なんと二人だけ主題歌の５０％をしめている。

このなかで二人がﾃﾞｭｴｯﾄで唄った「花嫁双六」は、ﾀｲﾍｲとしてはかなりﾋｯﾄした主題歌なので、今でもウキウキしたﾒﾛﾃﾞｨｰが脳裏に浮かんでくる。

　主な曲

娘くろかみ　（松坂直美：作詞、斎藤元：作曲。大船一郎　名義。アサヒレコード。）

片羽鳥　　（　　河崎一郎　名義）

五人の斥候兵　　（作詞：西岡水朗　作曲：飯田三郎　昭和13年　一条　弘　名義））

曠野の北斗星　　（松村又一：作詞、飯田三郎：作曲。吹き込み年他不明。）

北　廉太郎　「追憶の馬車」

　夭折（私見では、アラフォーまで）した歌手で、私の記憶に残っているのは、高倉敏、ＺＡＲＤの坂井泉水、大塚博堂などであるが、戦前の日本にもいたのですね。北廉太郎はまさに、一般的には、埋もれ忘れられていた人でしょう。わずか、約４年余の活動。私がこの歌手を知ったのも、つい半年ほど前。今回、ユーチューブ等で５、６曲聴いてみて、このままでは本当に惜しい歌手と痛感し、取り上げてみました。もちろん、とてもいい曲です。彼は呈示されているプロフィールでは不明だが、クラシックの素養があるのでは。声質や歌唱法の雰囲気は、真木不二夫に近い。けれど、真木よりも柔軟な歌唱力があるようだ。軽快なメロディーに帯びるほのかな哀愁と郷愁、そつなく高音もこなす、ふんわりと乗る柔らかなテノール、ロマンティックで文学的な歌詞。あと他に「出船の唄」も、独特の哀愁と節回しがあって、とてもいい。けれど、わづか２０才の青年が、どうしてこれだけ大人の心を唄い得たのであろうか。勤めていた頃、多くの現代の若者を身近に見てきた私には、不思議でならないのだ。

　（丘越えて馬車はゆくよ　思い出の夢ひめて　並木の彼方　鈴音をのこし---七色の虹のごと追憶の彼方　鞭音をのこし　馬車はゆくよ----）

　高倉敏、川畑文子、ベティ稲田、三丁目文夫などと並んで、私が再評価をめざしている、歌手のひとりである。残された写真や歌唱の、成熟した大人っぽさは、どういう訳なのだろう。謎といって、いいほどだろう。唄は、文句なく上手い。クラッシックの出身ではないようだが、ソフトなテノールといっていい。急逝は、残念だが、短い活動期間に、多くの名曲を与えられている。ユーチューブ等で、ぜひ聴いて欲しい。下の曲は「資料音源」とあるので、発売はなかったのかも。まったく人口に膾炙されていない曲を、選定するのは、かなり迷った。けれど、この時代に創作された、知られざる素晴らしい曲を、ご紹介するのも、意義のあること。この曲は、ぜひ有力な歌手たちに、リメイクして欲しい。若手なら、松原健之、黒川真一朗、三山ひろし、竹島宏、宇都宮さだし、逢川まさき、市川たかし、長谷川真吾、東京大衆歌謡楽団、などが適しているだろう。大物なら、山本譲二、五木ひろし、徳永英明など。

＊死亡年齢については、ほかに２２歳説と２５歳説が、あります。

　「かたむく月影」（松坂直美：詞、福島多歌三：曲。昭和十四年）

　かたむく月影 瞳に淡く　今宵旅行く　心を濡らす　夜風は寒く　身に吹けど　男心は　泣きは-----

(収集プロフィール）

北 廉太郎（きた れんたろう、1920年（大正9年）3月- 1940年（昭和15年）9月15日）は昭和期の歌手。

経歴

山形県鶴岡市出身。

1936年（昭和11年）タイヘイレコードから紀多寛として「男の涙」でデビュー。ポリドール移籍と共に瀧廉太郎をもじった北廉太郎に改名。

「青春の丘」、「出船の唄」、「潮来夜船」、「追憶の馬車」、「シナの町」、「ボルガ旅愁」

などのヒット曲があり、アイドル歌手として人気を得たが、1940年（昭和15年）、白血病で急逝。享年20。
＊「出船の唄」　当時青年歌手と して人気を博していた北廉太郎の唄で発売された曲です。その北廉 太郎は将来を大いに期待される存在でしたが、残念ながら翌昭和1 5年に20歳の若さで帰らぬ人となりました。
＊（レコード狂の詩・より）
全編に渡って馬車が疾走しまくっている。勿論馬車モノ歌謡の最高峰。細田定雄のバンジョーと小暮正雄のアコーディオン、それとマンドリンの混然とした具合が絶妙で、特に２番と３番の間の間奏と後奏が物凄く素晴らしい。
そして、ポリドールで最も哀愁味のある歌手として人気の北廉とくればもう文句無いわけです。作曲は山下五郎。柳家金語楼の弟。山下五郎の曲は大概ハズレの無いもので、安心して聞けるのも嬉しいところ。編曲は、アコーディオンの小暮正雄でして、編曲の妙味は彼の手になるところが大きいと思います。
当時の写真を見て判るとおり相当の美男子であり、山形県出身で昭和１２年ごろにタイヘイでデビューしてから１３年にポリドールに移籍し、相当数の吹込みを残していますが昭和１５年に２１歳という若さでこの世を去ってしまいました。
いま考察してみるに、「幻の名歌手」とは言うけれど、ヒット曲もいくつかあるし、当時の人々の耳にまったく届いていなかったと言うわけではないでしょう。むしろ、近頃の傾向として、戦前に幽明界を異にした歌手は全く省みられないという傾向に埋没しているだけのような気もします。
北廉の歌声を聞いてみても、ちっとも古くないし泥臭い所もない。今の歌手で言うと氷川きよしがコブシを利かせずに寝ぼけて歌っているような感じ、当時のポジションとしては青春歌謡路線歌手。もちろんそういう哀愁味なんてのが嫌いな人には逆に拒絶される部類の歌手かもしれませんが。
北廉の絶頂期はこの「追憶の馬車」の発売された１４年頃で、１５年に入るとなんとなく病のためか次第にやや精彩を欠いて魅力自体も半減してしまう。そしていまや歌声も存在も消滅状態となっているのは、あまりにも悲しい気もします。
　主な曲
進軍の一夜　　（古谷玲児：作詞、飯田景応：作曲。 昭和十三年）
追憶の馬車　　（松坂直美：作詞、山下五朗：作曲。昭和十四年）
出船の唄　　（清水みのる作詞・倉若晴生作曲、昭和14年）
潮来夜船　　（藤田まさと：作詞、倉若晴生：作曲。昭和十四年九月新譜）
男の行く道　　（松坂直美：作詞、倉若晴生：作曲。昭和十四年）
再見上海　　（詞・木原たけを　曲・江口夜詩　昭和１５年）
青春の丘(昭和14年5月)
潮来夜船(昭和14年9月)＊カップリングは、小林千代子「旅のつばくろ」で、両面とも大ヒットした。

井田　照夫　　利根の船頭唄

　黎明期の、主要歌手のひとりなので、すでにあちこちで取り上げられていると思って、かなりなサイトをチェックしたが、なぜかほとんど未収録。そのため来歴は、よく分からないが、昭和の初・中期にかなり活躍した歌手である。声質と節回しから、民謡か浪曲から、出て来た方だろう。第一印象は、甲高いが渋みのある声、である。高音をベースした、独特の節回しが印象的な歌手といえる。ただし、戦時歌謡では、この個性はかなり抑えられているが。
　この曲は、いままでに５，６回は、有力歌手が唄っているのを聴いたことがある。が、やはり井田のオリジナルの味わいが、一番いい。伝統的な歌唱テクニックに加えて、リズム感、構成力なども、現在の歌手に引けをとらないほど優れている。そして何より、この時代特有の、粋とイナセ、秘めた心意気を感じさせる。メロディーも物語も、もはやアンティークではあるが。
　（今は泪の　枯芒　花が咲こうが　咲くまいが　利根の河原の　枯芒----）
　半田健人は、ここまで辿りついただろうか。けれど、現在の歌謡曲の源流であるのは確かだ。日本の現在の唄のほとんどは、この辺りから流れ出しているのだ。この時代が消えると、ユーミンも中島みゆきもエグザイルも、いまの形では存在しないのだ。サザンやグレイ、安室、清水翔太までも。この曲は、ほのかな悲しみと、情景がうまくかみ合い、のんびりとしたテイストがなぜか快い。
　　(詞・松村叉一　曲・草笛道夫）
　花の咲く日を　夢に見て　水に流した　船頭唄　これも儚い　思い出の　今は涙の　枯芒-----
（収集プロフィール）
井田　照夫（いだ　てるお、１９ＸＸ～１９ＸＸ）　１９３７年デビュー。昭和１５年前後に活躍した歌手。資料不足のため、詳しい来歴が把握出来なかった。民謡か浪曲の出身と推定される。
＊レコード狂の詩・より
昭和１４、５年ごろ、低調なﾀｲﾍｲﾚｺｰﾄﾞの屋台骨を背負って、喜代丸とともに最も活躍した歌手だが、意外と映画主題歌の数は少なく、戦前期には僅か２曲しか出していない。
そのうちの１曲が、盧溝橋事件が起きた翌月に封切られたこの映画の主題歌だつた。
☆「新興　皇軍一度起てば」（監督：西　鉄平）12/8月封切　　軍事劇映画
主題歌「日の丸進発・井田照夫、なら丸」
歌いだし「正義のために剣とりて　今ぞいで立つわが勇士　行手は彼方胡沙の空･･･

ｶｯﾌﾟﾘﾝｸﾞされたのが、同じ映画の主題歌で「皇軍躍進・内本　実」。歌いだし「風雲暗き北支那よ　不義と不正を討たんとて　天に代わりて我亜は征く････」
＊戦後も唄っていたものの、大した活躍もせず引退してしまう。彼らは戦時歌謡で名を揚げたため、戦後は持ち歌が出せないままスタートせざるを得なかった。このことが不幸の始まりと言える。筑波高や小野巡らも同様。
　主な曲

おけさ旅情
利根の船頭唄　（松村又一：詞　草笛道夫 ：曲　昭和十二）
軍国桜だより　（堤 一郎 ：詞、草笛道夫：曲。昭和十四）
真実ぶし　　（松村又一：詞、 草笛道夫：曲　昭和十四）
度胸ぶし　　（松村又一：詞　草笛道夫 ：曲　昭和十四）
浪花節と兵隊　（詞 堤一郎 曲 草笛道夫　昭和１４）
小唄草子　（詞 松村又一 曲 草笛道夫 歌唱 井田照夫 昭和十五）
続・浪花節と兵隊　（詞 堤一郎 曲 草笛道夫 歌唱 井田照夫昭和十五）
八木節と兵隊　　（詞　堤一郎　曲　草笛道夫　昭和十五）
　主な曲
利根の船頭唄　１９３７年
真実ぶし　　１９３９年
軍国桜だより　１９３９年
浪花節と兵隊　１９３９年
度胸ぶし　　１９３９年
八木節と兵隊　１９４０年
続・浪花節と兵隊　１９４０年
小唄草子　　１９４０年

井口　小夜子

　私は、テレビ版の「紅孔雀」（まだ白黒フィルムの頃、２年くらいつづいた記憶があるが）は、半分くらいは見た。こちらは、違う主題歌だったような気がするが、資料では同じになっている。ただ、なぜか、この曲はあまり記憶がないのだ。改めて聴いてみると、しっとりと日本的な曲で、なかなかいい。多くの人が指摘しているが、井口の声は、美しく太く、しっかりとしている。その他。「乙女十八」は、メロディーも歌詞も、哀調せまる雰囲気で、不覚にも涙をこぼしそうになった。「曠野の曲」は、樋口静雄とのコラボが秀逸。樋口の歌唱が、地平線までの雄大な荒れ野を思わせ、井口の歌唱が、哀愁に満ちた不安を掻き立てる。

　（詞　北村寿夫　曲　福田蘭童）

　まだ見ぬ国に住むという　紅きつばさの　孔雀とり　秘めし願いを　知るという　秘めし宝を　知るという----

（収集プロフィール）

井口 小夜子（いぐち さよこ、1914年（大正3年）4月17日～2003年（平成15年）11月9日）は昭和期の歌手。東京市神田区出身。

　経歴

童謡歌手として1935年（昭和10年）キングレコードより「ベゴニアの花」でデビュー。

1939年（昭和14年）、武蔵野音楽学校本科声楽部を首席で卒業し、キングレコードより「乙女十八」で歌手デビュー。同年の10月発売の「出征兵士を送る歌」の吹き込みに参加。その後も、流行歌や軍国歌謡を吹き込む。一方、本名の井口とみ子の名でクラシック歌曲(ソプラノ)の舞台にも立った。

ラジオ体操の主題歌やラジオ歌謡の数々など、NHKラジオとSPレコード全盛時代を代表し、民放テレビの開局段階まで第一線で活躍した。

1951年結婚を機に藤沢市鵠沼に居を構え、自宅に「井口小夜子音楽研究所」を開設。また、子どもたちの音楽教室「キングさゆり会」で後進の育成に努めた。

1961年（昭和36年）には、NET放送のドラマ「新諸国物語 紅孔雀」主題歌、「紅孔雀の歌」を歌いヒットさせている。

一方、(財)藤沢市芸術文化振興財団の評議員として、地元の芸術文化の振興にも終生貢献した。

2003年（平成15年）11月9日、急性心不全で死去。享年89。

＊急性呼吸不全のため神奈川県鎌倉市の病院で死去、８９歳。東京都出身。自宅は神奈川県藤沢市鵠沼桜が岡４の４の８。葬儀・告別式は１２日正午から藤沢市大庭３７６１、藤沢市斎場で。喪主は長男田沼英明（たぬま・ひであき）氏。　　１９３９年に「乙女十八」でデビュー。歌謡曲、童謡、戦時歌謡など幅広い分野で活躍した。代表曲に「紅孔雀の歌」や「月見草の花」など。

　主な曲

すずめの学校　清水かつら：詩　弘田竜太郎：曲

みかん咲く丘　　加藤省吾　詩・海沼実　作編曲）

＊現在では「みかんの花咲く丘」が、正式名のようです。

乙女十八　　不破修一郎 ：詞　細川潤一：曲　昭和十一年
曠野の曲　　島田芳文：詞　細川潤一：曲　（樋口静雄・井口小夜子）
出征兵士を送る歌
紅孔雀の歌
港娘　　松坂直美：詞　島口駒夫：曲
ねんねのお里　　野口雨紅：詞　三界稔：曲 昭和十七年

　１９３７年、発表の「別れのブルース」。この歌の舞台となっているヨコハマは、私が昔、住んでいた街から、電車で１時間くらいの所だった。子供だったので、半額とはいえ電車賃が用意できず、ごくたまにしか行けなかったが、憧れの街だった。子供達にとって、ヨコハマの、そのモダンで明るい、港町のイメージは、主に美空ひばりの歌によって、形成されていた。淡谷の歌も、ラジオやあちこちの商店街から、年じゅう流れてはいたが、内容が大人すぎたのだ。子供には、理解しにくい内容なのだ。
（窓をあければ　港がみえる　メリケン波止場の灯が---むせぶ心よ　切ない恋よ　踊る---）
単純にいえば、大人の男女の愛と別れの物語なのだが。しかも、定番のマドロス物。しかし、この定番を、淡谷は歌唱の魔法で、深遠な物語にかえる。淡谷が亡くなったあと、気づいたのだが、彼女の歌唱は、ともかく深いのだ。基本がクラシックの発声のせいか、耳ざわりのよい声とはいえないが、わづか３分ていどの曲のなかで、通俗を深淵に、ひきずりこむ。これほどの技量をもった歌手は、稀有といっていいであろう。
（収集プロフィール）
淡谷 のり子（あわや のりこ、本名：淡谷のり、女性、1907年8月12日 - 1999年9月22日）は、青森県青森市出身の歌手。日本のシャンソン界の先駆者であり、代表曲から「ブルースの女王」と呼ばれる。デビュー当初は、綺麗なハイトーンで素直な歌唱だったが、やがて、妖艶なソプラノで昭和モダンの哀愁を歌った。最近では音楽的な側面から「淡谷のり子＝ブルース」という表現に【異議あり】という意見も少なからず見受けられるようになってきた。終生変えることのなかった津軽弁を話す歌手として知られた（正確に言うと、話す言葉は標準語なのだが、イントネーションが訛っていた）。
略歴
1907年、青森の豪商「大五阿波屋」の長女として生まれる。1910年の青森市大火によって生家が没落。10代の頃に実家が破産し、1923年に母と妹と共に上京。東洋音楽学校（後・東洋音楽大学、現・東京音楽大学）ピアノ科に入学する。後に荻野綾子に声楽の資質を見出されて声楽科に編入。オペラ歌手を目指すためクラシックの基礎を学んだ。家がだんだんと貧しくなり、学校を1年間休学して絵画の裸婦のモデルを勤めるなどして生活費を稼いだ。淡谷をモデルにした「裸婦臥像」は二科会に出展された。その後、復学しリリー・レーマンの弟子である柴田稲子の指導を受け首席で卒業した。春に開催されたオール日本新人演奏会(読売新聞主宰）では母校を代表して「魔弾の射手」の「アガーテのアリア」を歌い「十年に一人のソプラノ」と絶賛される。
世界恐慌が始まる1929年の春に卒業。母校の研究科に籍を置く。母校主宰の演奏会でクラシックの歌手として活動する。クラシックでは生計が立たず、家を支えるために流行歌を歌う。1930年1月、新譜でポリドールからデビュー盤「久慈浜音頭」が発売。キングでも吹込みをはじめる。
当時、佐藤千夜子の活躍以来、奥田良三、川崎豊、内田栄一、四家文子ら声楽家の流行歌の進出が目立っていた。1930年6月、浅草の電気館のステージに立つ。映画館の専属となりアトラクション等で歌う。当時、東洋音楽学校からは青木晴子、羽衣歌子らが流行歌手として活躍していたが

、東京音楽学校出身の声楽家が歌う流行歌よりも低い価値で見られていた。淡谷は流行歌手になり、低俗な歌を歌ったことが堕落とみなされ母校の卒業名簿から抹消された(後年復籍)。
1931年コロムビアへ移籍。古賀メロディーの「私此頃憂鬱よ」がヒット。A面は「酒は涙か溜息か」。歌唱者の藤山一郎は、当時東京音楽学校の学生で、将来を嘱望されていた。卒業後、ビクター専属藤山一郎（声楽家・増永丈夫）となる。後にテイチクーコロムビアを経て数々のヒットを飛ばし、淡谷のり子とは音楽上の盟友である。淡谷はコロムビアでは映画主題歌を中心に外国のポピュラーソングを吹込む。これらの楽曲は、昭和モダンの香りを漂わせていた。1935年の「ドンニャ・マリキータ」はシャンソンとしてヒットし、日本のシャンソン歌手の第1号となる。日中戦争が勃発した1937年に「別れのブルース」が大ヒット。ブルースの情感を出すために吹込み前の晩酒・タバコを呷り、ソプラノの音域をアルトに下げて歌う。その後も数々の名曲を世に送り出し「淡谷のり子」の名をとどろかせる。「もんぺなんかはいて歌っても誰も喜ばない」「化粧やドレスは贅沢ではなく歌手にとっての戦闘服」という信念の元、戦争中に禁止されていたパーマをかけ、ドレスに身を包み、死地に赴く兵士たちの心を慰めながら歌い送っていた。英米人の捕虜がいる場面では日本兵に背をむけ彼等に向かい敢えて英語で歌唱する、恋愛物を多く取り上げる等、当局に睨まれながらも歌い手としての気骨を見せ、その結果書かされた始末書は、数センチもの厚さに達したとのことである。
戦後はテイチク、ビクターで活躍。やがて、ファルセット唱法になる。声楽の基礎がしっかりしてるので、胸声一本ではなくハイトーンを失わないところに歌唱技術の深さがあった。晩年はオーディション番組の審査員やバラエティ番組などに出演する。
信念のある生き方と、お嬢様育ちらしい天真爛漫さから、ストレートな物言いを行い物議を醸すことも少なくなかった。反面、淡谷を慕う歌手も多く、ディック・ミネや越路吹雪らに「姉さん」と呼ばれていたという。また後輩の美川憲一などと親交が深かった。
1985年の「淡谷のり子・区民のための平和コンサート」、1990年の新谷のり子と「甦れ、地球」を開く等、平和を願うコンサートを数多く開いたが、1999年歌に捧げてきた生涯に幕を閉じる。
エピソードなど
＊淡谷の事をよく知らずに知人の紹介などで会いに来た初対面の礼儀知らずな一般人の若者に対してもとても礼儀正しく、楽屋などで椅子に腰掛けていなくてはならない体調でもわざわざ立ち上がって先に丁寧な挨拶をする人でもあった。
賞歴
1971年: レコード大賞特別賞
青森市の名誉市民（4人目、女性では初）
代表曲
夜の東京（1929年）
私此頃憂鬱よ（1931年）
巴里祭（1936年）
暗い日曜日（1936年）
別れのブルース（1937年）

人の気も知らないで（1938年）
雨のブルース（1938年）
夜のプラットホーム（1939年　録音は済ませたものの、発売禁止となる）
満州ブルース（1940年）
たそがれのマニラ（1944年）
嘆きのブルース（1948年）
君忘れじのブルース（1948年）
人の気も知らないで（1951年）
雨のプラットホーム（1954年）
著書
私のいいふりこき人生: 著者:淡谷のり子、海竜社（1984年）
淡谷のり子ーわが放浪記： 日本図書センター （1997年）
その他
菊池清麿「人物昭和流行歌史」「昭和モダンの哀愁ー妖艶のソプラノ淡谷のり子」(『SPレコード』第50ー53号）

渡辺　はま子

渡辺は、「シナの夜」「桑港のチャイナ街」など、１０数曲の、名曲を残した。その社会的大きさ戦後に現われた、美空ひばり、に匹敵する巨星歌手といっていい。
　代表曲と言われている「蘇州夜曲」は、１９４０年発売。チャイナ風のテイストに、時間を突き抜けるような、渡辺の歌唱。音楽的素養をフル回転させた、素晴らしい。歌謡曲というよりも、セミ・クラシックの抒情曲といっていい出来ばえだ。渡辺の歌唱も、音楽的素養をフル回転させた、素晴らしい出来だ。
　（夢の舟歌　恋の歌　水の----おぼろの月に　鐘が鳴ります　寒山寺）
　すべてが、名曲のラインを、軽がると超えている、稀有な唄といえよう。特定の恋の歌、というよりも、蘇州というイメージの提示のなかに、大きな浪漫を閉じ込めた歌、といっていい。
（収集プロフィール）
渡辺はま子（わたなべはまこ、1910年（明治43年）10月27日 - 1999年（平成11年）12月31日）は戦前から戦後にかけて活躍した日本の流行歌手。神奈川県横浜市出身。生涯横浜で過ごした。愛称は「おはまさん」。
経歴
横浜生まれで横浜育ちの、文字通りハマっ子の渡辺は美貌で知られた歌手であった。祖父がアメリカ人でクオーターであった。なお渡辺の夫は英国人とのハーフである。
昭和8年（1933年）「武蔵野音楽学校」（現、武蔵野音楽大学）卒業。卒業後は、横浜高等女学校で音楽教師をしていたが、同年にポリドールの歌手テストを受け、「最上川小唄」を吹込むが発売されなかった。ポリドールでは結局この1曲のみ。音楽学校在学中に指導を受けた徳山璉の推薦もあり、同年12月にビクターから「海鳴る空」でデビューした。
昭和9年（1934年）、日比谷公会堂で開催されるビクター歌手総出演のアトラクション「島の娘」に主演のはずであった小林千代子が突然失踪する。急遽 渡辺が代役に抜擢され、漁師の娘を好演。以降ビクター在籍中はアトラクションに度々出演し、藤山一郎や古川ロッパらの相手役を務めている。
同年のPCL映画「百万人の合唱」に出演するために、勤務先の横浜高女を休んだことが問題になり、保護者らが学校に抗議。これが新聞沙汰となる。昭和10年の秋には教職を辞し、渡辺はビクターの流行歌手に専念することとなる。
同年、夏川静枝の朗読によるハンセン病患者に取材した放送劇「小島の春」のラジオ主題歌「ひとり静」を歌い、初のヒット曲となる。この曲をきっかけに、渡辺は終生を通じ、ハンセン病患者の病院の慰問を続けた。特に岡山愛生園では、療養所歌として今も愛唱されている。
昭和11年（1936年）「忘れちゃいやヨ」をレコーディング。作曲者の細田義勝に歌中の「ネエ」の部分の歌い方を何度も指導され、本人は辟易して歌ったが、その直後に早稲田大学野球部の応援歌の発表会に招かれ歌ったところ、観客に大受けしたため、渡辺自身もヒットする予感が感じられたという。ヒットの兆しが見えた発売から三ヵ月後、政府の内務省から『あたかも娼婦の嬌態を眼前で見るが如き歌唱。エロを満喫させる』とステージでの上演禁止とレコードの発売を禁

止する統制指令が下る。
ヒットを惜しんだビクターは改訂版として「月が鏡であったなら」とタイトルを変更し歌詞の一部分を削除してレコードを発売、大人気を得る。しかし、このヒットによりこの種の曲『ネエ小唄』ブームが起こり、「ああそれなのに」「ふんなのないわ」「憎いわね」などの類似曲を続々と生み出す結果となる。この状況を憂えた軍部が主導になり、日本における流行歌を浄化する目的として「国民歌謡」を誕生させるキッカケとなる。渡辺も続いて、「とんがらかっちゃ駄目よ」をヒットさせるが、ビクターの内紛と一連のネエ小唄騒動で、1年間の休業をすることになった。
昭和12年（1937年）4月コロムビアに移籍。翌年、皮肉にも流行歌の浄化を統制された国民歌謡の「愛国の花」が渡辺にとっての移籍後のヒット曲第一号となる。この頃から、戦時下の上海など戦地への慰問も積極的に行うようになり、「シナの夜」「広東ブルース」などの大陸を題材にした曲目が徐々に増え、人々からは『チャイナ・メロディーの女王』『チャイナソングのおハマさん』と呼ばれ支持された。そのため、慰問先の満州から松平晃が持ち帰った名曲「何日君再来」も渡辺が唄い、レコードが日本で発売されることになった。
さらに当時はテイチクの専属であった満州の大陸女優、李香蘭主演の大ヒット映画の主題歌をコロムビアから国内で日本語で発売する際には、渡辺がレコーディングした。「いとしあの星」「蘇州夜曲」といった曲は渡辺、李両者の持ち歌として大ヒットを記録している。
＊昭和16年（1941年）、渡辺が新聞に掲載された記事に感動し、是非とも歌謡曲としてレコード化したいと台湾総督府に申し入れレコード・リリースした「サヨンの鐘」もヒット。その後も「風は海から」「花白蘭の歌」など、日本のトップ歌手として活躍。スクリーンにおいても既に昭和12年に新興映画「庭の千草」に主演していたほか、東宝映画「ロッパ歌の都に行く」「ロッパの新婚旅行」「エノケンの孫悟空」などに出演している。特に「ロッパの新婚旅行」では、声楽家役として出演し、クラシックの歌曲を原語で高らかに歌い上げているのは、元音楽教師の面目躍如であった。
＊戦地への慰問として訪れていた大陸の天津で終戦を迎え、捕虜として1年間の収容所生活を余儀なくされる。が、その間も渡辺はま子は、日本人捕虜仲間を美しい歌声で慰めることを忘れなかった。日本へ帰国後、外地から引き揚げてきた兄とようやく再会する事ができるが、不慮の病に失う不幸に見舞われた。
＊昭和22年（1947年）に結婚し、歌手活動の傍ら横浜で花屋を営みながら、「雨のオランダ坂」「東京の夜」といったヒット曲を飛ばし続けた。
＊昭和25年（1950年）、敗戦後初めての日本人の芸能使節団として、小唄勝太郎、三味線けい子らとともに祖父の眠るアメリカ各地を公演。移民の日本人らからも好評を得る。帰国後は、古巣のビクターに移籍し、「火の鳥」「桑港のチャイナタウン」など後に代表曲となるヒット曲を出す。
＊昭和27年（1952年）、NHKラジオ番組「陽気な喫茶店」を司会していた松井翠声の元に送られてきたフィリピンの日本人戦犯が作詞作曲した曲「ああモンテンルパの夜は更けて」を渡辺が改めてレコード化。日本政府の復員局と渡辺の奔走でモンテンルパの収容所へ慰問コンサートが

実現。フィリピン政府当局に減刑、釈放を嘆願し、当時のフィリピンの首長であったキリノ大統領に日本人戦犯の釈放を決断させ全員の日本への帰国が実現したことは、渡辺はま子の歌手人生におけるハイライトといえる。
＊NHK紅白歌合戦に8回出場。昭和26年（1951年）の第1回紅白では、紅組のトリを務めた。昭和40年代には、東海林太郎らとともに歌手協会の発展に尽力し、昭和48年には紫綬褒章を受章。暮れには、同年に受賞した藤山一郎とともに紅白歌合戦に特別出演し、「桑港のチャイナタウン」を熱唱している。
＊昭和56年、勲四等宝冠章を受賞。テレビやラジオになお活躍を続けたが、夫が亡くなった昭和60年以降は認知症が進行し、昭和63年テレビ東京の番組「年忘れにっぽんの歌」で生放送中に歌詞を忘れてしまったアクシデントをきっかけとし平成元年に引退…と言われることが多いが、それはテレビ/ラジオに限った話であったらしく、舞台等ではその後も歌い続けてた。平成2年6月19日には水戸市の県民文化センターでの、地元銀行主催〝年金受給者の集い〟に特別出演し、往年のヒット曲を数曲歌った。
＊永らく自宅療養を続けていたが、最晩年は寝たきりの生活であった。亡くなる5日前の平成11年のクリスマスの日、長女は渡辺にモンテンルパ慰問の際に録音したテープを聞かせると、普段は病気のため表情を変えることのなかった渡辺が長女の言葉に何度も頷き、一筋の涙を流したという。遺言に従い親族だけで密葬を済ませ、平成12年1月、松が明けた頃、昭和を駆け抜けた社会派の歌手・渡辺はま子の訃報がひっそりと知らされた。
＊文献：『モンテンルパの夜は更けて　気骨の女・渡辺はま子の生涯』（中田整一：NHK出版）
代表曲
「忘れちゃいやヨ」（昭和11年）
「とんがらかっちゃ駄目よ」（昭和11年）
「愛国の花」（昭和13年）
「支那の夜」（昭和13年）
「何日君再来」（昭和14年）
「蘇州夜曲」（昭和15年）霧島昇
「サヨンの鐘」（昭和16年）
「雨のオランダ坂」（昭和22年）
「桑港のチャイナ街」（昭和25年）
「ああモンテンルパの夜は更けて」（昭和27年）宇都美清
「サンライズ・イン・ヨコハマ」（昭和58年）
受賞歴
紫綬褒章（昭和48年）
日本レコード大賞特別賞（昭和48・57年）

中野　忠晴

　１９３５年、発表。明治～昭和２０年を対象にした「想い出の戦前・戦中歌謡大全集」（東京カルチャーＣ）には、全２４０曲中、中野は３曲収録されている。他に、ほかの歌手との共作が３曲ある。歌手としての現在の知名度に比べて、かなりの量である。中野の唄は、ラジオで４、５回聴いたことがあるが、そのキャリアについては、ほとんど知らないのだ。
　なぜか、カントリーのイメージがあるが、歌謡曲、和製ポップス、ラテン、戦時歌謡など、広い分野を、高い水準でこなしている。唄の実力は、第一級といっていい。
　「小さな喫茶店」
　それは去年のことだった　星のきれいな宵---過ぎた日のことが浮かぶよ　この道を　歩くとき---
-
（収集プロフィール）
中野忠晴 （なかの　ただはる、1909～1970） は愛媛県出身の歌手・作曲家。
　実父がキリスト教会の牧師（オルガン演奏家）だった影響もあり、地元キリスト教会の賛美歌合唱隊に所属していた。武蔵野音楽学校（現・武蔵野音楽大学）在学中にニッポンレコードでレコードの吹き込みのアルバイトをしていた。
＊以下は中野マサハル氏による論述「中野忠晴の功績とその評価（主に戦前期から）」の概略の引用です。
＊中野は戦前と戦後の活躍ぶりに比べて、現代人による知名度が不当に低い歌手の1人である。中野が戦前築き上げてきたジャズ・ソングやジャズ・コーラスが、太平洋戦争によって消滅させられてしまい、戦後のジャズ・ブームやコーラス・ブームの際にも全く顧みられることがなかったという、不運な側面がある。しかし、その最大の理由は、戦後簡単に歌手業を止めてしまったことにある。戦前にかなり活躍した流行歌手でも、1960年頃までに亡くなってしまったり芸能界を引退してしまったりした徳山璉、上原敏、楠木繁夫、松平晃、佐藤千夜子らは、当時の活躍に比べて不当に現代人による知名度が低い。これは、1960年代後半に広がる懐メロブームに乗ることが出来なかったからである。戦前派の歌手は1950年代後半以降、ほとんどの人が流行歌界の第一線から退いてしまった。しかし、だからといって歌手を引退する人が多かったわけではなく、大半の歌手は、ヒットしないながらも新曲を出し続けたり、地方巡業に精を出したりして細々と生活していた。しかし、そのうちに再び戦前派の歌手に日の目が当たる時代がやってきた。それが1960年代に広がった懐メロブームである。特にこの懐メロブームを引っ張っていったのが、1968年から1974年までテレビで放送された、東京１２チャンネルの番組、「なつかしの歌声」である。この番組は、戦前や昭和20年代に活躍した歌手に出演してもらい、懐かしい歌を歌ってもらうというものであった。この番組が懐メロブームに火をつけたといっていい。この恩恵をうけたのが半ば引退同然だったオールド歌手達だった。この番組により、戦前派の歌手が再び脚光を浴び、再評価されたわけである。終戦後、ジャズ・ソングを歌える歌手やジャズメンたちは進駐軍の所へ行って歌を歌ったりジャズを演奏したりして生活していた。中野忠彦氏は、自分の父親のことを、ジャズ・ソングと歌謡曲のどちらにも徹することが出来ずに、中途半端な位置で一生

を終えてしまったと評している。「すぐ忘れられる流行歌ではなく、一日でも長く人々に覚えてもらえる、そんな曲を作りたい」（おもいっきりテレビ, 1998）。 しかし、戦前の日本で明るく朗らかなジャズ・ソングを歌い、日本初の本格的なジャズ・コーラス・グループを指導したという中野の功績は、決して色あせることはない。1934年にコロムビア（ナカノ）リズムボーイズという中野が培ったジャズ・コーラス・グループをバックに歌った「山の人気者」が大ヒットし、ジャズコーラスのジャンルを日本に植えつかせた。戦後は主に作曲活動を中心にして当時の人気歌手である江利チエミ、松島詩子、若原一郎、三橋美智也、春日八郎らに楽曲を提供し続けた。1970年2月肺がんのため60歳で永眠する。

1958年に若原一郎の歌でヒットした、「おーい中村君」は当時23万枚売れたという。この歌は数年前にテレビＣＭでも使用されたことがあり、現代でも多くの人が知っているであろう。この歌の作曲者が中野忠晴である。中野はこの歌の他にも、若原一郎・春日八郎・三橋美智也らのための歌を作曲し、昭和30年代の日本歌謡界にヒットを連発させた。

中野は戦前は「山の人気者」「チャイナ・タンゴ」などのモダンな歌を歌ってヒットさせた流行歌手であったのだ。そもそも、筆者が中野に出会ったのは、まず戦前の歌手時代を通してであった。市の中央図書館に所蔵されている20枚組のＣＤ『オリジナル盤による昭和の流行歌』（日本コロムビア）を聞いて、中野の存在を知った。中野の明朗で甘い美声により歌われているジャズ・ソングに心を打たれた。また、中野が日本初の本格的なジャズ・コーラス・グループであるコロムビア・ナカノ・リズム・ボーイズを養成・指導したということを知ったのもこの時であった。

戦前の日本で明るく朗らかなジャズ・ソングを歌い、日本初の本格的なジャズ・コーラス・グループを指導した中野は、ＣＤやＬＰの解説書では、戦前の日本にジャズを広めたパイオニアとして一定の評価がされている。「三代の歌手ベスト100」では徳山璉や上原敏、二村定一、松平晃、楠木繁夫といった、中野同様に戦後は歌手として活躍できなかった人物まで載っているにもかかわらず、中野の項目は無い。藤浦洸の『なつめろの人々』でも同様に、中野の項は無い。このように歌手としての中野は戦後、すっかり忘れ去られてしまったわけであるが、戦前は「淡谷のり子よりも有名なくらいであり、知らない人はいなかった」そうである。

中野はコロムビアでは当初、ビクターの徳山璉の対抗馬とされていた。中野の最初の吹き込みは、1932年6月新譜の古賀政男作編曲の「夜霧の港」である。当時のレコード歌手は、藤本二三吉、市丸などの芸者歌手を除けば、歌謡曲系統の歌手は誰もがジャズ・ソングを吹き込んでいたと言ってもよい。藤山一郎や松平晃を始め、楠木繁夫や東海林太郎までもがジャズ・ソングを吹き込んでいた。中野も彼らの多くと同じく音楽学校の出身者で、もともとは歌謡曲の類も相当吹き込んでいる。コロムビア・リズム・ボーイズというジャズ・コーラスと組んだ初めての作品でもあり、「山の人気者」は大ヒットして、中野の名を有名にした出世作となった。

ジャズシンガーの先駆者である二村の頃のジャズ・ソングはジャンルがあいまいであったし、技術的にもまだまだ未熟で、ジャズというよりはただのダンス・ミュージックに過ぎなかった。中野の活躍した1935年ごろは、日本でもジャズ・ソングがジャズとして水準が上がってきた頃であり、中野自身技術の高いジャズ・ソングを歌っている。中野は1930年代にディック・ミネと並

んで、日本人歌手としてジャズ・ソングを歌い、日本のジャズ・ソングの水準を向上させた功績があるといえる。声質が元来明朗軽快であるために、歌う歌も明るく朗らかで、若者の青春を讃歌するというような明るい内容のものが多くなっているのである。この傾向は1934年以降ジャズ・ソングを主に吹き込むようになってからも継承されており、中野はジャズ・ソングの持つ明るい部分を日本人にアピールしたといえる。これに対し、ディック・ミネは、日本語の歌詞をローマ字に書き改めて英語の発音で歌ったり、間のつなぎをジャズ風にしたりすることで、バタ臭く異国情緒を匂わせるジャズ・ソングを歌っていた。ディック・ミネや二世歌手のジャズ・ソングが、いかにも外国の歌を歌っていますというようなバタ臭さを匂わせるものであったのに対して、中野のジャズ・ソングは、その甘い歌声と「ぴったりとした日本語歌詞がはめられていたので、当時の一般大衆は、日本人の作ったモダンな流行歌だと思って歌っていた」（南, 1993a, p.11）。このように中野は、本来外国の歌であったジャズ・ソングを、日本の大衆に日本的に消化させるという功績をもたらした。

中野はジャズ・ソングを歌うようになって以降、歌手としてだけではなく、ディレクターとしてもコロムビア社と契約をしていた。当時のディレクターは、作曲家（音楽系）と作詞家（文学系）の人が半々くらいの比率で兼業していた。しかし、歌手がディレクターを兼ねるというのは珍しいことであった。なぜなら、作曲家や作詞家は実際に歌を作っていく人達なので、レコードの企画をしていくのに適していたのに対して、歌手は完成した歌を歌うだけの役割に過ぎなかったからである。中野の作詞・訳詞は特に、リズム・ボーイズ、リズム・シスターズのためになされた。計28曲の作詞・訳詞のうち、リズム・ボーイズやリズム・シスターズがからんでいる曲は26曲である。中野は自分の歌うジャズ・ソングと同じく、訳詞に関しても、「当意即妙な歌詞をはめこみ、全く違ったタイトルをつけて日本的に消化してしまう"特技"をもっていた。（南, 1993b, p.45）ヒットを飛ばし戦前のうちから第一線で活躍していた歌手群を(Ａ)、戦前に歌手デビューはしたものの第一線で活躍するようになったのは戦後だという歌手群を(Ｂ)、戦後デビューした歌手群を(Ｃ)とする。(Ａ)の歌手のうち、松平晃や楠木繁夫、東海林太郎といった人物は戦後ヒット作に恵まれなかったが、大半の(Ａ)の歌手は1951、2年くらいまでヒット作に恵まれ、第一線で活躍していた。(Ｂ)には岡晴夫、笠置シズ子、奈良光江、池真理子、近江俊郎、並木路子、竹山逸郎などがいる。(Ｂ)の歌手も1951、2年くらいまでは次々とヒット曲を出し、第一線で活躍していた。しかし、1952、3年くらいからは美空ひばり、江利チエミ、鶴田浩二、春日八郎ら(Ｃ)の歌手の台頭により、戦前デビューの(Ａ)(Ｂ)の歌手達は新作がなかなかヒットしなくなり、1950年代後半ともなると、(Ａ)(Ｂ)の歌手の多くが新作の本数自体を減らして第一線からは退き、地方巡業などに専念するようになった。

中野が戦後流行歌界に復帰したのは1952年という、戦前派と戦後派の歌手の過渡期にあった。(Ａ)の群に入る中野がこの時期に歌手としてヒットを出すのは至難の業であったといえる。「山小舎に月が登れば／アリゾナのバンジョー弾き」がヒットしなかったことを受けて、歌手兼作曲家として契約していた中野は、以降は作曲家業だけに専念するようになった。戦前派の歌手の多くが1950年代後半以降に第一線で活躍できなくなってしまったのに対して、作曲家・作詞家は、自分の作品を戦後派の歌手に歌わせることでヒットを量産し続け、1950年代後半以降も第一線で活

躍することができた。このように中野の作曲は技術的には優れたものであったが、レコードがヒットすることはなかった。なぜなら、あくまでも昭和10年代の水準のジャズ・ソングでしかなかったからだ。戦後でも、進駐軍のジャズがまだ軍のキャンプ内に閉じ込められていた1950年くらいまでだったら、それでもヒットしたかもしれない。しかし、中野が復帰した1952年はちょうど日本の占領体制に終止符が打たれ、進駐軍のキャンプに閉じ込められていたジャズが一気に噴出して、日本全国で空前のジャズ・ブームが巻き起こった年である。中野の作曲する「昭和10年代のジャズ・ソング」がヒットするはずはなかった。

中野の最初の歌謡曲のヒットは、1955年5月新譜で春日八郎が歌った「妻恋峠」である。春日の「男の舞台」、三橋美智也の「達者でナ」、若原一郎の「おーい中村君」など、戦後デビューした歌手に歌わせた歌謡曲がヒットした。特に「おーい中村君」は当時23万枚売れるほどの大ヒットとなった。

中野は歌謡曲のメロディーの中に、隠し味としてジャズ・ソングのリズムを使っていたのである。 このように「妻恋峠」がヒットしてからの中野は、歌謡曲を中心にヒット作を堅実に作り続けた。

　中野は1970年2月19日、肺ガンのため東京の自宅で死去、60歳だった。新聞には、翌日の在京各誌に訃報として200～300字、戦前の歌手時代と戦後の作曲家時代が書かれた。

松平　晃

「サーカスの唄」は、１９３３年の発表。子供のころ、ラジオから流れる、この唄を、何回か聞いたことがある。淋しく、切なくなるような唄で、全国を流れ歩く、旅芸人の、厳しい生活を、子供ごころに、思ったものだ。
（旅のつばくろ　淋しかないか　おれもさみしい---遠くはなれて　テントで暮らしゃ　月が冴え---）
　歌詞のなかには、クラリオネット、ごしょ、とんぼがえり、つばくろ、などすでに死語に近い言葉も、多く使われている。このため、いまの若い人達には、いまいちピンと来ない、唄かも知れない。しかし、昭和４０年ごろまでは、旅芸人ではなくても、こういう、浮浪者や犯罪者ではないのだが、その日暮らし、流れの労働者のような人達が、実際にたくさんいたのだ。私の住んでいた、小さな町にも、何人かのそういう方がいて、ときに噂を聞いた。その深い、辛さ切なさは、いまの若い人達には、想像もつかないことであろう。
（収集プロフィール）
松平晃（まつだいらあきら　1911年6月26日 - 1961年3月8日）は、昭和期の流行歌の歌手。本名は福田恒治（ふくだつねはる）。
　SPレコード歌謡の揺籃の時代から全盛期にかけて、「佐賀っぽ」という気質を前面に出し、青春のブリリアントな美質と、野放図な大胆さでスターダムにのし上がった。芸名の「松平晃」は「松平の殿様のように豊かな生活がしたい」との思いからつけたとの説がある。
当時の歌手の中では抜きんでた容貌の持ち主といわれ、その端正な容姿と甘い抒情的なバリトンの歌声が、多くのファンを魅了した。
　一方、歌以外でも機械いじりを得意とし、スポーツカーを乗り回し、自分で録音器を作って公演先からボイスレターを送ったり、テーブルマジックに長けていたりと意外かつ多彩な才能の持ち主でもあった。
　同時期にデビューした歌手の楠木繁夫とは親友であり、1956年（昭和31年）に楠木が自殺した際には、涙ながらに「女の階級」を歌い出棺を見送ったという。
経歴
コロムビア以前
　1911年（明治44年）6月26日、佐賀県佐賀市の福田家に生まれる。
　小学校の頃から歌が好きで、佐賀中学卒業後「音楽で身を立ててはどうか」と兄に勧められたこともあって音楽の道を志す。しかし旧家の出身であったこともあって父親に猛烈に反対されてしまい、兄の必死のとりなしでようやく許可がおり、単身上京。
　昭和5年の春、武蔵野音楽学校（現：武蔵野音楽大学）に入学。1931年（昭和6年）、東京音楽学校（現：東京芸術大学）師範科に転学、苦学をしながら声楽の基礎を学んだ。だが実家が借金の連帯保証人となっていたあおりを受けて邸宅や田畑を手放す不運にみまわれた上、病身の兄の治療費を捻出する必要があったため、仕送りが途絶えてしまった。苦境に立った福田青年は、同校の先輩・増永丈夫に相談する。

増永丈夫は声楽本科在学中で、将来を嘱望されていた。また、藤山一郎の芸名で古賀メロディーを一世風靡させ、流行歌手として声価をえていた。増永は、ニットーレコードで藤井竜男の名前でもレコード吹込みをしていたが、停学処分によって吹込みができなくなっていたことから、代わりとして福田青年をニットーレコードに紹介したのである。テストでは、増永がピアノ伴奏を受け持っている。

1932年（昭和7年）に「大川静夫」と名乗り、「夏は朗らか」「讃えよ若き日」でレコードデビュー。「夏は朗らか」は江口夜詩作曲。その甘い歌声はたちまち人気となり、福田青年は「池上利夫」「松平不二男」「小川文夫」などの変名を使い、ニットーの他ポリドール、キング、タイヘイ、テイチク、パルロフォンでアルバイト吹込みを続けた。同年11月にはポリドールから新譜発売された「忘られぬ花」がヒット。このときは池上利夫の名前を使っている。

学生歌手として活躍するが、当時使用した変名はニットーが「大川静夫」「松平利夫」（最末期のみ）、ポリドールが「池上利夫」、キングが「松平不二男」、タイヘイが「小川文夫」（同時期に楠木繁夫も使用）、テイチクが「松平不二夫」、パルロフォンが「松平不二男」「柳沢和彦」であった。

コロムビア時代前半（1933～36年）

コロムビアでの吹込みは1933年（昭和8年）３月新譜「かなしき夜」「港の雨」からである。いずれも江口夜詩作曲。コロムビアは古賀政男作曲の「サーカスの唄」の吹込みを、藤山一郎で予定していた。だが、藤山一郎はビクターに入社。そこで、コロムビアは、松平晃を抜擢し吹込ませた。同社は藤山一郎のその対抗馬ということで、後輩である松平に期待したのである。その期待に応える形で松平は古賀政男の作曲・「サーカスの唄」でA面をしのぐ大ヒットを飛ばし、一気にスターダムの地位へ上りつめる。

同年11月、松平は東京音楽学校を中退した。レコード吹込みが学校当局で問題になっており、流行歌手の途を選択した。翌1934年（昭和9年）から正式に「松平晃」として専属契約を結ぶこととなった。コロムビアは、すでに江口夜詩ー松平晃コンビに力をいれており、同年4月に古賀がテイチクに移籍した後は、コロムビアの看板歌手になる。同年1月新譜「希望の首途」、2月新譜「急げ幌馬車」、11月新譜「曠野を行く」がヒットしている。殊に「急げ幌馬車」は旧満州を舞台として放浪の旅人の姿やその恋愛模様を描いた「曠野物」・「大陸歌謡」ブームの火付け役となり、松平自身も青春歌謡と併せ大いに得意とした。

こうして中野忠晴と並びコロムビアの看板歌手となった松平は、1934年（昭和9年）から1936年（昭和11年）にかけて、ビクター→テイチクの藤山一郎、ポリドールの東海林太郎と並び、流行歌の一時代を築き上げることになる。「曠野を行く」で組んだ豆千代とのデュエット「夕日は落ちて」、松竹映画主題歌の「人妻椿」などの大ヒットを続ける一方で、甘いマスクが買われスクリーンにも活躍。日活映画「花嫁日記」をはじめ、新興キネマ「初恋日記」、松竹映画「純情二重奏」、東宝映画「歌えば天国」と数多くの映画にも出演している。

しかし、私生活、殊に恋愛関係では一途すぎる性格が災いしてトラブルが相次いだ。たとえば「花嫁日記」で共演した市川春代に思いを寄せたが、周囲の反対に嫌気をさして自殺未遂を起こしている。また、主演した「初恋日記」では相手役の伏見信子と婚約までしたが、スター同士

のためお互いの生活にすれ違いが多いことや、松平との性格の不一致などのもあり、1年足らずで離婚してしまったことなどがそれである。

コロムビア時代後半（1936～40年）

1936～1938年（昭和11～13年）にかけて、東海林太郎・上原敏のポリドールの道中物、藤山一郎、ディック・ミネ、楠木繁夫らが歌う古賀メロディーのテイチク、江口夜詩一松平晃のコロムビア、佐々木俊一が台頭するビクターと激しいヒット競争が展開した。昭和13年霧島昇・ミス・コロムビアが歌う「旅の夜風」が大ヒットし、コロムビアは映画主題歌で全盛期を迎える。1940年（昭和15年）からは古賀メロディーの第三期黄金時代を迎え、松平晃の人気も翳りが見えてきた。

松平は、淡谷のり子の「別れのブルース」のB面「泪のタンゴ」など甘い歌声で好評を博したが、昭和12年10月新譜で発売された「露営の歌」が大ヒットしたことにより、甘い抒情的なバリトンに定評のあった松平は、戦時歌謡の吹込みが多くなる。またこの頃より戦地慰問に訪れたり、古川緑波率いる「ロッパ一座」の寸劇に出演したり、舞台にも活躍する。だが、霧島昇の台頭により次第に松平の人気も翳りが見え、1938年（昭和13年）以降はスターダムからの凋落を見せ始める。

1938年（昭和13年）、伊藤久男、赤坂小梅、渡辺はま子、服部良一らと中国大陸を慰問した際、現地で流行していた「何日君再来」を採譜して持ち帰り、自らレコーディング。だが、コロムビアの方針で渡辺はま子盤が発売され、松平晃吹込みのレコードは発売されなかった。また新聞記事に感動して「石と兵隊」を自ら作曲したり、ポピュラーソング「夜の雨」を自ら歌詞を付けてレコーディングしたりしてもいる。さらにそこに打撃を与えたのが1939年（昭和14年）４月の藤山一郎のテイチクからコロムビアへの移籍である。松平は、翌昭和15年（1940年）、「幻の故郷」を最後に専属契約を解消、コロムビアを去った。

コロムビア以後（戦中）

コロムビアとの専属を解消した松平は、1941年（昭和16年）、タイヘイレコードに移籍する。自らの作曲作品「妹よ」などを吹込んだが、スローワルツの感傷曲は戦意高揚に合わずヒットしなかった。1942年（昭和17年）にはタイヘイがキングレコードに吸収され、フリーとなった。

これ以降、松平は慰問活動に重点を置くようになり、慰問団を結成してシンガポールや中国大陸など海外にも赴いていたため、レコードは1943年（昭和18年）にテイチクで吹込んだ「走れ日の丸銀輪部隊」の１枚が戦前・戦中では最後となった。

なおこの時に松平の前唄を務めたのが、当時新興キネマの女優であった森光子であった。松平は森とともに外地や国内の軍需工場の慰問活動を行っていたのである。

コロムビア以後（戦後）

松平は内地で終戦を迎えた。1945年（昭和20年）暮れの「紅白音楽試合」に出場、「花言葉の唄」を歌う。キング、ポリドールで数曲吹込むがあっまりパッとしなかった。

1949年（昭和24年）、ポリドールで6月新譜「久しぶりだよ」、9月新譜「伊豆のスーベニヤ」「伊東音頭」の３曲を出した後、1950年（昭和25年）キングレコードに移籍。ここで、江口夜詩と再会した。江口は戦後も岡晴夫、小畑実、津村謙らのヒット曲を作曲していた。

同年江口作詞・作曲の「湖畔の灯り」を吹込み、新天地での再起をはかろうとした。この年公演活動で渡航したブラジルで原因不明の血液病にかかり、何度も手術を受けた結果声が荒れ、さらに興行主のミスで日本へ戻れなくなり、約１年半足止めを食らうという不幸な事件に見舞われる。このため、帰国後にはせっかく結んだキングとの専属契約が切れており、結局「湖畔の灯り」がレコード歌手として最後の曲となってしまった。その後は、ラジオ東京開局とともに始まった「素人のど自慢」の審査員を務めたりした。そして、後進の指導に傾注するようになっていく。

1956年（昭和31年）、東中野に松平晃歌謡学院を創立。松平の作曲である「風吹きがらす」でデビューしたテイチクの寿賀太郎をはじめ、ビクターの明石光司、東芝の五月女ひかりなどを育てている。歌謡学院での歌手の育成と並行し、作・編曲活動、また、請われれば往年のヒット曲をステージや放送で歌うなど、細々と活動を続けていたが、その過労がたたり、1961年（昭和36年）２月、歌謡学院の帰途に倒れ、翌３月８日、心筋梗塞症による心不全で49年の生涯を閉じた。霊前では、愛弟子たちが往年のヒット曲「花言葉の唄」を斉唱し、別れを惜しむ人々は厳かな雰囲気のなか歌声を聴きながら花束を捧げた。

おりしも「懐メロブーム」で戦前の歌手が再び脚光を浴びる直前のことで、急逝は惜しまれる。このために現在極度に知名度が低いという、さまざまな意味で不遇なスターである。

とはいえ、没後も彼の業績を偲び、1969年（昭和44年）、藤山一郎の企画で東京12チャンネル「なつかしの歌声」に松平晃を偲ぶ特集が放送され、翌年にはコロムビア創立60周年の企画としてLP「松平晃を偲んで」が発売されている。このLPによって松平晃の歌う「何日君再来」が初めて日の目を見たのであった。

1940年（昭和15年）に結婚した夫人との間に生まれた長女は、作曲家・福田和禾子。彼女は父の母校、東京藝術大学に進学し、父の遺志を継いで、多くの人に口ずさまれる作品を世に送り、「北風小僧の寒太郎」などの作曲を手掛けている。亡父の親友であった藤山一郎は、晩年まで自分の演奏を務めさせた。

藤山　一郎

　「東京ラプソディー」は、１９３６年、発売。大歌手、藤山の代表作のひとつであろう。プロローグのようなメロディーではじまり、はずむようなリズムと、明るい歌声で、流れるように進行していく。
（花咲き花散る宵も　銀座の柳の下で　待つは君ひとり...夢のパラダイスよ　花の東京）
　銀座でのデイト、神田のニコライ堂の鐘、浅草の踊り子、新宿のダンサー、など当時の流行を感じさせる風物を取り込んで、洒落た世界を描きだしている。もちろん、現実には争いや苦いものが溢れていたのだろうが。作詞の門田ゆたかは、そんな事は、百も承知。あえて、華やいだ楽しい世界を描きだしたのだ。つらい現実を、リアルに唄いあげても、大衆の慰めや喜びには、ひとつもならない。このような、唄にしあげることで、大衆はすこしばかり、夢がもてるのだ。作曲は、古賀政男。そのはかり知れない実力には、敬服するばかりだ。
（収集プロフィール）
藤山 一郎（ふじやまいちろう、1911年（明治44年）4月8日 - 1993年（平成5年）8月21日）は、日本の国民的歌手・声楽家・作曲家・指揮者。東京都日本橋蛎殻町出身。本名は増永丈夫（ますながたけお）。本名ではクラシック音楽の声楽家として活動。愛称はピンちゃん。モスリン問屋「近江屋」の三男に生まれ、東京音楽学校（現東京芸術大学音楽学部）に学び、クラシック音楽の正統派歌唱から大衆的なポピュラー音楽まで幅広い分野で活躍した。『酒は涙か溜息か』『丘を越えて』『青い山脈』など多数のヒット作をもち、太平洋戦争戦前戦後を通じ、日本のポピュラー音楽を代表する歌手である。
少年時代
藤山は日本橋長谷川町（現在の中央区日本橋堀留町）に店を出していたモスリン問屋「近江屋」の5人兄弟の末っ子として生まれた。父は増永信三郎、母はゆう。一番上が長女の恒子、二番目が長男の正夫、つづいて次男の文夫、次女八千代、そして三男丈夫であった。父信三郎と姉八千代は丈夫を良く浅草に連れていった。この時、雑誌の物売りや粗悪品を売るテキ屋、アメ屋の売り子などの歯切れの良い口上や売り文句を聴いていたことが、後に歌手・藤山一郎の言葉は明瞭で歯切れが良いと言われる要因となった。
のちに東華幼稚園に入園したが、その腕白ぶりから大塚の女子師範学校（現・お茶の水女子大学）付属幼稚園に1年で転入させられる。この時、お茶の水には作曲家・山田源一郎の甥である山田義男のもとに嫁いでいた姉の恒子が住んでいて、姉との関係で、当時山田源一郎が設立していた日本女子音楽学校（現・日本音楽学校）に毎日のように通い、山田に教えを受け音楽教養の基礎を身に付けていった。
その後慶應義塾幼稚舎に入学。この時女子音楽学校に通っていたことにより、幼稚舎で教鞭をとっていた江沢清太郎の推薦で童謡歌手に選ばれており、『はんどん、何して遊ぼ』『春の野、山の祭り』『はねばし』などの童謡レコードを吹き込んでいる。また同じく慶應義塾普通部で教鞭をとっていた弘田龍太郎に師事、後に東音の1年生のとき『慶應幼稚舎の歌』『普通部の歌』を吹き込んだ。また、変声期の頃には歌を控えヴァイオリンを東音の大塚淳に師事した。幼稚舎時代

の同級生に文学者の野口冨士男、代議士・山本条太郎の息子武太郎、画家の岡本太郎らがいる。ちなみに、普通部卒業の時の成績は、音楽に熱中するあまり52人中51番という惨憺たるものであった。ビリの52番は岡本太郎であった。
慶應普通部時代には次のようなエピソードがある。1927年（昭和2年）、慶應の応援歌『若き血』がつくられたとき、普通部に在学中の藤山（増永丈夫）が学生の歌唱指導をした。慶應の講堂で中学生の藤山が歌い、後から大学生が歌ってようやく覚えた。普通部でも藤山が教室を回って指導した。上級生でも歌えない者は容赦なくしごいた。早慶戦では慶應が早稲田をやぶった。明治神宮野球場では『若き血』の大合唱。興奮の坩堝となった。だが、その後災難が藤山にふりかかった。普通部の5年生に呼び出され、後輩のくせにと、殴られた。鼻っ柱に一発きて、そのまま地面に倒れた。鼻血がでて、これが本当の若き血。藤山は生前この話をよく嬉しそうに話していたという。藤山の普通部時代の青春の一ページである。
音楽学校時代
慶應義塾普通部卒業後上野の東京音楽学校（現・東京藝術大学）に入学。声楽を船橋栄吉、梁田貞、ヴーハーペーニッヒ、音楽理論をクラウス・プリングスハイムに師事。バリトンの声楽家として嘱望された。同級生にはピアノに豊増昇、永井進、水谷達夫、声楽には長門美保ら後の日本のクラシック界を背負った逸材がいた。そのなかでも増永丈夫の才能は群を抜いていた。だが、生家モスリン問屋・近江屋が関東大震災・1923年（大正12年）の被害、昭和金融恐慌・1927年（昭和2年）による十五銀行の破産、昭和恐慌・1930年（昭和5年）の煽りをうけ倒産寸前に追い込まれ、当時の金で3万8千円の借金を背負ってしまう。
この生家の借金返済の為、学校の規律に反して在学中にコロムビアから芸名・藤山一郎でレコードを吹込む。最初、「厳頭の感」を残して日光の華厳の滝に身を投げた一高生に因んで藤村操という名前を考えたが、ゲンが悪いと言われ、友人「永藤秀雄」（上野のパン屋「永藤」の息子）の名前を逆にして「藤永」としたが、本名増永と「永」の字がかさなるので「永」を「山」に直した。「フジヤマ」なら日本一で行こうと、「一郎」と続けた。藤山一郎の誕生だった。歌手・藤山一郎のデビュー曲になるはずだった『北太平洋横断飛行マーチ』は、肝心の横断飛行がテスト飛行中に事故を起こして墜落。レコードはお蔵入りとなり発売中止になっている。だが、古賀政男の『キャンプ小唄』でデビュー。その後も『下関小唄』『愛人よ、われに帰れ』『平右衛門』『函館行進曲』などを吹き込み、アルバイト料を稼ぐが、歌自体はあまり流行らなかった。とはいえ、謎の歌手藤山一郎はしだいに話題となり注目されるようになった。
「上野」期待のクラシック音楽学校生・増永丈夫の人生が作曲家古賀政男の一連のヒット曲と出会うと一変した。『キャンプ小唄』『酒は涙か溜息か』『丘を越えて』『影を慕いて』が爆発的な人気を呼び、一躍藤山一郎の名は有名になる。ホールの隅々まで響かせるメッツァヴォーチェをマイクロフォンに効果的にのせるクルーン唱法で古賀メロディーの魅力を伝えた。声楽技術の正統な解釈の所産だった。その一方で、張りのある美声で声量豊かに古賀メロディーの青春を高らかに歌いあげた。だが、これによって、藤山一郎という歌手が声楽本科に在籍する増永丈夫であることが学校当局に知られてしまった。学校の校則に反してレコードを吹込んでいたことが問題となり、1ヶ月の停学処分となる。その1ヶ月は事実上音楽学校の冬休みの期間であり、藤山の

成績や借財返済という吹込み理由などを考慮した温情ある計らいであった。
最終学年・1932年（昭和7年）のとき、東京音楽学校奏楽堂で上演された学校オペラ『デアー・ヤーザーガー』（クルト・ワイル作曲）の主役（テナーの少年役）を好演し（東京音楽学校は「風紀」を理由に舞台上演のオペラを禁止していたが、この上演のみ例外で舞台上演された）、日比谷公会堂でクラウス・プリングスハイムの指揮で『ローエングリン』を独唱。外国人歌手と伍してのバリトン独唱は豊かな将来性を示した。テノールの美しさをもつ音色と低音域の安定度は音楽学校が増永丈夫をなぜ退校処分にできなかったのか、周囲を納得させるのに十分だった。まさに「上野最大の傑作」だった。
＊停学後、レコード吹込みを一切やめ学業に励んだ。この時、ビクターが毎月100円の支給をした。1933年（昭和8年）3月、卒業演奏ではパリアッチのアリアを独唱し、音楽学校を首席卒業した。同年ビクター専属となる。
ビクター専属時代
ビクターに入社した藤山は、クラシック（バリトン・増永丈夫）と流行歌（テノール・藤山一郎）の二刀流をスタートさせる。当時ビクターには赤盤歌手の藤原義江や関屋敏子、東京音楽学校の先輩である四家文子、徳山璉らがいて、本格的なクラシックは本名の増永丈夫、大衆音楽は藤山一郎で歌うのに都合のよい音楽環境があった。
ビクター入社第一作は『赤い花』（ハバネラタンゴ）。だが、レコード発売は『僕の青春（はる）』が早く好評だった。まるで、踊りだしたくなるような青春賛歌だった。ビクター時代の藤山は中山晋平作品に名唱盤が多い。『燃える御神火』ではクルーン唱法が高く評価された。『浅草の唄』は藤山の澄んだ響きが生かされ、近代と江戸情緒が融合した浅草の心象風景が表現されている。また、橋本国彦作品の『チェリオ』も都会のスマートなセンスが盛り込まれヒットした。ビクター時代の藤山はジャズへの熱い情熱をもっていた。『踊り踊らず』『いとしの今宵』『誰ゆえに』『希望の船路』など、歌唱力に恵まれた藤山一郎の格調高い唱法はジャズ・ソングに新鮮な魅力をあたえた。『メリーウイドー・ワルツ』などオペレッタを歌ったり、内外の歌曲、欧米の名曲や民謡を歌うなど、流行歌以外でも幅広く活動した。『蒼い月』『草笛』『旅愁』『古戦場の秋』『荒城の月』など、クラシックの格調をもった大衆音楽家としてのスタンスをとった。また、ビクター専属アーティストの徳山璉、四家文子らと『流浪の民』『故郷の廃家』『緑の黒髪』『夢のふるさと』などの四重唱や「なつかしのメロディー」「世界民謡の旅」などのアルバムに素晴らしい歌唱芸術をのこした。これは後にNHK専属になったときの藤山の活動の原点になったと言える。
また、本名の増永丈夫では、ベートーヴェンの『第九』、ヴェルディの『レクイエム』を日比谷公会堂で独唱するなど声楽家としても期待どおりの活躍をみせた。1933年（昭和8年）9月NHKラジオ放送で増永丈夫でアイルランド民謡を独唱。同年10月、日比谷公会堂で「藤山一郎・増永丈夫の会」を催す。クラシックと流行歌・ジャズ、ミュージカルと多彩なステージを演奏する、マイクロフォンなしの独唱（ピアノ伴奏）とマイクロフォン前提のクルーン唱法（ビクター管弦楽団）を同一空間で共有した。バリトン本来の美しさ、テノールの音色は流行歌の世界をより魅力的なものした。

ビクター最後の吹込みがコンチネンタルタンゴの『夜風』。ビクター時代の藤山はタンゴにも意欲的に取り組んだ。藤山の声量豊かなテナーと確実な歌唱による名唱盤である「恋の花束」「ばらの面影」など、藤山一郎の歌唱がこのタンゴのスタンダードナンバーをより魅力的なものにしている。タンゴに始まり、タンゴで終わった藤山一郎のビクターの青春だった。

人生劇場　楠木　繁夫

　「人生劇場」は、1938年、発売。この唄は、村田英雄の唄とばかり思っていたので、残念ながら、オリジナルは聞いたことがなかった。探したところ、やっと楠木の歌声で聴くことが出来た。じっくりと、５回ばかり聴いてみた。楠木版のほうがいいと言う人もかなりいたが、私見では、これは好みによるのでは、と思う。私は、楠木の歌声は大好きなので、しみじみとした味わいは、とてもいい。けれど、村田の、男気溢れた、力強い歌唱も、この曲にはよく合っている。

　義理がすたれば　この世は闇だ　なまじとめるな---時世時節は　変ろとままよ　吉良の仁吉は---

日本人の、琴線を打つ、歌詞が並んでいる。作詞の佐藤惣之助は、多くの名歌を残しているが、この曲は、彼のベスト５に入るであろう。この唄を聞くと、高倉健や菅原文太、渡哲也、藤岡弘、渡辺謙など、いわゆる熱い男を、連想する。実際は、ともかくとして、人々は、日本の男の、ひとつの理想型を、そこに見出すのだ。

　楠木は、晩年、アルコール中毒等で、不遇だったらしいが、５、６曲の名作を、残している。「緑の地平線」、「白い椿の唄」、「女の階級」「トンコ節」など。素晴らしい、業績ではないか。私たちは、天上の彼に、賛辞を贈ろう。

（収集プロフィール）

楠木 繁夫（くすのき しげお、1905年1月20日 - 1956年12月14日）は、昭和期の流行歌の歌手。本名は黒田進。

経歴

　1905年（明治37年）、高知県佐川に、父は医師である名門の四男として生まれた。音楽好きの母親の影響で、県立中学時代に音楽家を志し、後継を希望した父の反対を押し切って上京。1924年（大正13年）、東京音楽学校（現：東京藝術大学）師範科に入学。本科の声楽部に進み、「城ヶ島の雨」の作曲家・梁田貞に師事した。学生時代は、同級の高木東六（作曲家、代表作：「空の神兵」「水色のワルツ」）らと行動を共にしていたが、1928年（昭和3年）、学生運動で校則などに抗議したメンバーに入っていたため、高木らとともに除籍処分となった。

　退学となった楠木は、1929年（昭和4年）、本名の黒田進で、名古屋にあったツルレコードに「五月音頭」を吹き込みレコード歌手としての活動を始める。専属歌手とならず、コロムビアでの「紅蝙蝠」「カフェー小唄」など、30以上のレーベルで、秋田登、藤村一郎など、50を超える相当数の変名を使いこなして各社でレコーディングしていたが、1934年（昭和9年）に、作曲家・古賀政男を重役として迎えて間もないテイチクの専属になる。この時に、自らの名前が似ていることから、楠木正成（戦前は大楠公と呼ばれた）に傾倒していた当時のテイチク社長・南口重太郎によって、楠木繁夫という芸名が付けられるのであった。1935年（昭和10年）には、古賀政男とのコンビで、「白い椿の唄」「男のまごころ」「緑の地平線」と大ヒットが続き、一躍大ヒット歌手となる。その後も、「女の階級」「啄木の歌」「人生劇場」とヒットを続けるが、昭和13年、古賀政男がテイチク上層部との対立から退社すると、楠木もビクターに移籍。「馬と

兵隊」「東京ラグタイム」など、曲には恵まれたが、ヒットに結びつく作品は少なかった。
　1939年（昭和14年）頃からは、スクリーンにも活躍の場を広げ、特に日活作品に数多く出演。マキノ正博の監督による「弥次喜多道中記」ではディック・ミネとコンビで弥次喜多を演じ、大映映画「歌う狸御殿」では、狸の国の総理大臣を演じた。テイチク時代に、同じ会社のヒット歌手・美ち奴との浮名を流し、周囲からは二人は結婚するものと噂が高かったが、1942年（昭和17年）に、再び古賀政男の誘いでコロムビアに移籍した後に撮影した「歌う狸御殿」で共演した歌手・三原純子と、翌年の年末に結婚。戦時中ながら、おしどり夫婦の歌手として、工場慰問などに活躍した。
　第二次世界大戦後、自らの作曲作品「思い出の喫茶店」などをレコーディングする一方で、夫婦揃って出演した大映映画「春爛漫狸御殿」をはじめ、「蛇姫道中」「江の島エレジー」などスクリーンにも活躍するが、折から流行していたヒロポンと呼ばれる覚せい剤の影響で、往年の光彩を、徐々に失っていった。1949年（昭和24年）、古巣のテイチクに移籍し、「紅燃ゆる地平線」「ハルピン恋し」などのヒットを出し、紅白歌合戦にも出演している。三原純子との夫婦揃ってのステージや巡業に活躍していたが、かねてからのヒロポン中毒のため、1953年（昭和28年）の「湯の香恋しや」を最後にレコーディングから遠ざかった。さらに、脳溢血のため、音程が狂うという歌手にとっての致命的なダメージと、愛妻・三原純子の肺結核の悪化が重なり、1956年（昭和31年）の春に夫婦揃ってのステージを名古屋で務めた後、二人は二度と生きて会うことはなかった。将来に悲観した楠木は、宝くじの当選で新築したばかりという東京・新大久保の自宅で、1956年（昭和31年）12月14日、女中を映画見物に出かけさせた後、ひとり物置小屋で、首を吊って自殺。52歳という早すぎる死に、高木東六、松平晃ら生前に親しかった友人たちは「緑の地平線」を合唱して、楠木の棺を見送った。故郷・飛騨高山で転地療養していた妻の三原純子も、彼の後を追うように1959年（昭和34年）に38歳の若さで世を去っている。
代表曲
「轟沈」
「突撃喇叭鳴り渡る」
「白い椿の唄」
「ハイキングの唄」
「緑の地平線」
「女の階級」
「のばせばのびる」
「人生劇場」
「トンコ節」共演：久保幸江

二葉　あき子

「水色のワルツ」は１９５０年、発売。流麗なメロディーが、美しく、印象的だ。作曲の、高木東六は、クラシック系の方とか。それゆえに、嫌味なく、ひたすら陶酔的に甘美で、上品だ。
（君に逢ううれしさの　胸にふかく　水色の---/夜露にぬれて　心の窓をとじて　忍び泣く----）
歌詞とメロディーが、うまく溶け合い、相乗効果を、もたらしている。物語的には、これといった波乱は、ないのだが。二葉の、歌唱も、音楽的素養を、存分に発揮して、素晴らしいできばえだ。
（収集プロフィール）
二葉あき子（ふたばあきこ　1915年2月～　）は昭和・平成期の歌手。
来歴
広島駅のすぐ北側、広島県広島市大須賀町二葉（現在の東区二葉の里）出身で、芸名は二葉の里で安芸の国と地元からとる。本名は加藤芳江。
昭和10年、東京音楽学校（現在の東京芸術大学音楽学部）師範科卒業。音楽学校在籍中、東京音楽学校の奏楽堂で同校期待の増永丈夫の美しいバリトンを聴いて感銘を受ける。その増永丈夫はすでに藤山一郎として流行歌手として名をなしていた。
レコードデビューは、在学中にコロムビアで吹込んだ教育レコード。卒業後、地元の広島の三次高女（現在の広島県立三次高等学校） で教鞭をとる。教師時代も上京して学校用教材のレコードを吹込んだ。
昭和十一年、春コロムビアの専属となる。《愛の揺り籃》が最初のレコードだった。昭和十四年、《古き花園》ヒットすると人気歌手としての声価を得る。戦時中は歌手として慰問活動をする。
1945年8月6日、久しぶりに帰郷する為、広島から芸備線の汽車に乗り、トンネルをくぐっているときに原子爆弾が投下され、トンネルを出たら、きのこ雲と落下傘を見たという。
戦後になると、《別れても》《夜のプラットホーム》《恋の曼珠沙華》《さよならルンバ》等のヒット曲を放った。昭和25年の《水色のワルツ》は、綺麗なメロディーに二葉あき子の歌唱が合い、人々に潤いをあたえた。
日劇では同じコロムビアの淡谷のり子、笠置シヅ子、渡辺はま子らとよくステージに立ったという。
昭和30年（1955年）前後に高音が出なくなり、意気を喪失して帰郷。実家から刃物を持ち出し自殺を図るが未遂に終わる。その後、作曲家の服部良一に「高音だけが歌じゃない」と励まされ復帰する。紅白歌合戦には昭和35年まで出場。
1984年に親友の伊藤久男の一周忌に胡美芳、池真理子、並木路子、安藤まり子と「五人会」を結成する。
懐メロ歌手として21世紀を超えてもなお活躍したが、老人性難聴のため2003年夏にファンのつどいにて引退宣言。現在は広島に帰郷して余生を送っている。淡谷のり子、藤山一郎、霧島昇ら戦前・戦中・戦後を代表する大物歌手の殆どが鬼籍に入る中、二葉あき子はこうした大物歌手の

数少ない生き残りと言ってよい。

主な曲

「お島千太郎旅唄」（共唱：伊藤久男）

「新妻鏡」（共唱：霧島昇）

「めんこい子馬」（共唱：高橋祐子）

「夜のプラットホーム」

「フランチェスカの鐘」（セリフ：高杉妙子）

＊セリフの評判が悪かったので、翌年セリフ抜きで吹き込みなおした。

「水色のワルツ」

霧島　昇

「旅の夜風」は１９３８年、発売。花も嵐も踏みこえて、この有名なフレーズで、はじまる、国民的大ヒット曲。

（優しかの君ただ独り　発たせまつりし旅の---愛の山河雲幾重　心ごころは----）

私は、テレビのドラマで、この物語はみたけれど、オリジナルは、昭和１３年の映画。メロドラマの傑作、といわれてます。それは別として、テイストはかなり古びてしまったけれど、とてもいい曲だと思う。やはり、日本人の琴線に、もろに響く唄なのかも。

（収集プロフィール）

霧島昇（きりしま のぼる、1914年（大正3年）6月27日 - 1984年（昭和59年）4月24日）は戦前から戦後にかけて活躍した流行歌手。福島県いわき市出身。

経歴

大正3年に福島県双葉郡大久村（現在のいわき市大久町）の農家の三男として生まれる。小学校を卒業後上京し中学に通いながらボクサーを目指すが断念、テノールの藤原義江のレコードを聴き、日本の歌曲を流行歌として歌いたいと思い、苦学しながら東洋音楽学校（現在の東京音楽大学）に進む。同校を卒業。

アルバイトで吹き込んだエヂソン・レコード「僕の思い出」がコロムビア文芸部長松村重武（俳優・松村達雄の実父）の目にとまり、昭和11年にコロムビアに入社。当時のコロムビアは松平晃が看板スターだった。霧島は松平を目標に歌唱技術を磨き、松平にはないテノールの甘い音色と邦楽的技巧表現を生かした。

翌昭和12年に「赤城しぐれ」でデビュー。昭和13年に松竹映画「愛染かつら」の主題歌「旅の夜風」を当時大スターだったミス・コロムビア（本名・松原操=後に本名を芸名とする）と共に吹き込み大ヒット。昭和14年にミス・コロムビアと結婚。前年に吹き込んだ「旅の夜風」が縁結びとなった。その後も「一杯のコーヒーから」「誰か故郷を想わざる」などの大ヒットを飛ばし「コロムビアのドル箱」と呼ばれる。

太平洋戦争中は海軍に所属し、赤紙が届いた際に「若鷲の歌」の大合唱で送られたというエピソードも残っている。戦後は並木路子と吹き込んだ「リンゴの唄」を皮切りに「三百六十五夜」「胸の振り子」などのヒットを放った。生涯に吹き込んだ数は3千曲を超える。

大変なおしどり夫婦として知られ、夫人との間には4人の子供をもうけた。子息の坂本紀男は東京音楽大学主任教授。霧島は無口で真面目な人柄で、極度のあがり症だった。昭和59年4月24日逝去。港区の長谷寺に眠る。現在福島県いわき市に「誰か故郷を想わざる」の歌碑が建立されている。

代表曲

「赤城しぐれ」（昭和11年）

「旅の夜風」（昭和13年）共唱・ミス・コロムビア

「一杯のコーヒーから」（昭和14年）共唱・ミス・コロムビア

「純情二重奏」（昭和14年）高峰三枝子

「誰か故郷を想わざる」（昭和15年）
「蘇州夜曲」（昭和15年）渡辺はま子
「燃ゆる大空」（昭和15年）藤山一郎
「若鷲の歌」（昭和18年）波平暁男
「勝利の日まで」（昭和19年）
「リンゴの唄」（昭和21年）並木路子
「旅役者の唄」（昭和21年）
「三百六十五夜」（昭和23年）松原操
「白虎隊」（昭和27年）
受賞歴
紫綬褒章（昭和45年）
勲四等旭日小綬章（昭和59年）

波平　暁男

　私はこの方を、あけお、と読んでいた。恥ずかしや。唄い方で、すぐにクラシック系の方と判る。徳山環のように、気張って唄っている訳ではないのだが。なかなかの美声である。５、６回聴いてみたが、私ははじめ、この曲の意図というものが、いまいちよく判らなかった。
（藤浦　洸:作詞、古賀政男：作曲。昭和十九年＊戦後・近江俊郎がカヴァー）
　おーい そこゆく上り船　今夜は月夜だ　何処ゆきだ　え　船底一杯荷を積んで　釜石ゆきだよ----
(収集プロフィール）
波平　暁男（なみひら あきお、1915年（大正4年）- 1983年（昭和58年））は昭和期の歌手。
 経歴
沖縄県出身。東京音楽学校在学中の1941年（昭和16年）コロムビアレコードからデビュー。 代表曲には、霧島昇との「若鷲の歌」、「月夜船」、「雷撃隊出動の歌」、「勝利の日まで」などがあり、戦時歌謡が中心である。
戦後は歌手を引退し、故郷の沖縄で歌謡学院を開いて後進の育成を行った。
　主な曲
若鷲の歌　（霧島昇との共唱）
月夜船
勝利の日まで
決戦歌謡「制空戦士」
君こそ次の荒鷲だ

豆千代

　唄い方は旧式だが、耳に響くような高音は、嫌味のない人を引きつける美声で、音程もよい。ジャケットの写真も、なかなかの美人である。今回、ユーチューブ等で、４、５曲聴いてみた。歌唱の奥に、凛とした心意気が感じられる。
　現在は、ほとんど知られていない歌手であろう。これだけ活躍しても、わづか６０年ていどで、大衆には忘れ去られてしまう。うーん、人の世ってはかない。この曲は詞がとてもよく、深く心を捉え胸を衝く。メロディーも、大陸歌謡にとどまらない甘さと深さがある。
　（久保田宵二：作詞、江口夜詩：作曲。昭和十年）
　荒れ野の果てに日は落ちて　遥かまたたく一つ星　故郷捨てた旅ゆえに---七つの丘も越えたれど
　湖の畔もさまよえど 朝霧夜霧　暮れの鐘　優しきものは風ばかり---何故悲し人の子は　荒れ野のはての雲を見る----
(収集プロフィール）
豆千代（まめちよ、1912年1月- 2004年3月）は昭和期の芸者、歌手。
経歴
明治45年（1912年）、岐阜県武儀郡富之保村（現・関市）で生まれる。芸人にするために幼少から三味線・長唄を仕込まれ、小学校へ入学後は日舞・義太夫・常盤津などの芸事を習う。9歳で少女歌舞伎団の団員として全国への巡業に赴く。大正13年（1924年）、13歳の時に地元の芸者置屋に入り花柳界入り。その後芸妓になる。
芸者の小唄勝太郎の唄う「島の娘」のヒットによって旋風を起こした鶯歌手（芸者歌手）ブームによって、2匹目のドジョウを狙ったコロムビアが白羽の矢を立てたのが、美貌と美声で評判だった芸妓の豆千代であった。生来、芸事を好んだ豆千代は、地元の応援もあって昭和8年（1933年）にコロムビア専属となり「恋はひとすじ」で歌手デビュー。
翌年には、当時の人気歌手・松平晃と歌った「曠野を行く」がヒット。さらに昭和10年（1935年）には、同じくデュエットを組んだ松平晃との共演による「夕日は落ちて」が、折りしも満州国建国による大陸ブームの波に乗り大ヒット。時代に後押しされスター歌手の仲間入りを果たす。
一躍、流行歌手となってからもレコーディングのたびに岐阜から汽車で上京し、独り公園で熱心に歌を稽古するという日々を続けた。「廻り燈篭」「貫一お宮」と地道にヒットを続け、昭和17年（1942年）には「狸御殿シリーズ」の大映映画「歌う狸御殿」に出演し、高山広子の継母役を好演した。この映画で豆千代に目を付けた大映の永田雅一は、映画界入りを勧めるが、「歌で食べられなくなったらお世話になります」ときっぱりと出演を断ったという逸話が残っている。
戦後、歌手としてはレコード会社に所属しなかったが、映画出演やステージに活躍する一方、とんかつ屋を経営するなど多才な面を見せた。昭和26年（1951年）、レコード製造を再開したタイヘイレコードと契約し専属となる。海外資本の参加により、社名がマーキュリーレコードとなっても活躍し、「そんなこと知らない」「雨の明石町」などがヒットした。
昭和40年代の懐メロブームにも時折登場し、「夕日は落ちて」や「浮名三味線」などを東京12チャンネルの音楽番組「なつかしの歌声」で披露している。その頃、豆千代の歌手生活の集大成と

も言うべきLPアルバム「明治一代女」が発売され、変わらぬ歌声でオールドファンを喜ばせた。晩年は、地元岐阜で歌手としても活動していたが、平成に入ってからNHKラジオ放送「歌謡大全集」に出演したのが、豆千代としての最期の輝きであったと言えよう。平成16年（2004年）年3月没、93歳の天寿を全うした。

代表曲

「恋はひとすじ」

「曠野を行く」共唱：松平晃

「夕日は落ちて」共唱：松平晃

「風になよなよ」

「廻り燈篭」

「薄野」

「浮名三味線（お初の唄）」

「照る日くもる日」

「泣くなんて馬鹿よ」

「深川節＊端唄」

「びんほつ＊端唄」

「桜禿＊舞踊小唄」

「紺蛇の目＊舞踊小唄」

近江　俊郎

「湯の町エレジー」　一度聞くと、なんだこれは「温泉ソング」じゃないかと、誰でも感じるだろう。そうには違いないのだが、この唄にはそれを超えて迫ってくる、普遍性がある。

（伊豆の山々　月あわく　灯りに...湯のけむり　ああ初恋の　君をたずねて....）

これらの、心に沁みるフレーズが、静かに叙情的に唄われていく。主人公の男は、流しのギターひきで、あちこちの温泉町を流して歩いているらしい。男の胸には、いまは人妻となっている、別れた女の面影が離れずに苦しんでいる。その切ない心情を、近江俊郎は静かに、ほのかな哀愁に包んで,歌いあげてゆく。

普通、温泉ソングというと、ガチャガチャしたものや、下品なものが多い。それを、しっとりと美しい哀切にみちたメロディーに仕上げた古賀政男の腕はさすがだ。また、聞く者を深みへと導く、野村俊夫の作詞も素晴らしい。

（収集プロフィール）

近江 俊郎（1918ー1992）は、東京都出身の歌手、作曲家、映画監督。正則高等学校卒業。兄は新東宝社長を務めた大蔵貢。姉はコロムビア専属歌手となった香取みほ子。

経歴

(戦前・戦中)

武蔵野音楽学校に在学中、教授と進級試験の方法を巡って対立。1936年（昭和11年）に退学した。タイヘイレコードから鮫島敏弘の芸名で「辷ろよスキー」でレコードデビュー。ポリドールレコード専属になるまで、マイナーレコードを転々とし、その間に大友博（リーガル）、大久良俊（アサヒ）など改名を重ねるが、ヒットに結びつく作品はなかった。その間では、特にリーガル専属として活躍した大友博名義でのレコーディングが多く、松平晃の「夕日は落ちて」の替え歌「流浪の涙」やコロムビア本盤から本名で発売された「北京高脚踊り」などが代表作となる。

1940年（昭和15年）、ポリドールに自ら作曲した「想い出の並木路」を持ち込んで、歌手兼作曲家として専属となり、同曲でデビュー。「どうせこの家業は水商売だから・・・」と琵琶湖に近い滋賀の近江商人にならって、「近江志郎」と名乗り、「世紀の青空」「広東航路」など、20曲以上をレコーディングし、ポリドールの代表的な歌手となるが、1941年（昭和16年）末の宴席で、ワンマンで有名な鈴木幾三郎社長と対立。そのまま、ポリドールを退社してしまう。

1942年（昭和17年）、上原敏のヒット曲「妻恋道中」をテストで歌ってコロムビアの専属歌手に。さらに古賀政男に懇願して、門下生となり、主に軍需工場の慰問に活躍した。「南方みやげ」を近江志郎名で発売した後、近江俊郎と改名し、「突撃喇叭鳴り渡る」「かくて神風は吹く」などをレコーディングするが、当時の近江にとって印象が深い曲は、ニュース歌謡「台湾沖の凱歌」であったと後年に語っている。

(戦後)

デビューから10年目の1946年（昭和21年）に「悲しき竹笛」が大ヒット。当初、会社側は奈良光枝のソロで発売したい意向であったが、古賀の推薦により近江がデュエットすることとなった。さらに翌年、ポリドール時代に懇意にしていた米山正夫がシベリアから復員。抑留中に作曲し

た「山小舎の灯」を持ち込み、この曲に感動した近江が強力なプッシュでNHKのラジオ歌謡に採用させ、大ヒットとなった。この曲のヒットでコロムビアの専属となった米山の次作「南の薔薇」も大ヒットし、歌手としての地位を確立。近江が主演し、水戸光子の共演で大映で映画化されるほどとなった。

1948年（昭和23年）、霧島昇のために作曲した「湯の町エレジー」を、古賀は近江にレコーディングさせた。歌い出しの低音が出ず、本番を20回近く録り直す苦心の末に発売。同曲は1年で40万枚、最終的には100万枚近い大ヒットになる。「湯の町物語」などシリーズものが発売されるほどのヒット作となり、岡晴夫、田端義夫とともに戦後三羽烏と言われるスターダムにのし上がることとなる。

その後も、1949年（昭和24年）に「ハバロフスク小唄」「月夜船」などのレコードをヒットさせる一方、映画にも主演や助演で２枚目役として活躍し、順調であったが、1951年（昭和26年）、多額の支度金を用意されキングレコードに移籍。「湯の町月夜」などのヒットを出すが、「専属作曲家の作品を吹き込まずに、自分の作品だけをレコーディングしていたら、キングの作曲家を代表して江口夜詩から抗議を受けた」ということもあり、3年の契約終了後退社。同時期に、兄の経営していた新東宝で映画制作の分野に進出。自ら主演した「陽気な天国」をプロデュースし、映画監督としての活動を開始する。

映画俳優として

映画に進出してからの近江は、高島忠夫を主演とした「坊ちゃんシリーズ」やコロムビア・トップ、ライト、を起用した「珍道中シリーズ」などの喜劇映画を得意とした。近江自身もマーキュリーで「坊ちゃん青空を行く」などをレコーディングし、歌手活動も継続している。特に1961年（昭和36年）に、由利徹のために作曲した「カックンルンバ」はヒットした。

テレビでの活躍

1960年代後半（昭和40年代）以降は、なつメロ歌手として活躍する一方、テレビ番組の司会者やコメンテーターとしての才能を発揮。歌手時代の活躍を知らない世代にとっては「何か判らないけど、とにかくスゴい人」という印象があった（常に呼び名は“近江先生”や“先生”であった）。

1976年（昭和51年）、「惜しまれるうちに引退したい」と歌手としての引退を宣言。

なお、実兄との関係で逝去するまで大蔵映画の副社長を務めていた。

代表曲

「悲しき竹笛」（1946年）奈良光枝

「山小舎の灯」（1947年）

「湯の町エレジー」（1948年）

「南の薔薇」（1948年）

「ハバロフスク小唄」（1949年）

「別れの磯千鳥」（1952年）

代表作（映画監督）

坊ちゃんの逆襲（1956年　新東宝）ほか坊ちゃんシリーズ数作

カックン超特急（1959年　新東宝）

凸凹珍道中（1960年　新東宝）

伊藤　久男

「あざみの歌 」は、１９５１年、発表。「熊祭の夜」の、男性的な歌唱が、印象的な歌手だが、この歌のように、やさしく淡い歌も、第一級のレベルに、仕上げる底力をもっている。事典によると、１０数曲の、名曲があるようだが、私は、残念なことに、４，５曲しか、聴いていない。

（山には山の　愁いあり　海には海の---いとしき花よ　汝はあざみ　こころの花よ---）
＊この歌のレベルは、水準をらくらくと超え、もはや普遍の叙情曲といっていい。通俗性は、ほぼ省かれ、純粋で、コアの部分が、表出されている。
（収集プロフィール）
伊藤久男（いとう ひさお、1910年（明治43年）7月7日 - 1983年（昭和58年）4月25日）は、歌手。福島県本宮市出身。本名四三男は生年の明治43年に由来。
東京農業大学に入学後、ピアニストを志して退学、帝国音楽学校に進む。同校では同郷の声楽家・平間文寿に師事する。

1932年（昭和7年）同じく同郷の作曲家古関裕而の勧めにより、1933年（昭和8年）「伊藤久男」名義でリーガル（コロムビアの廉価盤）から「今宵の雨」でデビュー。コロムビアからのデビューは同年9月の「ニセコスキー小唄」で、宮本一夫の名前で発売。出身地本宮をひっくり返した芸名だった。その間、アルバイトでタイヘイで内海四郎名義でもレコーディング。その後、コロムビアでは伊藤久男、リーガルで宮本一夫を使用していたが、1935年（昭和10年）「別れ来て」の発売を機に芸名を伊藤久男と改める。

伊藤久男の抒情性豊かなバリトンは定評があり、その歌唱法で昭和10年代前半から戦時歌謡のレコーディングが多く、伊藤久男としての初めてのヒットは1938年（昭和13年）「湖上の尺八」（2月20日発売）。慰問演奏で藤原義江に抒情的なバリトンを流行歌手として生かすことを奨められる。一時期はオペラ歌手としての進路も検討したが、1938年、中国戦線に服部良一、赤坂小梅らと慰問に訪れた際、自分の歌に涙を流す兵隊の姿を目の当たりにし、流行歌手としての途を選択した。

その後、「暁に祈る」「白蘭の歌」「高原の旅愁」と連続してヒットを飛ばし、スター歌手としての地位を確立した。1940年（昭和15年）、日劇のアトラクションに出演し、伊藤が歌う「熱砂の誓い」を客席で見た岡本敦郎は、その歌声に感動し、歌手になる決意をしたと述懐している。

一方、朴訥とした台詞回しながら多くの映画にも起用され、1939年（昭和14年）松竹映画「純情二重奏」に流しの芸術家として、1940年「暁に祈る」には歌う兵隊として、さらに1942年(昭和17年)には大映映画「歌う狸御殿」には村の青年役としてスクリーンにも活躍した。

終戦直後は、疎開先で酒に溺れ、再起不能とも言われたが、1947年(昭和22年)松竹映画「地獄の顔」（監督：マキノ雅弘）主題歌「夜更けの街」でカムバック。その後は、「シベリア・エレジー」「山のけむり」「ひめゆりの塔」など様々なジャンルでヒットを飛ばした。殊にラジオ歌謡においては詩情豊かな抒情歌が多く、「たそがれの夢」は本人もかなり気に入って、晩年ま

で愛唱していた。

伊藤は同郷の作曲家・古関裕而の作品を多くレコーディングしている。「露営の歌」「海底万里」といった戦時歌謡から、「イヨマンテの夜」「君いとしき人よ」といった歌謡曲、また現在でも夏の高校野球全国大会で歌われている「栄冠は君に輝く」までも伊藤の創唱によるものであった。紅白歌合戦には1961年まで出場。古関裕而のクラシックの格調は、バリトンの美しいテナーの音色で歌う藤山一郎に代表されるが、古関メロディーのドラマティックな抒情性は伊藤久男のリリクな歌唱によって声価を高めた。

性格は、まさに豪放磊落。酒をこよなく愛し、誰からも「チャーさん」の愛称で慕われた。一方で、異常な潔癖症で、常にアルコールを含ませた脱脂綿を消毒のために持ち歩き、閉所恐怖症のためエレベーターには乗らなかったと言われる。

日本歌手協会の設立にも尽力し、後進の指導にも力を惜しまなかったが、晩年は酒豪がたたり糖尿病のためインスリンの注射に依存。昭和50年以降には、注射による低血糖発作で震えながらステージをつとめ、痛々しいものがあった。

1978年（昭和53年）に紫綬褒章受章、1982年（昭和57年）には日本レコード大賞特別賞を受ける。翌1983年、糖尿病のため死去、享年72。勲四等旭日小綬章受勲。

代表曲

1937年「露営の歌」（作詞:薮内喜一郎、作曲:古関裕而、協唱:中野忠晴、松平晃、霧島昇、佐々木章）

1940年「お島千太郎旅唄」（作詞:西條八十、作曲:奥山貞吉、協唱: 二葉あき子）

1940年「暁に祈る」（作詞:野村俊夫、作曲:古関裕而）

1940年「高原の旅愁」（作詞:関沢潤一郎、作曲:鈴木義章）

1949年「栄冠は君に輝く（全国高校野球大会歌）」（作詞:加賀大介、作曲:古関裕而）

1949年「イヨマンテの夜」（作詞:菊田一夫、作曲:古関裕而）

1951年「あざみの歌」（作詞:横井弘、作曲:八洲秀章）

1952年「山のけむり」（作詞:大倉芳郎、作曲:八洲秀章）

1955年「サビタの花」（作詞:大倉芳郎、作曲:原六朗）

華の昭和名歌３００　第　　：十三夜　小笠原 美都子

　私が若かった頃、この曲はテレビなどで、榎本美佐江（当時はほぼいつも、年増芸者風の衣装で、メディアに出ていた）がよく唄っていた。か細いけれど、芯のある歌声、という相反する印象的な歌唱で、オリジナルの名曲と思っていた。それが、カバーであった事を知ったのは、ごく最近のこと。小笠原の歌唱は、ややか細く、思いを込めた発声、遣る瀬無い感じで、どこかにその時代のテイストが表れている。
　河岸の柳の行きずりに　ふと見合せる顔と顔　立ち止まり　懐かしいやら嬉しやら　青い月夜の----
（収集プロフィール）
小笠原 美都子（おがさわら みつこ、1920年（大正9年）3月25日～　）は、高知県長岡郡大豊町出身の歌手。
 経歴
昭和10年（1935年）、15歳の時に上京し歌を学んだ後、昭和15年9月、20歳の時に「花嫁蝋人形」という歌でテイチクレコードよりデビューした。その後「十三夜」「琵琶湖哀歌」など、200曲以上を吹き込んだ。テイチク時代に、東海林太郎と吹き込んだ「琵琶湖哀歌」は、昭和16年（1941年）4月6日に琵琶湖で起こった第四高等学校漕艇部（現金沢大学）の部員11人の悲惨な遭難事故を悼んで作られた歌である。その年6月にレコードは発売され大ヒットし現在でも歌い継がれている。あの「琵琶湖周航の歌」と共に名作である。また、同年10月に発表した「十三夜」の大ヒットは、戦後に歌った榎本美佐江のカヴァーでも知られ、他にも東海林太郎とのデュエット「九段のさくら」などヒット曲多数。
80年代には日朝音楽芸術交流会会長に就任し北朝鮮の国際音楽祭などで活躍するなど北朝鮮や中国との友好活動でも知られている。北朝鮮国内ではその功績を讃えられ度々表彰されるなど日本人歌手としては稀有な存在と言える。
＊十三夜（詞　石松秋二 曲　長津義司 ）昭和１６年(1931)１０月発売。榎本美佐江の持ち歌と思われがちなこの曲。この歌の主題は、樋口一葉の作品「たけくらべ」といわれている。
＊上海の波止場（詞 飛鳥井芳郎　曲　夢かほる）
 主な曲
みのる秋　　（昭和15年）
伊那のふるさと（昭和16年4月）
琵琶湖哀歌　　（昭和16年6月）共唱：東海林太郎 （奥野椰子夫　詞 菊地　博　曲）
十三夜　　（昭和16年10月）
夢の砂漠　　（昭和16年11月）
若草哀歌　　（昭和17年7月）
九段のさくら（昭和18年3月）共唱：東海林太郎
アユチャの町（昭和18年5月） 大高ひさを　詩 阿部武雄　曲
すみだ川　　（昭和18年11月※東海林太郎「銀座尾張町」片面）

名残の月影　（昭和22年）
たけくらべ　（昭和23年）
恋し鳥　　（昭和26年）
みおつくしの鐘（昭和30年）
＊近年でも、テレビ東京の「昭和歌謡大全集」に出演するなど健康的な姿を見せている。現在でも高齢ながら定期的にコンサートなどを開いたりしては昔と変わらない美声を披露している。

　雄大なスケールの曲を歌うのに、適した声、といえるだろう。曲によっては、低めの感じを受けるテノールだが、高音へも自在に移行し、高音のパートもそつなくこなしている。表現しにくいのだが、クラシック系の歌手の声として、よくありそうで、あまり無い声質、といっていい。全体に、硬質さを感じる表現で、具体化される歌唱もほぼ無表情で、そこがこの方の個性のようだ。クラシック系の歌手は、共唱のときなどは個人を判別しにくいが、この方は、はっきりと判るだろう。太さと、硬質な手ごわい強さのある声である。慶応義塾応援歌は、５、６名の有名歌手の歌唱を聴いたが、木下が優勢だ。とまれ、日本の音楽文化の先駆者であり、基礎を築いたひとり、といえるだろう。

（収集プロフィール）

木下 保（きのした たもつ、1903年10月14日～1982年11月11日）は、日本の声楽家（テノール）、指揮者。

経歴

兵庫県豊岡市出身。1926年、東京音楽学校本科を卒業。1931年にレコードデビュー。1932年から1935年までドイツとイタリアに留学する。帰国後、「木下保リサイタル」として、毎年、ドイツ歌曲を作曲家単位で紹介するという、それまでにない破格の演奏会を行い、戦時中は山田耕筰、信時潔などの作品を一晩集中して歌うという演奏会を行っている。東京音楽学校の声楽科主任教授という立場があってこそできたものではあったが、この時期に日本人作曲家の歌曲のみでリサイタルを開くのは画期的なことであった。立場柄、若干の軍歌の録音があり、千葉静子と「サイパン殉国の歌」などを吹き込んでいる。また、1937年より日本に定住したピアニスト・指揮者、レオニード・クロイツァーと録音したシューマン「詩人の恋」は名盤として知られる。ベートーヴェン「第九」は、学生時代に東京音楽学校定期演奏会での公式初演で合唱団メンバーとして参加し、新響（現「NHK交響楽団」の前身）による初演奏でソリストを務めたのを皮切りに、戦前の主だった演奏で常にソリストとして名前が記されている。

歌手としての活動の他に、昭和初期より合唱指揮でも活躍。音楽学校の合唱団との録音、演奏旅行のほか、慶應義塾ワグネル・ソサィエティー男声合唱団をはじめ多くのアマチュア合唱団を指導した。後年は、自身の提唱した「やまとことば」の第一人者として、自から、戦前初演した信時潔の歌曲集『沙羅』を合唱に編曲している。信時潔作品では、神武天皇を題材としたカンタータ「海道東征」の初演を指揮し、合唱のみならずオーケストラを伴った大編成の指揮にも力量を発揮した。

戦後、公職追放の一環で東京音楽学校を退官。3人の娘を抱えて職を失う形となったため、立場上戦前には出演出来なかったオペラに手を広げ、藤原義江とのダブルキャストで全国に公演旅行し、数々の日本初演に参加した。時にはカルメンを一日に三回歌うというハードスケジュールもこなしている。直弟子の多くが幹事となって創設した1952年の二期会旗揚げ公演（「ラ・ボエーム」）では、一期を代表する歌手として主役に招かれている。また、團伊玖磨の「夕鶴」の「与ひょう」は最大の当たり役として歌手生活のほぼ最後まで歌い続けたほか、録音も残されて

いる。
1977年（昭和52年）、勲三等瑞宝章受章。
1982年（昭和57年）11月11日、慶應病院にて急性心不全で死去。享年79。
長女は声楽家の坂上昌子。
＊「木下保の藝術～信時潔、團伊玖磨 歌曲集～」真正な日本語歌唱の草分け的存在である木下保の芸術的精華を集成したＣＤ。信時潔の作品はどれも範を後世に残す逸品だが、全盛期の声を捉えた小品三曲と蒲原有明の詩に肉薄する「茉莉花」に指を折る。團伊玖磨の「わがうた」も高雅な名唱。
　主な曲
慶応義塾応援歌　（詞・曲　堀内　敬三）
十億の進軍　（詞　時雨　音羽　曲　林　伊佐男）

華の昭和名歌３００　第　：戦友の遺骨を抱いて　石井 亀次郎

　私の、まったく知らない方である。名前は、何度か聞いたことがあるが、顔も知らないのだ。歌唱は、全体にほのかな哀調をおび、声質もやや高めだが、柔らかでよく通る美声だ。資料によると、４８歳前後での死亡と推定される。これだけの実績があって、没年がはっきりしない、というのは珍しいが。

(収集プロフィール）

石井 亀次郎（いしい かめじろう、1918年（大正7年）9月4日 - 1960年代）は昭和期の童謡、流行歌歌手。妻は同じく童謡歌手だった宮下晴子。

経歴

東京出身。少年時代より、長谷山雛菊音楽会に所属し、1928年（昭和3年）、ビクターレコードより童謡歌手としてデビュー。翌年、松竹映画「母の歌」主題歌「母の歌」（歌：佐藤千夜子）B面「母を慕う歌」を平井英子と共に吹き込む。童謡歌手時代の他曲には、「春が来た」、「雀のお使い」、「ギックリカッコ」、「一茶さん」、「お祭り」などがある。

童謡歌手引退後、東洋音楽学校に入学するが中退。その後、奥田良三に師事し、ポリドールから再デビュー。石井肇及び、石井亀次郎名義で軍歌などを多く吹き込んだ。主にポリドールレコードで活躍し、代表曲には、「健歩の歌」、「愛国行進曲」、「三国同盟の歌」、「戦友の遺骨を抱いて」、「嗚呼特別攻撃隊」などがある。

戦後は、第1回日本レコード大賞童謡賞「やさしい和尚さん」(石井亀次郎とキングホウズキ会) を受賞している。

没年は不詳だが、1960年代に死去している。

＊1928年（昭和3年）、ビクターレコードより童謡歌手としてデビュー。翌年、松竹映画「母の歌」主題歌「母の歌」（歌：佐藤千夜子）B面「母を慕う歌」を平井英子と共に吹き込む。童謡歌手時代の他曲には、「春が来た」、「雀のお使い」、「ギックリカッコ」、「一茶さん」、「お祭り」などがある。 童謡歌手引退後、東洋音楽学校に入学するが中退。 その後奥田良三に師事し、ポリドールから再デビュー。石井肇及び、石井亀次郎名義で軍歌などを吹き込んだ。

＊戦友の遺骨を抱いて（詞　逵原実　曲　海軍軍楽隊・松井孝造兵曹）は、1942年（昭和17年）に作られた軍歌で、2種類の旋律を4社が競作でレコード化した。

製作

1942年2月7日から15日間戦われたシンガポールの攻防で、日本軍は多数の犠牲者を出した。そのため入城時、入城式は行われず、代わりに合同慰霊祭が行われた。

兵士の肩にかかったおびただしい白布の遺骨の箱が注目を引き、その感動を近衛師団経理部軍曹だった逵原実が作詞した。曲は海軍軍楽隊によって付けられた。

歌詞の内容

シンガポール入城のおり、戦死した戦友を悼みつつ、彼の遺品の国旗を山の上に立てるという話である。

この曲を南方軍慰問団が日本へ持ち帰って、レコード化された。

レコードは、軍楽隊でのコンクールで次席となった進軍調の作品がコロムビア（1942年3月31日録音、6月20日発売、7月新譜）とテイチク（1942年4月3日録音、5月15日発売、6月新譜）から発売され、松井作品は一年近く遅れてビクター（1943年3月20日発売、4月新譜）とポリドール（3月10日発売、臨時発売）から発売された。
始めは、東海林太郎の盤がリードしたが、戦局の推移と共に、哀調の帯びたポリドール石井亀次郎の盤に人気が集中、現在歌われるのはこちらが主流となっている。
吹き込み歌手
コロムビア: 酒井弘
ビクター: 鳴海信輔、斉田愛子
ポリドール: 石井亀次郎
テイチク: 東海林太郎

　活動した時代の必然ではあるが、軍歌がかなり多い。けれど歌唱そのものは、柔らかな響きを持つ、明色の素晴らしい歌声、と言っていいだろう。軍歌は、当然ながら、士気の鼓舞・高揚が主目的なのだろうが、伊藤の歌唱は、その前に、きちんと歌として成立している。童謡、クラシックなど、他の分野の曲も聴きたかったのだが、今回は資料不足。ともあれ、演奏と教育の両面で、日本の声楽界発展の基礎を築いた一人。
(収集プロフィール）
伊藤 武雄（いとう たけお、1905年8月2日～1987年12月2日）声楽家（バリトン）、教育者。広島県出身。
 経歴
1930年東京音楽学校（東京藝術大学）卒。研究科に残りH・ヴーハー・ペーニッヒに師事。1935年デビューリサイタル。戦前から歌曲とオペラに活躍。1937年日中戦争に召集され従軍、上海の戦闘で右手を失うが、帰国後は母校の助教授として後進の育成に尽力した。またコロムビア・レコード専属となりドイツ歌曲の吹き込みを行う。1940年山田耕筰に請われオペラ「夜明あしいけ」で初舞台。しかし助教授がオペラに出るのは学校も文部省も当時許さず、学校は退職した。真剣にオペラに取り組み、新響演奏会で「フィデリオ」、「カルメン」、「フィガロの結婚」などの主役を張り、その歌唱で注目された。
戦後は藤原歌劇団のオペラ「リゴレット」や武智鉄二演出の「修禅寺物語」などに出演。また、邦訳歌詞の質の向上にも努め、シューベルトの「冬の旅」、「魔王」、「さすらい人」、モーツァルトの「魔笛」など、歌曲やオペラの日本語訳に優れた作品を残した。詩人の大木惇夫と共作した「誰かが誰かと」は、外国の歌はもっと原語に忠実に訳すべき、という考え方から、国民的唱歌の一つ「故郷の空」をロバート・バーンズの原詩、春歌の形に戻したもので1970年、一世を風靡したなかにし礼作詞、ザ・ドリフターズ歌の「誰かさんと誰かさん」は、これをさらに発展させたものである。
1948年には斎藤秀雄、井口基成、吉田秀和らと「子供のための音楽教室」発足に加わり、この後、江戸英雄や吉田、柴田南雄らと桐朋学園を訪れ、音楽科の併置を懇願するなどで桐朋学園大学創立にも尽力した。また同大学の声楽家主任教授として多くの後進を育てながら、1966年には「ルクリシアの凌辱」など、オペラの演出も手がけた。また東京大学音楽部の指導等も行った。
1976年、勲四等旭日中綬章。妻・伊藤花子もソプラノ歌手。
　主な曲
思い出　（詞：不詳、曲：Thomas H. Bayly＊訳詞は、伊藤武雄のもので、幼馴染み同士が久しぶりに再会したというシーンを話し言葉で書いています。原詞や近藤朔風・津川主一の訳詞が折り目正しい小説だとしたら、これは気軽につけた日記。）
　思い出（伊藤武雄）
２　あの頃はお互いに　まだまだ幼くて
　　ずいぶんけんかもやったよね　ほんと懐かしい

あの角(かど)のお菓子屋の　マキノ君はどうしたろ
あの頃はお互いに　ずいぶんあばれたね

＊この曲は「久しき昔」のタイトルが有名です。

非常時日本の歌　（昭和09年(1934) 国民歌 日本音楽協会選作詞：記載無作曲：記載無東京音楽学校）

愛馬進軍歌　（久保井信夫：作詞　新城正一：作曲　昭和十四年）

皇軍を讃ふる歌　（昭和18年(1943) 作詞：小田俊與作曲：聖戦文化奉公会唄）

　オペラの出にしては、声質が柔らかく、自然な甘さでいい。長い間、活躍していたようで、日本の西洋音楽文化の先駆者として、また長きにわたる指導者として、その功績を、もっと評価されていい人である。
　赤い灯　青い灯　道頓堀の　川面にあつまる　恋の灯に　なんで　カフェーが　忘らりょか----
（収集プロフィール）
井上　久子（いのうえ　きくこ、１８９２～１９８?）愛媛県新居浜市出身。
＊東京女子音楽学校を明治44年(1911)に卒業したが、一時期、東京音楽学校でも受講したようである。また、四谷で私塾をしていたアドルフォ・ザルコリにも師事して声楽を学んだ。その後、帝劇歌劇部に入り、ローシーに師事。当事の声楽を志す生徒としては最高の教育を受けた、ということができよう。
帝劇歌劇部第一期生となったのは大正３年(1914)のことである。井上増布という名で加わっており、帝劇の舞台で修練を積んだ。オーケストラのスコアからパート譜を浄写したり、ピアノスコアからヴォーカルパートを書き写したりという下積み。それも正規の音楽教育と彼女の向上心から、芸術の糧となったと思われる。
その後、ローシーが浅草でローヤル館を立ち上げていわゆる「浅草オペラ」の先駆時代が始まると、さっそく大正５年(1916)、オッフェンバッハの「天国と地獄」公演で、音楽院長オルフェウスという大役を。元来、テナーの役柄だが、主力男性歌手が不足していた浅草オペラでは、しばしばテナーの役柄やアリアが女性歌手に振られた。井上起久子の場合、それだけの実力を認められたのである。
ローヤル館では大正５年から７年にかけて、ルコック「アンゴー夫人の娘」（T5-11）、リッチ兄弟「クリスピーノと死神」（同12月）、ルコック「小公爵」（T6-1月）、オッフェンバッハ「ボッカチオ」（同4月）、アイヒベルク「アルカンタラの医師」（同6月）、ヴェルディ「椿姫」（T7-2月）と大きな舞台で出番を得た。
ローシーの一座が解散すると、いよいよ浅草オペラ時代の到来である。
井上起久子はローシー門下のスター、原信子の一座と行動を共にした。大正7年から9年にかけて清水金太郎一座との合同歌劇、歌舞劇協会、横浜の朝日座での上演などを経て、大正9年(1920)の根岸歌劇団に流れ込んだ。
このとき井上は一期下の天野喜久代と二人ならんで主力アルト歌手となり、田谷力三、安藤文子などなどのスターに伍した。金龍館を根城とする根岸歌劇団は比較的長期にわたって新作、旧作オペレッタの上演で人気を博した。
天野喜久代といい、井上起久子といい、浅草オペラ時代にアルトの声域で幅広い役柄をこなした歌手は昭和に入って、その表現力と個性で一躍、スターとなることができた。大正期にソプラノでスターの座を張っていた人々はやがて本格的なオペラの道を進むか、あるいは素質に左右されて消えていった。しかしアルトの彼女たちはのちにメゾソプラノかソプラノに転向していち早く新たな表現方法を身につけ、より新たな境地に進むことができたのである。浅草オペラのスター

歌手、ソプラノの清水静子は声質はよかったが、昭和期の新しいセンスについてゆけず失墜した一人である。
井上起久子は根岸歌劇団時代の間、大正10年夏～秋の短期間だが、伊庭孝、佐々紅華らに引っ張られて奈良の生駒技芸学校に参加したりなどした。
大正12年の関東大震災で同歌劇団が解散すると、歌劇団は集合離散を繰り返しながら凋落してゆくが、井上の活躍の舞台はレコードに移りはじめており、大正14年(1925)1月に根岸一座の後継団体と目される「五彩会」のグランドオペラ「カルメン」に出演したあたりで、浅草オペラでの活躍を終える。なお、この「カルメン」公演で駆け出しの二村定一と共演をしている。
さて、井上起久子のレコードデビューは、故森本敏克氏の記述によると、大正11年(1922)6月に京都のオリエントから発売された童謡であるらしい。ラベル上では本名の井上ます子と記されている。その後、何枚か童謡のレコードを作り、ニッポノホンで佐々紅華のプロデュースの下、お伽歌劇に数多く起用された。「大阪見物」は、ニッポノホンで作られた佐々紅華作の「東京見物」を模したお伽歌劇である。ヒコーキはニッポノホン（東京）の傘下にあるサブレーベル。「東京見物」は二村定一・井上起久子の吹き込みであるから、サブレーベルのヒコーキで「大阪見物」を作ったものと思われるが、メイン出演者が井上起久子なところがミソである。
佐々がレコード産業で重用したのは、高井ルビー、相良愛子、二村定一など個性豊かな歌手たちであった。昭和に入ってからは、継続して多くのジャズソングを吹き込みながら、松竹楽劇部のレヴューの主題歌を歌った。そうして道頓堀松竹座を中心として、松竹系の舞台にも出演した。そのため、昭和初期に松竹楽劇部（のちに少女歌劇団）の声楽教師を長く勤めることとなった。
＊帝劇歌劇部の一期生となり、原信子に師事。帝劇、赤坂ローヤル館の舞台を踏む。ローヤル館閉館後、原信子歌劇団に参加。アルトの歌声は音程も確か、しかも芸達者で舞台では老け役を得意とし、金龍館オペラでも中心的存在として活躍する。大正１０年、金龍館を退座し、伊庭孝等とともに生駒山でのオペラ上演を目指し、生駒歌劇団を結成するが、一年余りで解散。その後も堀田金星とともに楽劇座を結成し、公演を行った。
　主な曲
サリタ　　（オリエントレコード）
大阪行進曲
道頓堀行進曲　（昭和３年５月新譜。昭和3年1月、神戸・京都・大阪の各松竹座で、映画の幕間劇として岡田嘉子一座の寸劇「道頓堀行進曲」が上演されました。そのなかで歌われたのが、同名のヒット曲です。内容は、カフヱーを舞台に繰り広げられる男女の三角関係と惨劇で、最後に「あぁ、よかった・・・夢で」というオチ。中井泰孝原作の劇中に挿入されたのは、松竹楽劇部の座付き脚本家・日比繁次郎の作詩に同じく楽劇部の作曲家・塩尻精八が作曲した主題歌。
＊この歌が最初に独唱曲として取り上げられたのが、筑波久仁子（井上起久子の別名）の歌う、この盤です。片岡正太郎のハーモニカと清水昌のピアノ伴奏。
井上は帝劇歌劇部出身で浅草オペラ時代に活躍し、昭和に入ってからはジャズソングや流行歌を歌って人気がありました。１月に初演された「道頓堀行進曲」はこのようにまずレコード会社の目に留まり、全国にヒットを広げました。このレコードは、当時最新鋭のマイクロフォンを

使い、東京の日本青年館で録音するという力の入れようが甲斐あって、大ヒット。

華の昭和名歌３００　第　：ＴＢ　広沢 虎造（二代目）

　私が子供だったころ、ラジオから、この方（ほかの浪曲師の方も）の浪曲は、よく流れてきた。なかでも、演目はやはり清水次郎長伝が多かったようだ。この当時は、浪曲もまだ人気があり、買い物に商店街に出かけると、演歌・歌謡曲の間に、ときどき浪曲が流れた。勿論、若いファンは少なく、熱心なファンは主に５０歳以上の人達だったが。私は、こういう特殊な声は、どのような訓練をして作るのだろうか？と、いつも不思議に思っていた。演歌に先行し、演歌とともに長い間、大衆文化の華であった、浪花節。昭和初・中期の有名な流行歌手のなかには、浪曲を母体に、世に出た方も多い。つまり、現在の演歌・歌謡曲系(広くいえば、Ｊポップも含む）の、源流のひとつなのだ。

（収集プロフィール）

広沢 虎造（ひろさわ とらぞう、1899年（明治32年）5月18日 - 1964年（昭和39年）12月29日）は、昭和時代の浪曲師。東京府東京市芝区（現・港区芝）出身。本名・山田信一。

＊旅行けば駿河の国に茶の香り、や“寿司を食いねえ”“バカは死ななきゃなおらない”など名文句、名調子で一世を風靡した広沢の没後40年、いま甦る魅力。

　来歴

少年時代から浪花節を好み、腕自慢の素人として天狗連で「東川春燕」の名で人気を取っていた。19歳の時に上方の浪曲師二代目広沢虎吉に弟子入りし、広沢天勝、後に天華と名乗った、23歳で二代目広沢虎造を襲名、帰京。師匠譲りの浪花節に、中京節の鼈甲斎虎丸や関東節の木村重松らの節回しを独自に取り入れた『虎造節』で、戦前から戦後にかけて一世を風靡した。

持ちネタは、国定忠治、雷電爲右エ門、祐天吉松など多岐に渡るが、中でも人気を博したのが、講談師三代目神田伯山直伝（？）といわれる清水次郎長伝であった。とりわけ森の石松を題材にした「石松三十石船」は人気が高く、「寿司を食いねえ」「馬鹿は死ななきゃなおらない」などのフレーズは、ラジオ放送の普及も相まって、国民的な流行語となった。

また戦前は映画にも積極的に出演し、劇中でしばしば浪花節を演じていた。映画出演に関して吉本興業のマネジメントを受けるだけでなく、浅草花月など当時吉本が東京に持っていた多くの劇場にも出演、吉本が中国大陸に派遣した軍隊慰問団・わらわし隊にも参加するなど、半ば吉本の専属状態となっていた。

1959年（昭和34年）に脳溢血で倒れ、言語障害を発症。リハビリに取り組むも回復せず、1963年（昭和38年）の引退興行をもって浪曲界から身を引き、翌1964年（昭和39年）死去した。65歳没 。

虎造の死後、浪曲界にはスターが生まれず、また浪曲そのものが高度経済成長期以降の主流となったテレビ放送では全く映えなかったため、以降浪曲界は、現在まで続く長い冬の時代が。虎造本人に関しては近年、次郎長伝をリアルタイムで聞いていた世代を中心に再評価の気運が。

＊浪曲（ろうきょく）とは、明治時代初期から始まった演芸の一つ。「浪花節」（なにわぶし）とも言い、三味線を伴奏に用いて物語を語る。

浪花節は古くから伝わる浄瑠璃や説経節、祭文語りなどが基礎になって、大道芸として始まった

、その後明治時代初期、大阪の芸人・浪花伊助が新しく売り出した芸が大うけして、演者の名前から「浪花節」と名付けられた。（浪花節と言われ始めたのは1872年頃と言われている。）「浪曲」と呼ぶようになった理由は諸説あり定かではない。東京では関東節の祖と言われる浪花亭駒吉や横浜で祭文語りで活躍していた玉川派の祖と言われる青木勝之助が東京の寄席に出演し人気を博し浪花節は全国的に広まった。以後、桃中軒雲右衛門や、二代目広沢虎造の活躍で戦前まで全盛を迎えた。太平洋戦争後は娯楽の多様化で衰退し現代まで続いているが、現代に合う新しいスタイルを模索している。
庶民的な義理人情に訴える作品が多い事から、転じて「浪花節にでもでてきそうな」という意味で、義理に流された話を「浪花節的な」あるいは単に「浪花節」と比喩することも多いが、実際は武芸物、出世物、任侠物、悲恋物、ケレン物（お笑い）など多種多様である。
＊神田伯山の歯切れのいい啖呵に惚れ込んだ虎造は、〈次朗長伝〉を浪花節で口演しようと考える。虎造は後年、伯山からじかに教わったと述べているが、浪曲の研究家である芝清之（しばきよし）氏の調査によると、そのような事実は無かったようだ。新興の芸能だった浪花節は、講談からネタを取り入れると同時に、人気も奪ってしまっていた。〈次朗長伝〉は伯山の苦心作である。浪花節の若手に譲るなどあり得なかった。
＊妻は曲師の広沢美家好。次男の山田二郎は、NHK佐賀、ラジオ東京・TBSの元アナウンサーである。
代表的な演目
清水次郎長伝
秋葉の火祭り
名古屋の御難
勝五郎の義心
お蝶の焼香場
次郎長の貫禄
久六の悪事
次郎長の計略
大野の宿場
代官斬り
石松金比羅代参
石松三十石船
石松と身受山鎌太郎
石松と都鳥三兄弟
石松と小松村七五郎
閻魔堂の騙し討ち
お民の度胸
石松の最後
為五郎の悪事（本座村為五郎）

追分三五郎
追分宿の仇討ち
清水の三下奴（善助の首取り）
鬼吉喧嘩状
次郎長と玉屋の玉吉
血煙荒神山（蛤屋の喧嘩）
血煙荒神山（神戸の長吉）
吉良の仁吉
仁吉男の唄
吉良の仁吉（最後の荒神山）
最後の荒神山
石松若き日
七五郎懺悔・追分宿の仇討ち（追分三五郎より）
清水港義侠伝
明月清水港
国定忠治伝
名月赤城山
忠治ふたり
赤城の血煙
火の車お萬
山形屋乗り込み
唐丸籠破り
祐天吉松
夕立勘五郎
寛政力士伝 雷電爲右エ門
寛永三馬術
映画
エノケンの森の石松（1939　東宝東京、監督：中川信夫）浪曲口演
エノケン・虎造の春風千里（1941　東宝、監督：石田民三）篠三郎太役
書籍
「江戸っ子だってねえ 浪曲師廣澤虎造一代」　新潮文庫　（吉川潮）
「ご存知! 清水次郎長伝」　KKベストセラーズ　（二代目　広沢虎造）

　経歴からみると、クラシック系の出のようだ。４、５曲聴いてみたが、おおむね驚くほどの高音である。その当時のことは、ほとんど判らないが、実力と人気を兼ねそなえていたようだ。この曲は、歌丸や勝太郎に合いそうな、和風の仕上がり。
　朝は桃いろ　夕べはおぼろ　香りなまめく　日本のかど路　咲いてしぼんだ----
（収集プロフィール）
丸山　和歌子（まるやま　わかこ、１９０２～１９４５）
東京出身。東洋音楽学校。昭和３１年デビュー。
＊1935年の丸山和歌子のキャッチコピーが「タイヘイの女王」。1934年、レコード会社専属アーチストのトレードが行われています(外資系レコード会社ならではの考え方で、大正時代の日本のレコード業界にはなかったこと)。この「アーチスト・トレード」はコロムビアと専属作曲家・古賀政男の揉め事が発端で、コロムビア側は古賀に「作曲数が少なく、ヒットもあまり出てない」、古賀氏も「ヒットは出ているし作曲数も充分作った」。このトラブル当時、丸山和歌子さんの古賀作品『春じゃもの』がヒット。1934年に古賀氏はテイチク、コロムビアにはキング専属だった竹岡信幸氏が移籍。コロムビア専属歌手では1935年1月新譜発売後に、川畑文子さんがテイチク、丸山さんもタイヘイへ。
＊昭和初期の東京浅草で最も人気があったと伝えられている歌手が、丸山和歌子です。
　主な曲
ワイフ持つなら　（歌唱　二村定一、丸山和歌子）昭和七年に発売。
風も吹きよで　　昭和07年（1932・コロムビア 詞：西岡水朗 曲　古賀政男）
春ぢやもの　　古賀メロディー初期の日本的な今では懐かしい１曲。
愛して頂戴ね　（歌唱・時雨みどり＝丸山和歌子の変名）昭和９年、テイチク移籍での曲で、昭和７年ニットーよりリリース。テイチク時代の少ない曲のひとつ。

華の昭和名歌３００　第　：あなたなしでは　能勢　妙子

　数曲、聴いてみたが、多くの人に好まれる声質といえよう。伸びやかで、美しく、柔らかな歌声。声に、感情の表現力もある。容姿は、中の上ていどだろうか。結婚後も浮気の多かったK氏。作曲家の古関裕而氏のエッセイによると、晩年はK氏の介護等で、能勢は忙しく、けれども平穏に暮らしていたという。

　（詞：佐伯孝夫 曲：佐々木俊一）

　宵にゃ散歩に　出たけれど　なぜか晴れない　胸のうち　やっぱりあなたの　ことばかり　あなたなしでは　あなたなしでは　生きてゆけない----

（収集プロフィール）

能勢　妙子 (のせ　たえこ、１９１５～１９９９）東京出身。

　略歴

古川ロッパ一座などに在籍。昭和１０年、歌手デビュー。

昭和１２年　「あなたなしでは」ヒット。

　　１４年　　結婚

　　２２年秋　復帰

　　２４年　　K氏との関係で、夫に訴えられる。

　　２６年　　離婚。その後、K氏と結婚。

　主な曲

恋のカレンダー　　（古川緑波・能勢妙子 1937）

とんがらかっちゃ駄目よ　(1937・能勢妙子）＊映画『ハリキリ・ボーイ』（出演・古川緑波　藤原釜足 岸井明 能勢妙子）挿入歌。

電話むすめ　　（若杉雄三郎：詞　岡村雅雄：曲　昭和十二年）

あなたなしでは　（佐伯孝夫：詞、佐々木俊一：曲　昭和十二年）

　この曲は、日本各地（津々浦々）で、いまでもよく流れる、私が言うまでもない、定番の股旅物の名曲。特に、お祭りの歌謡・舞踏ショーなどで、よく使われる。取り上げるのが遅くなったのは、幾つか引っ掛かる言葉があったから。まず、舞台のひとつである江戸の「茶屋」。私ははじめ、やはりいかがわしい場所、と理解していた。下記のサイトから、それは誤解で、食事や酒を運ぶウェイトレスのような存在、であったという。ただ、茶碗酒ーー、のフレーズでは、現代のバーのホステス的な役割も感じられる。美人と評判になった女性は、浮世絵に描かれもしたという。現代のメイドカフェのメイドのような、身近なアイドル的存在、というのが近いイメージなのだろうか。
＊「歴史の泉」より
中途半端な聞きかじりで茶屋＝売春宿というイメージが一部で先行しています。そのような事はありません。歌川広重の東海道五十三次で有名な鞠子の宿はとろろ汁を提供する食事処ですし、一般に茶屋は食事などと提供する、旅人の休憩場所でした。茶屋＝売春宿という誤解の元になったのは逢引茶屋、出会い茶屋などと呼ばれる茶屋の存在です。これは、表向きは茶屋を装い、その内情はラブホテルです。現在にホテルとラブホテルが存在し、その内容が全く違うのと同じです。
　次に、かたちばかりのーー、のフレーズ。ということは、正式なめおとではない、ということ？正式なめおとでないのに、ラスト２行のように、そこまで尽くせる気が持てるのだろうか。色恋に縁遠い私には、いまいち判然としない。
　この曲には、のちの演歌・歌謡曲系の基本となる、溜めやコブシ、しゃくり、ゆらし、特有のリズムなどが、３分余の短い詞・曲のなかに溢れている。特に、各番の最終フレーズ、たとえば１番では「泣きたい」の「たい」の、たの部分を、５回ていどしゃくっている。（残りの２～４番も同様）つまり、０．５秒で済む所を、２秒半以上かけて歌唱しているのだ。ここが、この曲のキーポイントであり、演歌を演歌たらしめているカナメの部分でもあるのだ。
（作詩　藤田まさと　作曲　阿部武雄　昭和13）
　堅気育ちも　重なる旅に　いつか外れて　無宿者　知らぬ他国の　たそがれ時は　俺も泣きたい　ことばかり　染まぬ縁談(はなし)に　故郷をとんで　娘ざかりを　茶屋ぐらし　茶碗酒なら負けないけれど　人情からめば　もろくなるーーー
（収集プロフィール）
上原 敏（うえはら びん、1908年8月26日 - 1944年7月29日）秋田県出身の歌手。「妻恋道中」「裏町人生」のヒットを持つ戦前に活躍した流行歌手。最終学歴は専修大学卒業。
　略歴
昭和10年代（1930年代後半から1940年代前半）に一世を風靡した歌手。秋田県北秋田郡大館町(現・大館市)の商家「ネリヤ」に生まれる。大館中学（現・秋田県立大館鳳鳴高等学校）在学中からバイオリンに熱中。音楽の素養を身に付けた。スポーツは中学時代から野球を得意とし、専修大学商学部に入学後も得意の野球を楽しみ、大学リーグに選手として出場している。ポジションは

投手で、1933年春と1934年春の東京五大学リーグ戦優勝に貢献した。
＊「童謡の謎」より
この歌は、生まれて60年もの間、歌い継がれてきた"道中・股旅もの"の傑作。その頃、これに続き流行したにもかかわらず今では忘れ去られてしまった一曲がある。『おしどり道中』に隠れた『おしどり春姿』だ。♪春が来たよと富士山の風が　そっとおいらの胸に吹く･･･。「あの頃は全国、飛び回ってね。"おしどり"が2曲も売れたもんだから敏さんと私を世間では"おしどりコンビ"って呼んでたぐらいよ。」

華の昭和名歌３００　第　：幌馬車の唄　桜井 健二（共唱　和田春子）

　とてもいい曲だが、私の好みとは、少しズレがあるようだ。歌謡曲なのだが、唱歌・抒情歌に分類しても、許されるだろう。昭和７年の、和田春子のソロ版は、抒情性がより強く表現されている、といっていい。昭和１０年の、この共唱版は、全体にほのかな哀愁を秘めながら軽快で、のどかでリリックな流れが快い。桜井は、普通の大学を出ているようだが、発声のテクニックなどから推測して、クラシックの素養がありそうだ。津村謙の声を、簡略化し、ぐんと庶民的にしたような。けれど、嫌味の無いなかなかの美声である。私の見た動画には、古い映画のシーンなのだろうか、佐田啓二が出演している。
　夕（ゆうべ）に遠く　木の葉散る　並木の道を　ほろぼろと　君が幌馬車　見送りし
去年（こぞ）の別離（わかれ）が　とこしえよ
(収集プロフィール）
桜井 健二（さくらい けんじ、1913年（大正2年）～　）日本の歌手。主に戦前・戦中に活躍した。
 経歴
 埼玉県北埼玉郡忍町（現・行田市）生まれ。青山学院大学出身。
1935年（昭和10年）コロムビアレコードからデビュー。同年、ミス・コロムビアと吹き込んだ「幌馬車の唄」がヒットする。
テイチクレコード、タイヘイレコードと渡り歩き、戦前に多くの流行歌や戦時歌謡を吹き込んだ。
＊昭和７年にミス・コロムビアの歌でリリースされましたが、あまりヒットしませんでした。原野為二(池田不二男）は翌８年「片瀬波」のヒットを出していますが。ところがこの歌は当時日本領であった台湾でヒットして、民衆に歌われていたのでした。太平洋戦争が終わり、台湾は日本人の手から台湾人(鄭成功以来の漢人＝内省人)の手に戻りかかりましたが、そうはならず、この日本産の歌が歌い継がれた。
　主な曲
幌馬車の唄　（昭和１０年　詞：山田としを　曲：原野為二）＊歌唱：和田春子（別名　ミス・コロムビア・松原操）／桜井健二）
酒呑めど　　１９３６
都会の感傷　　１９３６
渚のわかれ　　１９３６
街かどの唄　　１９３６（昭和１１年）
愛国行進曲　　（大日本帝国軍楽隊　編曲　歌唱・東海林太郎　奥田良三　上原敏　桜井健二　島津英夫　日置静　石井肇　関種子　結城道子　青葉笙子　秋野敏子）
漢口だより　（徳土良介　作詩 能代八郎　作・編曲）

華の昭和名歌３００　第　：酒 は 涙 か 溜 息 か　藤山　一郎

　私は下戸なので、お酒に直接、依拠する曲は論評しにくいのだ。というのは、この曲は、かなり、というか多くを依拠しているので。いままでに、美空・五木・森など数十人の有力歌手による、この曲の歌唱を聴いてきた。けれどやはり、オリジナルの藤山一郎氏の歌唱が、優れているようだ。その時代の、雰囲気の見えない味付けというオーラが、ほかの歌手は当然のことながら、及ばないのだ。この曲は、短いフレーズのなかに、的確に、恋の苦さ、苦しさを凝縮しているように思う。詞もメロディーも、シンプルなゆえにかえって、その事象に対する普遍性を、保持しているのかも知れない。

（作詩　高橋掬太郎　作曲　古賀政男　昭和6年）

１　酒は涙か　溜息か
　　心のうさの　捨てどころ
２　遠いえにしの　かの人に
　　夜毎の夢の　切なさよ
　　(間　奏）
３　酒は涙か　溜息か
　　かなしい恋の　捨てどころ

(収集プロフィール）

高橋 掬太郎（たかはし きくたろう、1901年（明治34年）4月25日 - 1970年（昭和45年）4月9日）昭和期の作詞家。

経歴

北海道根室市出身。1901年（明治34年）4月25日、北海道の国後島で漁師の息子として生を受ける。

1922年（大正11年）、函館日日新聞に入社し、社会部長兼学芸部長として活躍するかたわら文芸同人誌に参加。詩や小説、脚本などを手がけた。

昭和6年、酒は涙か溜息か」で作詩家デビュー。

これは自身が日本コロムビア文芸部宛に直接投稿したもので、当時新進作曲家として注目されはじめていた古賀政男の作曲、藤山一郎の歌唱で大ヒットした。

戦後、キングレコードに移籍して同社専属作詩家として、数多くの作品を発表する生涯を貫いた。

昭和20年代には歌謡同人誌「歌謡文芸」を主宰し、後進の育成にも努力し、会員には後に人気作詩家として活躍した石本美由起、板倉文雄、英玲二、宮川哲夫、秋田泰治、橘真琴（のちの星野哲郎）らがいた。

1968年（昭和43年）、紫綬褒章受章。

1970年（昭和45年）4月9日死去。享年68。

生涯現役の息の長い作詩家であった。

尚、縁の深い函館市には、高橋掬太郎碑がある。

「流行歌三代物語」、「日本民謡の旅」など、その起源からを辿る多数の著書があり、流行歌の研究者としての顔があったことは現代では意外と知られていない。

代表曲

『酒は涙か溜息か』（昭和6年8月）［古賀政男作曲、歌：藤山一郎］
『私この頃憂鬱よ』（昭和6年8月）［古賀政男作曲、歌：淡谷のり子］
『片瀬波』（昭和7年11月）［原野為二作曲、歌：松山時夫］
『並木の雨』（昭和9年8月）［原野為二作曲、歌：ミス・コロムビア］
『利根の舟唄』（昭和9年8月）［古関裕而作曲、歌：松平晃］
『雪の国境』（昭和10年1月）［大村能章作曲、歌：伊藤久男］
『船頭可愛や』（昭和10年7月）［古関裕而作曲、歌：音丸］
『雨に咲く花』（昭和10年12月）［池田不二男作曲、歌：関種子］
『満州想えば』（昭和11年2月）［大村能章作曲、歌：音丸］
『博多夜船』（昭和11年8月）［大村能章作曲、歌：音丸］
『人妻椿』（昭和11年11月）［竹岡信幸作曲、歌：松平晃］
『満州吹雪』（昭和11年11月）［大村能章作曲、歌：音丸］
『アリラン月夜』（昭和12年4月）［服部良一作曲、歌：赤坂百太郎］
『夜霧の波止場』（昭和13年7月）［江口夜詩作曲、歌：霧島昇］
『かくて神風は吹く』（昭和20年2月）［竹岡信幸作曲、歌：高倉敏、近江俊郎］
『啼くな小鳩よ』（昭和22年1月）［飯田三郎作曲、歌：岡晴夫］
『小判鮫の唄』（昭和23年10月）［大村能章作曲、歌：小畑実］
『かりそめの恋』（昭和24年9月）［飯田三郎作曲、歌：三条町子］
『船は港にいつ帰る』（昭和26年3月）［細川潤一作曲、歌：岡晴夫］
『東京悲歌』（昭和26年11月）［飯田三郎作曲、歌：三条町子］
『湯の町月夜』（昭和27年1月）［江口夜詩作曲、歌：近江俊郎］
『瓢箪ブギ』（昭和29年12月）［江口夜詩作曲、歌：春日八郎］
『高原の宿』（昭和30年4月）［林伊佐緒作曲、歌：林伊佐緒］
『ここに幸あり』（昭和31年5月）［飯田三郎作曲、歌：大津美子］
『男涙の子守唄』（昭和31年5月）［細川潤一作曲、歌：三橋美智也］
『山陰の道』（昭和31年11月）［飯田三郎作曲、歌：若原一郎］
『一本刀土俵入り』（昭和32年4月）［細川潤一作曲、歌：三橋美智也］
『丘にのぼって』（昭和32年9月）［飯田三郎作曲、歌：若原一郎］
『古城』（昭和34年7月）［細川潤一作曲、歌：三橋美智也］
『足摺岬』（昭和34年11月）［吉田矢健治作曲、歌：春日八郎］
『石狩川悲歌』（昭和36年11月）江口浩司作曲、歌：三橋美智也］
『千曲川の恋』（昭和38年3月）　[小町昭作曲、歌：三船浩]
『新選組の旗はゆく』（昭和40年7月）　渡辺岳夫作曲、歌：春日八郎]
『千葉市立第六中学校校歌』［杉山長谷夫作曲］

＊「華の昭和名歌１５０選」\1、１５５が、文芸社から発売中。古書店、ネットも可。
＊ユーチューブに「ヨコハマ　過ぎ去りし日々は」をリリースしました。初音ミク、神園さやか、門倉有希、香西かおり、北川大介、清水翔太、木山裕作などに、歌唱して頂けると、嬉しいのですが。
＊お知らせ
演歌・歌謡曲系若手（インディーズ系・P版での活動者を含む）歌手たちをメインに、男女３０名ずつを選んで「平成。グリンプス３０」を、「華の平成名歌」に登録。また、活躍が期待される「ネオ・ルネッサンス２１世紀」も併設。メジャー等へのサポートに、どんどんご使用下さい。
＊期待される「平成＆平成メンズ。G３０」。ジャンル等、幅広く選択しました。
「平成。グリンプス３０メンズ」
竹島宏・ジェロ・福崎エリック・松田敏来・山内恵介・清水翔太・フォレスタ・清水博正・逢川まさき・市川たかし・長谷川真吾・岩出和也・柏木タカシ・大江裕・kenjiro・山川豊・黒川真一朗・大地誠・松原健之・秋川雅史・錦織健・宇都宮さだし・三山ひろし・走裕介・福田こうへい・東京大衆歌謡楽団・こおり健太・ル・ヴェルベッツ・木山ゆうじ
「平成。グリンプス３０」
山口ひろみ・井上由美子・大沢桃子・池内ゆかり・水田竜子・島津亜矢・市川由紀乃・大黒裕貴・林あさ美・神園さやか・上杉香緒里・椎名佐千子・真木ことみ・桜井くみ子・森山愛子・松川美樹・永井裕子・みずき舞・たむらばん・菊池まどか・かつき奈々・南かなこ・フォレスタ（女声）・小桜舞子・瀬口悠希・花咲ゆき美・金澤美咲・川野夏美・山本智子
「ネオ・ルネッサンス☆２１世紀」
真木柚布子・三代沙也可・水沢明美・夏木綾子・岡ゆう子・北野まち子・秋山涼子・北見恭子・あさみちゆき・服部浩子・門倉有希・西尾夕紀・多岐川舞子・音羽しのぶ・永井みゆき・田川寿美・谷本知美・サエラ・中島ゆきこ・大石まどか・浅田あつこ・椎名佐千子・山本みゆき・山口かおる・
秋岡秀治・加門亮・池田暉郎・加川明・加山こうじ・渡辺要・加納ひろし・北岡ひろし・小金沢昇司・鈴木雅之・半田浩二・永井龍雲・木原たけし・西方裕之・三浦わたる・鈴木一平・坂井一郎・野上こうじ・おおい大輔・新二郎・三田りょう・川崎修二・ロベルト杉浦・岡大介・北川大介・奥山えいじ・木山裕作

華の昭和名歌２００　第　：影を慕いて　藤山　一郎（オリジナル・佐藤　千夜子）

　いまさら言うまでもない大名曲。昔から、何百回となく聴いてきた唄だが、あらたに５、６人の歌唱を聴いてみた。古賀本人、天童よしみ、三橋美智也、米良良一、村下孝蔵など。ほかの有力歌手たちの歌唱は、すでにほとんど聴いているので。古賀本人の歌唱は、それなりの味はあるが、やはり他者への広がりに乏しい印象を受けた。聴く前に違和感を受けた米良版は、クラシック風の品のいいアレンジで、新鮮かつ素晴らしい。

　私は、この曲を聴くといつも、日本人の感情の有りようや愁嘆の表現、それらの典型的なケース、を感じてしまう。そして、日本人の深層心理や、日本的情念、日本的怨念、日本的ドロドロ、などを感じてしまう。もちろん、悪い意味ではなく、この延長線上に、現代を生きる人々の心理もあるということに、驚嘆するのだ。

(作詩・作曲　古賀政男 昭和6年）

１　まぼろしの
　　影を慕いて雨に日に
　　月にやるせぬ　我が想い
　　つつめば燃ゆる　胸の火に
　　身は焦がれつつ　しのび泣く

２　わびしさよ
　　せめて傷心の　なぐさめに
　　ギターをとりて　爪びけば
　　どこまで時雨　ゆく秋ぞ
　　トレモロ淋し　身は悲し

３　君故に
　　永き人生を　霜枯れて
　　永遠に春見ぬ　我がさだめ
　　永ろうべきか　空蝉の
　　儚なき影よ　我が恋よ

＊知られていない、もとの２番の歌詞です。

２　幻の影を慕えば　灯火の　光にきゆる　悲しさに　熱き泪は　枯れ果てて　いく夜寝　覚めの　夢寂し

＊『影を慕いて』（かげをしたいて） は、1931年（昭和6年）1月に発表された古賀政男作詞・作曲の昭和歌謡。

概要

昭和流行歌の傑作のひとつ。古賀政男の人生の苦悩・絶望からの魂の叫びが込められている。昭和初期、モダニズムの翳ともいうべき暗い世相が日本に蔓延していた。古賀は己のロマンチシズムが崩壊しその絶望から、青根温泉で自殺を図った。昭和3年の夏である。そのときに蔵王にかかった夕焼けを見て、『影を慕いて』の一片の詩が浮かんだ。1929年（昭和4年）6月、明治大学マ

ンドリン倶楽部の定期演奏会で、ギター合奏曲として発表。演奏会にゲストで出演していた佐藤千夜子が、流行歌にすることを古賀に勧めた。その年の秋、アンドレス・セゴビアの演奏に感銘し触発された古賀政男は『影を慕いて』の完成を急ぐ。当時の人気歌手・佐藤千夜子が『影を慕いて』を1930年（昭和5年）10月日本ビクターでレコーディングし、翌年1月新譜で発売されたが、このレコードはあまり売れなかった。ちなみに『影を慕いて』は『日本橋から』のB面だった。このレコードを浅草・鳥越の斉藤楽器店で発見した人物が、日本コロムビアの営業マン伊藤正憲だった。
この曲が一世を風靡するには、藤山一郎（声楽家・増永丈夫）の登場を待たなければならなかった。声楽家としての訓練を受けた藤山一郎は大きな功績を残した。正統な声楽的解釈にもとづくクルーン唱法でこの曲を歌い、古賀政男のギター歌曲の魅力を伝えたのである。
『影を慕いて』は、1932年（昭和7年）3月新譜で日本コロムビアから改めて藤山一郎の歌唱によって発売され、満州事変、五・一五事件など暗い世相を背景に人々の心をとらえ流行した。まさに昭和という時代の「翳」を象徴していた。
その後もこの曲は、美空ひばり、森進一など多くの歌手によって歌われ、それぞれの歌手が曲の哀愁・感傷（センチメンタリズム）を個性的に表現してきた。

華の昭和名歌３００　第　：僕 の 青 春(は る）　藤山　一郎

　懐メロとしてもあまり聞かない歌だが、その当時はかなり流行った歌だという。ジャズ調のとても明るい歌謡曲で、歌詞を一読したときの印象と、全く違うイメージの曲になっている。名曲として、ギリギリのラインだが、昭和初期という時代に、想いを馳せると、こんな明るい歌もあったのだ、ということに何だかホッとする。

（作詩　佐伯孝夫　作曲　佐々木俊一　昭和8年）

　　＊長い前奏

１　恋はたのしや街に
　　空には憧れが住むよ
　　僕の青春(はる）君の青春　踊る胸
　　恋の唇に灯影のグラスに
　　若さは燃える

２　君と語ろう窓に
　　ポプラは晴れやかに揺らぐ----

（収集プロフィール）

佐伯 孝夫（さえき たかお、1902年11月22日 - 1981年3月18日）東京都出身の、日本の作詞家。

　略歴

早稲田大学仏文科卒業。在学中西條八十に師事し、その主宰する雑誌『白孔雀』『愛誦』に詩を発表していた。1931年に国民新聞社（現在の東京新聞社）入社、1937年には東京日日新聞（現在の毎日新聞社）へと移る。1939年、ビクターレコード専属作詞家となる。西條八十門下生の1人。

戦前は、佐々木俊一と組み、多くを灰田勝彦や小畑実に作品を提供した。

戦後は、作曲家・吉田正とコンビを組み、『有楽町で逢いましょう』、『潮来笠』、『いつでも夢を』など数々のヒット曲を生み出した。

『ちいさい秋みつけた』など作詞のサトウハチローとの交流も深かった。

1981年3月18日、食道癌のため死去。享年80（78歳没）。

＊佐伯先生の歌詞を読むと、それにふさわしいメロディーが自然に出てくるのだそうです。佐伯のレパートリーは、フランク永井、松尾和子に代表される都会の哀愁物、橋幸夫、吉永小百合などに代表される青春歌謡、橋幸夫の股旅歌謡など広いジャンルに渡ります。作風は青春歌謡では、元気ハツラツ、カッコいい若者を歌い上げ、股旅調ではイキでイナセな侍や、渡世人の悲哀、世の中ままならぬ事のやるせなさなどを歌っています。

やけっぱちな心情でもド演歌にならず、どこか上品な詞となっています。

代表曲

さくら音頭（作曲：中山晋平、歌：小唄勝太郎、三島一声、徳山璉、1934年3月）

さらば青春（作曲：加藤しのぶ、歌：藤山一郎、1934）

無情の夢（作曲：佐々木俊一、歌：児玉好雄、1935）

とんがらがっちゃ嫌よ（作曲：三宅幹夫、歌：渡辺はま子、1936）

熱海ブルース（作曲：塙六郎、歌：由利あけみ、1939）
燦めく星座（作曲：佐々木俊一、歌：灰田勝彦、1940）
森の小径（作曲：灰田晴彦、歌：灰田勝彦、1940）
明日はお立ちか（作曲：佐々木俊一、歌：小唄勝太郎、1942）
マニラの街角で（作曲：清水保雄、歌：灰田勝彦、歌上艶子、1942）
新雪（作曲：佐々木俊一、歌：灰田勝彦、1942）
鈴懸の径（作曲：灰田晴彦、歌：灰田勝彦、1942）
婦系図の歌（作曲：清水保雄、歌：小畑実、藤原亮子、1942）
バダビアの夜は更けて（作曲：清水保雄、歌：灰田勝彦、1942）
勘太郎月夜唄（作曲：清水保雄、歌：小畑実、藤原亮子、1943）
若い力（作曲：高田信一、第２回国民体育大会・大会歌、1947）
東京の屋根の下（作曲：服部良一、歌：灰田勝彦、1948）
三味線ブギウギ（作曲：服部良一、歌：市丸、1949）
月よりの使者（作曲：佐々木俊一、歌：竹山逸郎、藤原亮子、1949）
銀座カンカン娘（作曲：服部良一、歌：高峰秀子、1949）
夜来香（作曲：黎錦光、山口淑子（李香蘭）、1950）
火の鳥（作曲：佐々木俊一、歌：渡辺はま子、宇都美清、1950）
桑港のチャイナタウン（作曲：佐々木俊一、歌：渡辺はま子、1950）
アルプスの牧場（作曲：佐々木俊一、歌：灰田勝彦、1951）
野球小僧（作曲：佐々木俊一、歌：灰田勝彦、1951）
白樺の小径（作曲：佐々木俊一、歌：淡谷のり子、1951）
弥太郎笠（作曲：吉田正、歌：鶴田浩二、1952）
ハワイの夜（作曲：司潤吉、歌：鶴田浩二、1953）
花の三度笠（作曲：吉田正、歌：小畑実、1953）
弁天小僧（作曲：吉田正、歌：三浦洸一、1955）
東京の人（作曲：吉田正、歌：三浦洸一、1956）
哀愁の街に霧が降る（作曲：吉田正、歌：山田真二、1956）
ああダムの町（作曲：吉田正、歌：三浦洸一、1956）
東京午前三時（作曲：吉田正、歌：フランク永井、1957）
郵便船が来たとヨー（作曲：吉田正、歌：三浦洸一、1957）
有楽町で逢いましょう（作曲：吉田正、歌：フランク永井、1957）
西銀座駅前（作曲：吉田正、歌：フランク永井、1958）
好きな人（作曲：吉田正、歌：藤本二三代、1958）
有楽町0番街（作曲：吉田正、歌：フランク永井、1958）
俺は淋しいんだ（作曲：渡久地政信、歌：フランク永井、1958）
泣けるうちゃいいさ（作曲：吉田正、歌：和田弘とマヒナスターズ、1959）
東京ナイト・クラブ（作曲：吉田正、歌：フランク永井、松尾和子、1959）

グッド・ナイト（作曲：吉田正、歌：松尾和子、和田弘とマヒナスターズ、1959）
潮来笠（作曲：吉田正、歌：橋幸夫、1960）
再会（作曲：吉田正、歌：松尾和子、1960）
好き好き好き（作曲：吉田正、歌：フランク永井、1960）
東京カチート（作曲：吉田正、歌：フランク永井、1960）
おけさ唄えば（作曲：吉田正、歌：橋幸夫、1960）
南海の美少年（作曲：吉田正、歌：橋幸夫、1961）
江梨子（作曲：吉田正、歌：橋幸夫、1962）
寒い朝（作曲：吉田正、歌：吉永小百合、和田弘とマヒナスターズ、1962）
いつでも夢を（作曲：吉田正、歌：橋幸夫、吉永小百合、1962）
燃ゆる太陽（作曲：吉田正、早稲田大学創立80周年・応援歌、1962）
伊豆の踊り子（作曲：吉田正、歌：吉永小百合、1963）
愛と死のテーマ：映画『愛と死をみつめて』主題歌（曲：吉田正、歌：吉永小百合、1964）
恋をするなら（作曲：吉田正、歌：橋幸夫、1964）
恋のメキシカン・ロック（作曲：吉田正、歌：橋幸夫、1967）
千葉県立小金高等学校・校歌（作曲：吉田正、1965）

華の昭和名歌３００　第　：丘 を 越 え て　藤山　一郎

　最近になって、この曲をまだ収録していなかったことに気づく。ある程度以上、その時代の社会に影響を与えた、と思われる古い名曲を、私は現在辿っている。ジャンルを問わず、その取捨の判断基準は、あくまで私の感性にある程度以上響いたもの、ということになる。ご了承を。
　さて、言うまでもない国民的名歌。私は、この作詞者について、ほとんど知識がないのだ。最近になって、ようやく、松井義弘氏による労作の伝記が出たというが。
　一読して、この「丘を越えて」の歌詞は、永遠性ともいうべきものを持っている。人生の「明」の部分を舞台に、至福感に満ちた青春、将来への明るい希望、など誰にもあろまほしき時を大らかに明るく唄っている。別れや悲しみ、酒、挫折を唄った曲が大半のなかで、聴く者に、慰めと明るい勇気を与えてくれる稀有な名曲。
（詩　島田芳文　曲　古賀政男　昭和6年）
１　丘を越えて行こうよ
　　真澄の空は朗らかに
　　晴れてたのしいこころ
　　鳴るは胸の血潮よ
　　讃えよわが青春(はる)を
　　いざゆけ遙か希望の　丘を越えて
２　丘を越えて行こうよ
　　小春の空は麗らかに
　　澄みて嬉しいこころ
　　湧くは胸の泉よ
　　讃えよわが青春を
　　いざ聞け遠く希望の　鐘は鳴るよ
(収集プロフィール）
島田 芳文（しまだ よしふみ、1898年（明治31年）2月11日～1973年（昭和48年）5月3日）昭和期の作詞家。
 経歴
福岡県豊前市黒土生まれ。早稲田大学出身。中学時代に島田青峰、若山牧水に短歌を学ぶ。1927年（昭和2年）、処女詩集「農土思慕」刊行。
1929年（昭和4年）、コロムビアレコードの専属作詞家になる。1931年（昭和6年）には、古賀政男と組んだ一連の作品「キャンプ小唄」、「丘を越えて」、「スキーの唄」が大ヒット。藤山一郎の歌声でたくさんの人々に愛唱された。
1941年（昭和16年）に発表した、「雪の満州里」を最後に作詞家活動を休業。戦後は、故郷黒土に移住し、農業などをして暮らした。
1973年（昭和48年）5月3日死去。享年75。
＊豊前市黒土（くろつち）に生まれた。生家は一帯の大地主。父は八屋警察署長、黒土村長など

を歴任し、芳文もまた、戦後の一時期、黒土に住み、農地委員、教育委員などを務めている。
　芳文と言えば『丘を越えて』。今でも根強い人気を持つ国民歌謡だ。芳文がこの歌を作詞したのは昭和6年、コロンビアレコードに専属作詞家として入社して2年目だった。作曲古賀政男、歌藤山一郎。年譜をたどれば、この昭和6年の前後が作詞家島田芳文の全盛期となる。彼の活躍の時代は長くは続かなかった。世の中の暗転とともに作詞数は次第に減少し、昭和17年の『雪の満州里』をもってその活動に終止符が打たれている。コンビを組んだ古賀政男のその後の活躍と比べると、芳文はあまりに早くその活動の場を失っている。
　渡辺前図書館長によれば「彼は時流に乗れない不器用な人。そして、なによりhungryでなかった」という。前述の通り、彼の生家は黒土の大地主だ。今でも、壮大な旧邸には縁者の方が住んでおられるが、それがために、彼は生活の苦労をほとんど体験しないままに生涯を送っている。彼自身の回顧にも、「大学生時代の生活費は月に2000円だった」というのがあるが、これは当時の一般の世帯の生活費のほぼ10倍。彼の歌の率直な歓喜の表現の仕様や、作詞家としてその世界に残りえなかった無欲さのよってきたるところはこの辺に起因しているようだ。
　年譜によれば、早稲田大学では弁論部に所属。浅沼稲次郎（元社会党委員長）や河野一郎（洋平の父、元自民党領袖）らとの交遊があるが、後に文学に転向、民謡集『郵便船』などを自費出版。また昭和2年には詩集『農土思慕』を出版。所載の詩は、当時のモダニズムの影響が強い。ただ、これらの詩集の序文には、詩人としての強烈な自負の念が綴られており、戦後の軽井沢での隠遁生活に繋がるものが感じられる。芳文の詩集を読んでいくと、原風景に豊前市の農村である黒土の自然と人々があることがよく分かる。
この農民讃歌は、大地主としての芳文の生い立ちともちろん無縁ではない。彼は家の維持、管理のために作詞家として活躍中にも度々帰郷している。戦後は、昭和35年まで黒土に居住。以後も夫人らは黒土に生活した。そして、そこに働く人々を見て、自らの生活を支える土と農夫に深い憧憬を抱いたのだろう。『野の祈り』という詩がある。
　『瑠璃いろに澄みきった連山は／グット力強く空と野を抱きしめている／土にまめな農夫婦は／艶艶した黒土から／法瑯のように真白い大根を引抜いている／私はこの宇宙大に描かれた三角形の頂点に立って／聖心に裹(か) まれながら静かな野に黙祷を捧げる』
　昭和35年、芳文は黒土を離れて、北軽井沢の山荘に移った。そこでは薪とランプの一人暮らしだった。土への憧憬がこの生活を選ばせたとも言え、また、自嘲的に彼が「今の生活費も2000円」と、大学時代を思い出して言ったそうだが、これも農＝貧への彼の生い立ちからくるこだわりが言わしめたものなのだろう。
土への憧憬は、彼が多くの民謡を作っていることからもうかがえる。ただ、それも従来の民謡とはことなった、明るい開放感に満ちた歌が多いことが特筆できる。例えば初期民謡『畑に太陽が』では、『畑に夕陽が／落ち行くころは／遙か都が／慕われる村を出るとき／ああああの方が／言った情けが／偲ばれる／いくら思えど---』
　作詞家・島田芳文は戦争を契機に斯界から消えた。その後は、詩人として生き続けた。戦後、軽井沢での隠遁生活は、この詩人としての自分を再度確立するためのそれであったようだ。終生詩人たらんと欲した芳文の足跡を辿ることのできる資料は余りに少ない。

＊『丘を越えて』は、前奏・間奏・後奏がそれぞれ独立した一曲に値するような名曲です。藤山一郎がうたった古賀メロデー初期の名曲。日本歌謡曲のなかで大衆にもっとも広く、永く愛された「丘を越えて」は、昭和６年に島田芳文作詞、古賀政男作曲、藤山一郎唄というフレッシュコンビで世に出、大ヒット以来今日まで愛誦されていますが、その作詞者島田芳文（明治３１年～昭和４８年）は北軽井沢をこよなく愛し戦後は浅間高原の近くの山荘に住み自然を友として悠々自適の生活に生き、この碑をみずから庭に建て名作を生んだ若き日をなつかしんでいました。没後これを唄の舞台になった丘に移し大衆の想いに触れることを念じ、ここに設立されることになりました。

＊松井義弘・著「青春の丘を越えて―詩人島田芳文とその時代」石風社・２００７

　主な曲

『キャンプ小唄』（昭和6年6月）［古賀政男作曲、歌：藤山一郎］

『月の浜辺』（昭和6年6月）［古賀政男作曲、歌：河原喜久恵］

『丘を越えて』（昭和6年11月）［古賀政男作曲、歌：藤山一郎］

『窓に凭れて』（昭和6年11月）［古賀政男作曲、歌：関種子］

『スキーの唄』（昭和6年12月）［古賀政男作曲、歌：藤山一郎］

『山は招く』（昭和7年5月）［佐藤吉五郎作曲、歌：中野忠晴］

『恋の大島』（昭和8年7月）［佐々紅華作曲、歌：藤本二三吉］

『急げ幌馬車』（昭和9年1月）［江口夜詩作曲、歌：松平晃］

『ハイキングの唄』（昭和10年5月）［古賀政男作曲、歌：楠木繁夫］

『夕べ仄かに』（昭和10年5月）［古賀政男作曲、歌：松島詩子］

『歓喜の丘』（昭和13年5月）［古賀政男作曲、歌：藤山一郎］

『青春の丘』（昭和14年5月）［陸奥明作曲、歌：北廉太郎］

『雪の満州里』（昭和16年11月）［陸奥明作曲、歌：ディック・ミネ］

比叡讃歌

美わしの宵

野分の歌

　童謡など

「仔羊」

作詞 島田芳文／作曲 小松清

「大寒小寒」

作詞 島田芳文／作曲 平岡均之

「霰やこんこ」

作詞 島田芳文／作曲 室崎琴月

「カチカチ山」

作詞 島田芳文／作曲 松島彝

「魚屋さん」

作詞 島田芳文／作曲 長妻完至

「月夜の狸」
作詞 島田芳文／作曲 長妻完至
「仲よし小よし」
作詞 島田芳文／作曲 佐々木英
「よいよい横丁」
作詞 島田芳文／作曲 佐々木英
「昼の月」
作詞 島田芳文／作曲 大中寅二
「潮干狩」
作詞 島田芳文／作曲 大中寅二
「つばめ」
作詞 島田芳文／作曲 大中寅二
「ポプラ」
作詞 島田芳文／作曲 大中寅二
「みづすまし」
作詞 島田芳文／作曲 大中寅二

華の昭和名歌３００　第　：妻恋道中　上原　敏

　私が子供だった頃、皆が楽しみにしていた、夏祭りのイベントの大衆演劇。自分の街は勿論だが、ほかにも、今日はあの街、明日はこの街、で上演されていた大衆演劇。電車やバスも使ったが、普通は、歩いていける半径４キロ以内くらいの場所。観客は、街の規模によって違うが、数百人から数千人。神社の境内や小学校のグラウンドに、仮設の簡素な小屋が掛けられ、そこで侍物や股旅物、「瞼の母」などの母物、「鍋島の怪猫伝説」「番町皿屋敷」などの恐怖譚が上演された。そして、その芝居の後に、休憩をはさんで、唄の主人公に扮した役者が登場し、華やかな花魁・お姫様物（女形の方が多かったが、その一座の女性もいた。登場者のなかには無理ムリの６０歳以上の方も、かなり）、侍物、股旅物などの曲に合わせて踊る、歌謡ショーが１０組くらい続けて行われた。煌びやかな衣装に幻惑されたり、イケメンの看板役者の、粋な股旅姿や凛々しい侍姿などに、魅了された。この唄や、「流転」「旅笠道中」などは、ほぼ必ず、というくらいの頻度で上演されていた。あの頃の、人々のエネルギーと、今の人々のエネルギーは、どこか違う気がするが。それがどういう事なのかは、私にもよく判らないのだ。

（詞　藤田まさと　曲　阿部武雄　昭和12年）

１　好いた女房に 三下り半を
　　投げて長どす 永の旅
　　怨むまいぞえ 俺らのことは
　　またの浮世で 逢うまでは

２　惚れていながら　惚れないそぶり
　　それがやくざの 恋とやら
　　二度と添うまい 街道がらす

（収集プロフィール）

藤田 まさと（ふじたまさと、1908年（明治４１）5月12日 - 1982年8月16日）は、静岡県榛原郡川崎町（現・牧之原市）出身の作詞家。

来歴

1918年（大正7年）旧満州の辽宁（りゃおにん）省大連に渡り、1926年（大正15年）大連商業学校卒。大連商時代には、野球で甲子園に出場している。内地に戻り、明治大学に入学したが、1928年（昭和3年）、3年生で大学を中退し、日本ポリドール蓄音機株式会社に入社する。制作部長、文芸部長を歴任しながら作詞活動も行い、1935年（昭和10年）、「旅笠道中」、「明治一代女」の大ヒットで一躍人気作詞家となった。戦後も「岸壁の母」などのヒットがある。1979年（昭和54年）には、自身もレコードを出し歌手としてデビューしている。晩年には、「浪花節だよ人生は」のヒット曲がある。

1969年（昭和44年）、紫綬褒章受章。 1970年（昭和45年）、日本作詩大賞受賞。 1973年（昭和48年）第15回日本レコード大賞、1978年（昭和53年）第20回日本レコード大賞特別賞受賞。1978年（昭和53年）、勲三等瑞宝章受章。

代表曲

『街の流れ鳥』（昭和8年8月）［山田栄一作曲、歌：渡辺光子］
『下田しぐれ』（昭和10年2月）［森義八郎作曲、歌：東海林太郎］
『旅笠道中』（昭和10年4月）［大村能章作曲、歌：東海林太郎］
『丹下左膳の唄』（昭和10年7月）［阿部武雄作曲、歌：東海林太郎］
『お伝地獄の唄』（昭和10年8月）［大村能章作曲、歌：新橋喜代三］
『博多小女郎波枕』（昭和10年9月）［大村能章作曲、歌：東海林太郎］
『お駒恋姿』（昭和10年10月）［大村能章作曲、歌：東海林太郎］
『明治一代女』（昭和10年11月）［大村能章作曲、歌：新橋喜代三］
『国定忠治の歌』（昭和11年2月）［大村能章作曲、歌：東海林太郎］
『妻恋道中』（昭和12年4月）［阿部武雄作曲、歌：上原敏］
『流転』（昭和12年7月）［阿部武雄作曲、歌：上原敏］
『鴛鴦道中』（昭和13年1月）［阿部武雄作曲、歌：上原敏、青葉笙子］
『関の弥太っぺ』（昭和13年6月）［阿部武雄作曲、歌：高田浩吉］
『麦と兵隊』（昭和13年12月）［大村能章作曲、歌：東海林太郎］
『潮来夜船』（昭和14年9月）［倉若晴生作曲、歌：北廉太郎］
『大利根月夜』（昭和14年11月）［長津義司作曲、歌：田端義夫］
『軍国舞扇』（昭和16年10月）［陸奥明作曲、歌：東海林太郎、台詞森赫子］
『岸壁の母』（昭和29年10月）［平川浪竜作曲、歌：菊池章子（1972年、二葉百合子によって再ヒット）］
『旅笠道中』（昭和33年5月）［春川一夫作曲、歌：三波春夫］
『一本刀土俵入り』（昭和35年2月）［春川一夫作曲、歌：三波春夫］
『桃中軒雲右衛門』（昭和35年4月）［長津義司作曲、歌：三波春夫］
『まつの木小唄』（昭和40年2月）［夢虹二作詞共作、不詳作曲、歌：二宮ゆき子］
この作品は競作。他の歌手は三島敏夫、小桜姉妹 & 西田八郎、朝丘雪路など（いずれも歌詞は異なる）だが、レコード売上は二宮盤がミリオンセラーを記録して圧勝した。
『信玄おどり』（昭和41年4月）［長津義司作曲、歌：三波春夫］
『恋ひとすじ』（昭和45年2月）［猪俣公章作曲、歌：森進一］
『傷だらけの人生』（昭和45年12月）［吉田正作曲、歌：鶴田浩二］
『男』（昭和46年7月）［吉田正作曲、歌：鶴田浩二
『旅鴉』（昭和47年11月）［遠藤実作曲、歌：五木ひろし］
『ある女の詩』（昭和47年11月）［井上かつお作曲、歌：美空ひばり］
『今日も笑顔でこんにちは』（昭和49年7月）［新井利昌作曲、歌：森昌子］
『灯りが欲しい』（昭和52年9月）［遠藤実作曲、歌：五木ひろし］
『男の人生』（昭和54年5月）［遠藤実作曲、歌：杉良太郎］
『しあわせ音頭』（昭和57年7月）［細野晴臣、歌：柏原芳恵］
『浪花節だよ人生は』（昭和59年8月）［四方章人作曲、歌：木村友衛］
この作品は競作。他の歌手は細川たかし、祐子と弥生、水前寺清子など。

＊昭和12年（1937）の日活京都撮影所作品『妻恋道中』の主題歌。
＊上原敏は秋田出身で、専修大学の野球部のエースを務めました。その後、製薬会社勤務を経て、藤田まさとの推薦で昭和11年（1936）に歌手デビュー。『妻恋道中』25万枚の大ヒットを皮切りに、『流転』『裏町人生』とヒットを連発。
＊遠い昔の男たちは、今とは精神構造が違っていたのでしょうか？この歌は大いに違っていたことを示しています。「やせ我慢の美学極まれり」という感じなのです。この歌が発表された昭和１２年は、７月７日盧溝橋事件が勃発、直後に大陸出兵と東亜の天地が風雲急を告げつつあった年。
＊戦後色強い昭和20～30年ごろは各地で素人芝居がおお流行りで郷土の慰安でもありました。賑やかな一コマです。幕間も長くレコードばかり聞かされても皆待っていま

うれしいひなまつり　河村　順子

　学校で習う前から、自然と耳に入って覚えている歌。いまでも多くの日本人が、そのパターンを踏襲しているだろう。伝統行事を、童謡にしてみた、といっていいのだろうか。生まれる１４年も前のことだから、判らない。河村氏の童謡を、はじめ私は、自然発生的なものに依拠している、と思っていた。けれど、精査してみると、まったく違って、精緻な音楽理論に基づいていることに気づいた。このため、ほかの多くの有名な童謡と異なって、適度な明るさと楽しさがあるのだろう。
（作詞：サトウハチロー、作曲：河村光陽　１９３６）
１　あかりをつけましょ　ぼんぼりに
　　お花をあげましょ　桃の花
　　五人ばやしの　笛太鼓
　　今日はたのしい　ひなまつり
２　お内裏様（だいりさま）と　おひな様
　　二人ならんで　すまし顔
　　お嫁にいらした　姉様に
　　よく似た官女の　白い顔
３　金のびょうぶに　うつる灯（ひ)を
　　かすかにゆする　春の風ーーー
（収集プロフィール）
河村 光陽（かわむら こうよう、1897年8月23日～1946年12月24日）昭和期の戦前から戦中にかけて活躍した作曲家。長女は歌手の河村順子。
略歴
1897年（明治30年）福岡県田川郡上野村（現・福智町）の裕福な地主の家に生まれる。小倉師範学校を卒業後、地元の小学校で音楽教師をしていたが、ロシア音楽、特に国民楽派に傾倒していた彼は、1920年モスクワでの音楽研究を夢見て朝鮮に渡った。しかし、当時のロシアは革命後の混乱期で、ゆっくり音楽の研究ができる状態ではなかったため、朝鮮にとどまり、師範学校や公立学校の音楽教師をして時を待った。
1924年帰国。東京音楽学校選科（現・東京芸術大学大学院）で、音楽理論などを学ぶ。1926年頃から自作曲の発表やピアノ伴奏者としての活動を始める。1929年から竹早小学校で音楽教師を務める傍らで、数多くの楽曲を発表。1931年に佐藤義美の難解な童謡詩「ほろほろ鳥」に曲をつけ、また1934年に佐藤作詞の「グッドバイ」を発表して世に認められた。
1936年にキングレコードの専属作曲家となったのを機に河村光陽と改名。この年に発表した山野三郎作詞の「うれしいひなまつり」が大ヒット、翌1937年に武内俊子作詞の「かもめの水兵さん」と続く。武内俊子との「赤い帽子白い帽子」「りんごのひとりごと」「雨傘唐傘」「船頭さん」など後世に残るものを含め、千曲を越える童謡を発表。大半の楽曲は長女の順子歌唱によるレコードで発表された。
1940年の夏には、富山放送局の依頼で、指揮が光陽、長女の順子が歌唱、次女の陽子がピアノ、三女の博子がヴァイオリンという編成のファミリーコンサートを開催し、ラジオ放送もされている。（1938年以前から光陽は3人娘との演奏旅行を行なっていた）1946年12月24日、胃潰瘍による出血のために急死。
主な作曲曲
ほろほろ鳥（1931年）（作詞：佐藤義美）
グッドバイ（1934年）（作詞：佐藤義美）
うれしいひなまつり（1936年）（作詞：山野三郎（サトウハチローの変名））
かもめの水兵さん（1937年）（作詞：武内俊子）
赤い帽子白い帽子（1937年）（作詞：武内俊子）
早起き時計（1937年）（作詞：富原薫）
仲良し小道（1939年）（作詞：三苫やすし（河村光陽と同郷））
りんごのひとりごと（1940年）（作詞：武内俊子）
船頭さん（1941年）（作詞：武内俊子）
雨傘唐傘（作詞：武内俊子）
＊河村 順子（かわむら じゅんこ、1925年（大正14年）8月29日 - 2007年（平成19年）1月20日）日本の童謡歌手。父は童謡作曲家の河村光陽。妹もそれぞれ童謡歌手の陽子（1927年11月8日 - ）、博子（1929年8月9日 - ）。
略歴
東京都小石川区久堅町出身。1932年（昭和7年）、「かごめかごめ」「お薬とり」でポリドールレコードからデビュー。1935年（昭和10年）1月、ポリドール専属となる。1936年（昭和11年）

レコードからデビュー。1938年（昭和13年）1月、ポリドール専属となる。1939年（昭和14年）、キングレコードに移籍し、同年2月、父河村光陽が作曲した「うれしいひなまつり」が大ヒット。以降父の作曲した「かもめの水兵さん」、「りんごのひとりごと」、「赤い帽子白い帽子」などがヒットした。特に、「かもめの水兵さん」については、戦前・戦中の童謡SP盤で一番販売した作品であった。その後は声楽家の木下保に師事するが、1941年（昭和16年）、音楽学校入学のためキングとの専属を解消し、1944年（昭和19年）、武蔵野音楽学校声楽科に入学。1946年12月24日、父の光陽が急死し、父の率いていた子鳩会児童合唱団を引き継ぐ。
音楽学校卒業後、歌劇「カルメン」のミカエラ役として再デビュー。NHK「子供の時間」、ニッポン放送で歌のお姉さんとしてレギュラー出演する傍ら、各社で童謡をレコーディング。
1963年（昭和38年）、オーストリア・ザルツブルクのオルフ研究所へ留学。帰国後の1966年（昭和41年）からは、千葉敬愛短期大学教授となり、音楽指導を行った。

華の昭和名歌３００　第　：麦と兵隊　東海林　太郎

＊昨年、自主制作した「ヨコハマ　過ぎ去りし日々は」を、ユーチューブにアップ。初音ミクや鏡音リンに、唄って欲しいのです。ノウハウのある方、ぜひＢo.お願いします。２０１３年末まで、許可不要（演奏・歌唱なども）ですので、皆様ぜひトライしてみて。　　この曲は、私が子供の頃、ラジオや商店街から、よく流れていた。戦後１０年前後がたった頃だが。内容からいって、ＧＨＱ（連合国最高司令官総司令部を意味する。1945年に アメリカ政府が設置した対日占領政策の実施機関）の規制には掛からなかったのか、規制がすでに解除されていたのだろうか？ともあれ、一度聴くと、素直に心に入り込んでくる唄。東海林は、（すこし濡れた）歌唱に、なぜか民謡調のテイストを塗しているが。

　ここからは、私が苦手な、あまり分析に入りたくない領域。けれど、この名曲にきちんと対峙するためには、踏み込むべき世界であろう。この曲や、多くの戦時歌謡などの、基底に生きている、固有の民族的心情や行動は、いかに西洋や他の世界の影響を受けようとも、その風土と文化的背景から生み出されるコアなものは、どれだけ時が経とうとも、そう変化するものではないのだ。これは日本だけでなく、現在、地球上で戦乱となっている多くの紛争。当事者は、それぞれ一歩も引けない理由があるのだろう。

　このように、いまも悲劇は繰り返され、それ故に果てることもなく、悲劇は拡大・増幅してゆく。戦時歌謡が省りみられなくなったときに、平和は訪れるのだろうか？

（作詩　藤田まさと　作曲　大村能章 昭和13年）

１ 徐州徐州と　人馬は進む
　徐州居よいか　住みよいか
　洒落た文句に　振り返りゃ
　お国訛りの　おけさ節畏友
　ひげがほほえむ　麦畠

２ 友を背にして　道なき道を
　行けば戦野は　夜の雨
　「すまぬすまぬ」を背中に聞けば
　「馬鹿を云うな」とまた進む
　兵の歩みの　頼もしさ

３ 腕をたたいて　遥かな空を
　仰ぐ眸に　雲が飛ぶ
　遠く祖国を　はなれ来て
　しみじみ知った　祖国愛
　友よ来て見よ　あの雲を

４ 行けど進めど　麦また麦の
　波の深さよ　夜の寒さ
　声を殺して　黙々と

　影を落して　粛々と
　兵は徐州へ　前線へ
（収集プロフィール）
大村 能章（おおむら のうしょう、1893年（明治26年）12月13日 - 1962年（昭和37年）1月23日）昭和期の作曲家。山口県防府市多々良に米穀商大村良之助、ユフの長男として生まれる。
略歴
1909年（明治42年） - 横須賀海軍軍楽隊に入隊。
1920年（大正9年） - 帰郷後、御園ツネ子と結婚。1女を得る。
1926年（大正15年） - 再上京して作曲家をめざす。
1931年（昭和6年） - 日本歌謡学院を創設。
1933年（昭和8年） - レコード音楽芸術講義録（通信教育）を出版、後進の育成にあたる。
1935年（昭和10年） - 藤田まさとの詞に曲をつけた「旅笠道中」が大ヒット。
1947年（昭和22年） - 日本音楽著作者組合（後の日本音楽著作権協会）を設立。
1957年（昭和32年） - 社会奉仕会『能章会』を設立
1958年（昭和33年） - 日本作曲家協会設立に参画
1962年（昭和37年）1月23日 - 肺癌のため死去。享年69。
＊生誕地である防府市佐波神社には大村能章顕彰碑が建っている。
自身が作曲した「同期の桜」（原題戦友の唄）については、死ぬまで自分が作曲したとは口にしなかったという。
代表曲
旅は鼻唄（昭和10年1月）［佐藤惣之助作詞、歌：東海林太郎］
旅笠道中（昭和10年4月）［藤田まさと作詞、歌：東海林太郎］
お伝地獄の唄（昭和10年8月）［藤田まさと作詞、歌：新橋喜代三］
博多小女郎波枕（昭和10年9月）［藤田まさと作詞、歌：東海林太郎］
野崎小唄（昭和10年10月）［今中楓渓作詞、歌：東海林太郎］
お駒恋姿（昭和10年10月）［藤田まさと作詞、歌：東海林太郎］
明治一代女（昭和10年11月）［藤田まさと作詞、歌：新橋喜代三］
満州想えば（昭和11年2月）［高橋掬太郎作詞、歌：音丸］
お夏清十郎（昭和11年4月）［佐藤惣之助作詞、歌：東海林太郎］
博多夜船（昭和11年8月）［高橋掬太郎作詞、歌：音丸］
満州吹雪（昭和11年11月）［高橋掬太郎作詞、歌：音丸］
麦と兵隊（昭和13年12月）［藤田まさと作詞、歌：東海林太郎］
土と兵隊（昭和14年1月）［藤田まさと作詞、歌：東海林太郎］
戦友の唄（同期の桜）（昭和14年7月）［西條八十作詞、歌：樋口静雄］
花と兵隊（昭和14年8月）［藤田まさと作詞、歌：東海林太郎］
艦上機恙なし（昭和17年10月）［深沢健三作詞、歌：岡晴夫］
小判鮫の歌（昭和23年10月）［高橋掬太郎作詞、歌：小畑実］

華の昭和名歌３００　第　：山は夕焼　東海林　太郎

　かつて、聴いたことがあるはずの唄なのだが、記憶がない。一読した所、全国どこでも共通する風景。この為、はっきりとしたイメージが、立ち上がらず、印象が薄くなっているのだ。オリジナルと、三橋美智也のカバーを聴いたが、曲は予想ほど泥臭くない。ただし、そのクオリティーは、東海林太郎版が圧倒している、と言っていい。東海林版は、曲の情景の奥深くに引き込む力があり、三橋版は、日本の田舎や都市近郊の街はずれ、といった印象。全体に、やるせなく、ほのかな哀愁に満ちていて、聴く人の慰めとなり、カタルシス的な効果もある。現代を生きている人でも、落ち込んだときなどに聴くと、よく分かる世界であろう。

（詩　岡田千秋　曲　田村しげる　昭和９年）

１　山は夕焼　麓は小焼
　　ひとりとぼとぼ　裾野(すその)に暮れりゃ
　　吹くな木枯　侘(わび)びしゅてならぬ
　　心しみじみ　旅の鳥

２　西に東に　仮寝(かりね)の枕
　　思い遙かな　ふるさと偲(しの)びゃ
　　遠い灯(あかり)が　恋しゆてならぬ
　　心しみじみ　里ごころ

３　塒(ねぐら)定めぬ　はかない旅路
　　きょうもとぼとぼ　枯野を辿(たど)りゃ
　　沈む夕陽が　哀(かな)しゅてならぬ
　　心しみじみ　一つ星

（収集プロフィール）

田村 しげる（たむら しげる、**1908**年（明治**41**年）**12**月**20**日 **- 1980**年（昭和**55**年）**10**月**14**日）昭和期の作曲家。

経歴

京都府峰山町（現京丹後市）出身。家は、現在の田村写真館(京丹後市峰山町白銀) **1925**年（大正**14**年）、地元の宮津中学を卒業し上京。武蔵野音楽学校に入学。 **1927**年（昭和**2**年）**3**月**7**日に発生した北丹後地震で故郷の家が被災し、財産を喪失。苦学の末に武蔵野音楽大学を卒業。

1931年（昭和**6**年）ビクターから「酔って笑って」を作曲し作曲家デビュー。翌年キングレコードの専属となり、東海林太郎等に曲を提供する。

戦後は、コロムビアの専属として、ラジオ歌謡の「たそがれの夢」、「白い花の咲く頃」、「リラの花咲く頃」などの曲を数々手がけた。

妻は作詞家の寺尾智沙である。「白い花の咲く頃」は妻と共に作詞作曲した。 また、白い花が咲くころは、丹後文化会館に石碑がありボタンを押すと白い花が咲くころのメロディーが流れる。

代表曲

『山は夕焼』（昭和**9**年**9**月）［岡田千秋作詞、歌：東海林太郎］

『母をたずねて』（昭和**9**年**11**月）［時雨音羽作詞、歌：東海林太郎］
『綾乃の子守唄』（昭和**9**年**12**月）［久保田宵二作詞、歌：東海林太郎］
『女の友情の唄』（昭和**9**年**12**月）［吉屋信子作詞、歌：松島詩子、山野美和子］
『家なき児』（昭和**10**年**5**月）［時雨音羽作詞、歌：東海林太郎］
『さくら道成寺』（昭和**12**年**4**月）［佐藤惣之助作詞、歌：三門順子］
『ふるさとの母』（昭和**12**年**9**月）［梁取三義作詞、歌：松島詩子］
『チンライ節』（昭和**13**年**8**月）［時雨音羽作詞、歌：樋口静雄］
『たそがれの夢』（昭和**23**年**6**月）［西沢義久作詞、歌：伊藤久男］
『白い花の咲く頃』（昭和**25**年**11**月）［寺尾智沙作詞、歌：岡本敦郎］
『リラの花咲く頃』（昭和**26**年**5**月）［寺尾智沙作詞、歌：岡本敦郎］
＊懐かしいメロディーですね。詩は分かりませんが、曲は私好みの哀愁歌。色んなことが脳裏に浮かび消えます。感無量なひと時。

華の昭和名歌３００　第　：お駒恋姿　東海林　太郎

　昔から、ときどき聴いていた唄で、町のお祭りのイベントの定番、大衆演劇一座の、芝居の後の舞踊ショーで、「旅笠道中」や「妻恋道中」などには及ばないが、この曲もよく使われていた。若い女形や若い女役者が、華やかな黄八丈や振袖を纏って、上手に踊ると、心から拍手を送りたくなる。しかし、なぜか５０過ぎの金五郎顔の女形や、小母さんをはるかに過ぎた女役者が、舞い踊ることも多かった。振袖や所作は、美しいのだが。まあ、これらの曲はいまでも毎日、全国のホテルや温泉ランドなどの施設で、大衆演劇の一座が、多くの人々を楽しませていることだろう。

　肝心の曲についてだが。すでに押しも押されもしない、詞も曲もどんピシャリの大名曲。元ネタは浄瑠璃とのことだが、世間（社会）的な背景と、それを覆う日本的な美学のない交ぜ。人の感情や色恋は、縛り？があることに拠って、さらに燃え上がるものなのだろうか？

（作詩　藤田まさと　作曲　大村能章　昭和10年）

１　七ッ八ッから　容貌(きりょう)よし
　　十九二十(はたち)で　帯とけて
　　解けて結んだ　恋衣
　　お駒才三の　はずかしさ

２　初の島田に　謎かけて
　　いつか因果な　罪の淵
　　うらみまするぞ　母(はは)様と
　　涙気になる　黄八丈

３　恋と義理との　諸手綱(もろたづな)
　　ひかれて渡る　涙橋
　　風にすねたか　黄八丈
　　袖にくずれる　薄化粧

（収集プロフィール）

大村 能章（おおむら のうしょう、1893年（明治26年）12月13日～1962年（昭和37年）1月23日）昭和期の作曲家。

略歴

1893年（明治26年）12月13日 - 山口県防府市多々良に米穀商大村良之助、ユフの長男として生まれる。

1909年（明治42年） - 横須賀海軍軍楽隊に入隊。

1920年（大正9年） - 帰郷後、御園ツネ子と結婚。1女を得る。

1926年（大正15年） - 再上京して作曲家をめざす。

1931年（昭和6年） - 日本歌謡学院を創設。

1933年（昭和8年） - レコード音楽芸術講義録（通信教育）を出版、後進の育成にあたる。

1935年（昭和10年） - 藤田まさとの詞に曲をつけた「旅笠道中」が大ヒット。

1947年（昭和22年） - 日本音楽著作者組合（後の日本音楽著作権協会）を設立。
1957年（昭和32年） - 社会奉仕会『能章会』を設立
1958年（昭和33年） - 日本作曲家協会設立に参画
1962年（昭和37年）1月23日 - 肺癌のため死去。享年69。
生誕地である防府市佐波神社には大村能章顕彰碑が建っている。
自身が作曲した「同期の桜」（原題戦友の唄）については、死ぬまで自分が作曲したとは口にしなかったという。
＊七五調の歌詞。解けて結んだ恋衣。初の島田に、謎かけて。歌詞と日本伝統の伴奏曲のすばらしさ、東海林の哀愁のある歌声。現在の日本に二度と出てこない貴重な曲です。今の人は、お駒才三の浄瑠璃も、お夏清十郎も知らないかも。
代表曲
旅は鼻唄（昭和10年1月）［佐藤惣之助　詞、歌：東海林太郎］
旅笠道中（昭和10年4月）［藤田まさと　詞、歌：東海林太郎］
お伝地獄の唄（昭和10年8月）［藤田まさと　詞、歌：新橋喜代三］
博多小女郎波枕（昭和10年9月）［藤田まさと　詞、歌：東海林太郎］
野崎小唄（昭和10年10月）［今中楓渓作詞、歌：東海林太郎］
お駒恋姿（昭和10年10月）［藤田まさと作詞、歌：東海林太郎］
明治一代女（昭和10年11月）［藤田まさと作詞、歌：新橋喜代三］
満州想えば（昭和11年2月）［高橋掬太郎作詞、歌：音丸］
お夏清十郎（昭和11年4月）［佐藤惣之助作詞、歌：東海林太郎］
博多夜船（昭和11年8月）［高橋掬太郎作詞、歌：音丸］
満州吹雪（昭和11年11月）［高橋掬太郎作詞、歌：音丸］
麦と兵隊（昭和13年12月）［藤田まさと作詞、歌：東海林太郎］
土と兵隊（昭和14年1月）［藤田まさと作詞、歌：東海林太郎］
戦友の唄（同期の桜）（昭和14年7月）［西條八十作詞、歌：樋口静雄］
花と兵隊（昭和14年8月）［藤田まさと作詞、歌：東海林太郎］
艦上機恙なし（昭和17年10月）［深沢健三　詞、歌：岡晴夫］
小判鮫の歌（昭和23年10月）［高橋掬太郎　詞、歌：小畑実］

華の昭和名歌３００　第　：女の階級　楠木　繁夫

　この曲は、タイトルが、今の時代に合わないようだ。言葉として捉えると、女性差別をすこし感じさせてしまう。それが、残念。実は、島田はそういう意味で使っている訳ではないのだが。いまさら直すことは出来ないし。曲自体は、昭和初期という、当時の時代を映した、不朽の名曲。哀愁を含んだ、快く軽快なメロディー。多くの歌手がカバーしているが、オリジナルの楠木の歌唱が、群を抜いて素晴らしい。この時代に、このように軽やかに、柔らかに、けれど深い聴後感を残す歌唱。これは、楠木が戦時歌謡を唄うときも、そう変わらない。多少は気張っているが、それは仕方の無いことだろう。あの徳山環や、川崎豊のように、声を張り上げ、気張って唄うのが喜ばれた時代なのだから。

（作詩　村瀬まゆみ（島田磐也の別名義）作曲　古賀政男　昭和11年）

１　君に捧げた　純情(まごころ)の
　　愛が女の　生命なら
　　弱い涙は　今日限り
　　捨てて茨の　道を行く

２　想い乱れて　咲く花は
　　女心か　月草よ
　　涙誘うな　秋風に
　　散るは彼の日の　夢ばかり

（収集プロフィール）

島田 磐也（しまだ きんや、1909年6月30日 - 1978年11月20日）日本の作詞家。

＊戦前期、テイチクレコードでの作曲家・大久保徳二郎、歌手・ディック・ミネとのトリオは、ヒット・メイキング・チームであった。

来歴

1909年（明治42年）6月30日、熊本県熊本市に生まれる。18歳のとき上京し作詞家・詩人の西條八十の門下に入る。同じく作詞家のサトウ・ハチローとは兄弟弟子である。

1934年（昭和9年）、「主婦の友」連載小説「地上の星座」主題歌募集に一等当選。師である西条八十と共に作詞した「川原鳩なら」（歌：藤山一郎）で作詞家デビュー。

1937年（昭和12年）、上原敏歌唱の『裏町人生』は大ヒットとなる。

大久保徳二郎、ディック・ミネと組んだ楽曲で一世を風靡した。尚、ミネが1953年に島田の作詞曲『長崎エレジー』を第4回NHK紅白歌合戦にて歌唱している。

映画においては、1939年（昭和14年）12月14日に公開された日活京都撮影所作品、オペレッタ時代劇の『鴛鴦歌合戦』の構成と作詞を、作曲の大久保徳二郎とともに担当した。

戦後も石原裕次郎が島田が作詞したミネの楽曲をカヴァーし、ふたたびヒットする。また1959年（昭和34年）に村田英雄がリリースした『黒田武士』（作曲者不詳）の作詞。

1966年（昭和41年）、『孤情の詩旗』（南北出版サービスセンター）を上梓。

1978年（昭和53年）11月20日に死去。69歳没。

ディスコグラフィ

藤山一郎『川原鳩なら』、共同作詞西條八十、作曲佐々木俊一、1934年　※松竹映画『地上の星座』主題歌

ディック・ミネ『望郷の唄』、作曲古賀政男、1935年

楠木繁夫『女の階級』、作曲古賀政男、1936年（村瀬まゆみ名義）

楠木繁夫『啄木の歌』、作曲古賀政男、1938年

上原敏『裏町人生』、作曲阿部武雄、1937年

東海林太郎『湖底の故郷』、作曲鈴木武男、1937年

藤山一郎、鈴木吟亮『白虎隊』、作曲古賀政男、1937年

東海林太郎、上原敏『泣き笑いの人生』、作曲飯田景応、1938年

上原敏『波止場気質』、作曲飯田景応、1938年

東海林太郎『人生航海』、作曲飯田景応、1938年

ディック・ミネ『或る雨の午後』、作曲大久保徳二郎、1939年

ディック・ミネ、藤原千多歌『長崎エレジー』、作曲大久保徳二郎、1947年

ディック・ミネ『夜霧のブルース』、作曲大久保徳二郎、1947年

田端義夫『嘆きのピエロ』、作曲大久保徳二郎、1947年

村田英雄『黒田武士』、作曲不詳、1959年

華の昭和名歌３００　第　：慈悲心鳥の唄　楠木　繁夫

　子供の頃、この唄を初めて聴いたとき、３番の初めの部分を私は、起きて厳しき人の世を、と理解し、冬で寒さが厳しい朝だったのだろうか、とその情景を思い浮かべようとしていた。想念を呼び起こす歌詞と、哀愁と浪漫に満ちた、心を癒すメロディー。この曲も、多くの歌手（美空ひばり、都はるみ、島倉千代子、美輪明宏、大川栄策など）がカバーしているが、やはり楠木が群を抜いている。柔らかに、軽やかに、しかし深い聴後感を残す。

(作詩　佐藤惣之助　作曲　古賀政男 昭和12年）

１　愛と泪に　流れ行く
　　若きふたりの　思い出は
　　海の真珠の　浪の色
　　虹よ消ゆるな　いつまでも
２　窓のともし火　ほのかにも
　　母と呼ばれて　幼児(おさなご)に
　　聞かす夜毎の　子守唄
　　ゆめの千鳥よ　何を泣く
３　掟(おきて)きびしき　人の世に
　　負けてこの身は　果つるとも
　　愛の勝利の　うるわしく
　　花もかがやけ　この胸に

（収集プロフィール）

佐藤 惣之助（さとう そうのすけ、1890年12月3日～1942年5月15日）日本の詩人、作詞家。神奈川県川崎市出身。

経歴

佐藤慶次郎・うめ夫妻の二男として出生。佐藤家は川崎宿（現川崎市）の本陣を預かる家柄であった。佐藤紅緑に師事し俳句を学び、1916年（大正5年）に最初の詩集である『正義の兜』を出版。翌年には、第2詩集である『狂へる歌』を出版。1933年（昭和8年）1月、妻の花枝が死去。同年、作家萩原朔太郎の妹、萩原愛子（萩原アイ）と再婚。作曲家、古賀政男と組み多くの楽曲を世に送り出す。1938年（昭和13年）には、久米正雄、林房雄、川口松太郎らと中国へ従軍記者として赴く。義兄朔太郎が死亡した四日後、脳溢血で急逝。享年51。

なお、川崎信用金庫本店の所在地が佐藤惣之助の生家跡であり、同店敷地内に「佐藤惣之助生誕の地碑」が建てられている。

＊「慈悲心鳥」は、菊池寛の小説。婦女界社の雑誌「母の友」で連載された。1927年、1936年に日活で、1954年に新東宝で映画化された。

＊45年12月福士幸次郎、千家元麿、高村光太郎、木村荘八と雑誌「テラコツタ」を創刊。

大正3年元麿らと雑誌「エゴ」創刊。「白樺」の衛星雑誌として武者小路實篤も寄稿。

4年處女詩集『正義の兜』出版。この後の數册の詩集で、旺盛な生命感を表現し、「白樺」派の詩

風に近いものとして注目された。
8年雑誌「大洋の岸邊」創刊(光太郎、元麿、白鳥省吾、中西悟堂らが寄稿)。
10年、詩集『深紅の人』出版。作風に變化が生じ、健康で華麗な感覺に富んだ、獨自の抒情詩に移行した。
11年5〜7月琉球、臺灣を旅行。
14年7月詩人のクラブ「詩之家」設立、機關誌「詩之家」創刊、10月萩原朔太郎らと詩話會の機關誌「日本詩人」の編輯に携はる。
昭和3年5月滿洲、蒙古、朝鮮各地を1箇月に亙り旅行す。
8年1月夫人花枝と死別、同年8月朔太郎の妹周子と再婚。
9年年末上海、香港、廣東、マニラを旅行。
13年9月久米正雄、林房雄、川口松太郎らと武漢作戰に從軍記者として參加。
17年5月15日、外出中、腦溢血のため死去。
＊大の釣好きで、釣に關する著書が數册ある。日本磯釣倶樂部常務理事を歴任。二十二册の詩集があり、當時は有名な詩人であつた。しかし現在では詩人としてよりも、寧ろ歌謠曲の作詞者として記憶されてゐる。

著書

正義の兜 詩集 天弦堂, 大正5
狂へる歌 第二詩集 無我山房, 大正6
満月の川 詩集 叢文閣, 大正9
深紅の人 新都市雑曲集 日本評論社出版部, 大正10
華やかな散歩 詩集 その6 新潮社, 大正11
季節の馬車 新潮社 大正11. -- （現代詩人叢書 ; 第5編）
荒野の娘 自然詞華集 大鐙閣, 大正11. -- （現代代表詩選 ; 第4編）
市井鬼 散文集 京文社, 大正11
琉球諸島風物詩集 京文社, 大正11
釣するこゝろ 随筆 万里閣, 昭14

主な曲

『大阪音頭』（昭和8年10月）［佐々紅華作曲、歌：藤本二三吉］
『赤城の子守唄』（昭和9年2月）［竹岡信幸作曲、歌：東海林太郎］
『月形半平太の唄』（昭和9年2月）［近藤政二郎作曲、歌：東海林太郎］
『旅は鼻唄』（昭和9年12月）［大村能章作曲、歌：東海林太郎］
『白い椿の唄』（昭和10年1月）［古賀政男作曲、歌：楠木繁夫］
『むらさき小唄』（昭和10年5月）［阿部武雄作曲、歌：東海林太郎］
『緑の地平線』（昭和10年10月）［古賀政男作曲、歌：楠木繁夫］
『ゆかりの唄』（昭和10年10月）［古賀政男作曲、歌：ディック・ミネ］
『白衣の佳人』（昭和10年11月）［古賀政男作曲、歌：ディック・ミネ］
『大阪タイガースの歌（現:阪神タイガースの歌、通称:六甲颪）』（昭和11年3月）［作曲:古関

裕而］
『お夏清十郎』（昭和11年4月）［大村能章作曲、歌：東海林太郎］
『東京娘』（昭和11年6月）［古賀政男作曲、歌：藤山一郎］
『男の純情』（昭和11年9月）［古賀政男作曲、歌：藤山一郎］
『愛の小窓』（昭和11年9月）［古賀政男作曲、歌：ディック・ミネ］
『すみだ川』（昭和12年2月）［山田栄一作曲、歌：東海林太郎］
『人生の並木路』（昭和12年2月）［古賀政男作曲、歌：ディック・ミネ］
『青い背広で』（昭和12年2月）［古賀政男作曲、歌：藤山一郎］…藤山が着ていた濃緑の背広を、酔った佐藤が見て「青い背広とは珍しい」と作詞したとのエピソードがある。
『青春日記』（昭和12年2月）［古賀政男作曲、歌：藤山一郎］
『さくら道成寺』（昭和12年4月）［田村しげる作曲、歌：三門順子］
『国境を越えて』（昭和12年6月）［古賀政男作曲、歌：楠木繁夫］
『真実一路の唄』（昭和12年7月）［古賀政男作曲、歌：楠木繁夫］
『上海だより』（昭和13年1月）［三界稔作曲、歌：上原敏］
『南京だより』（昭和13年4月）［山田栄一作曲、歌：上原敏］
『月下の吟詠』（昭和13年6月）［細川潤一作曲、歌：塩まさる］
『人生劇場』（昭和13年7月）［古賀政男作曲、歌：楠木繁夫］
『母子船頭唄』（昭和13年10月）［細川潤一作曲、歌：塩まさる］
『北満だより』（昭和13年12月）［三界稔作曲、歌：上原敏］
『広東の花売娘』（昭和15年1月）［上原げんと作曲、歌：岡晴夫］
『湖畔の宿』（昭和15年5月）［服部良一作曲、歌：高峰三枝子］
『新妻鏡』（昭和15年6月）［古賀政男作曲、歌：霧島昇、二葉あき子］
『燃ゆる大空』（昭和15年8月）［山田耕筰作曲、歌：藤山一郎、霧島昇］
『花の広東航路』（昭和16年8月）［上原げんと作曲、歌：岡晴夫］
『新作おわら』［富山県民謡に追加した歌詞］

　作詞者について、かなり調べたのだが、なぜかこれといった情報は得られなかった。淡谷の歌唱は、暗く、気だるい雰囲気。よく知られているダミがかった低音が、オリジナル版では柔らかで美しい声がまだかなり残っているが、この唄に最適な、悶えと深みがある。他の有力歌手たちの誰が唄っても、この果てしない深さと、重い聴後感は表現出来ないだろう。「別れのブルース」と並ぶ、淡谷のり子畢生の名歌。
(作詩　野川香文　作曲　服部良一　昭和13年）
１　雨よふれふれ
　　なやみを　流すまで
　　どうせ涙に　濡れつつ
　　夜毎なげく身は
　　ああ　かえり来ぬ
　　心の青空
　　すすり泣く　夜の雨よ
２　くらい運命に
　　うらぶれ　果てし身は
　　雨の夜路を　とぼとぼ
　　ひとりさまよえど
　　ああ　かえり采ぬ
　　心の青空
　　ふりしきる　夜の雨よ
（収集プロフィール）
野川　香文（のがわ　こうぶん、1904（明治３７）～1957（昭和３２）、別名：大井蛇津郎）昭和期の作詞家、ｼﾞｬｽﾞ評論家。
＊二木こう三のうた物語より
歌詞もメロディも暗く、歌った淡谷のり子の声質も重く深いのが特徴。雨の夜などに聞いていると、この暗鬱なムードがなんとなく快く感じられてくる。憂鬱の感覚は文化的風土によって異なるので、「典型的な日本のブルース」といったほうがいいかも。
　昭和13年は、前年に始まった日中戦争が泥沼化を深めており、物資不足から買いだめが始まり、東京オリンピックが中止された年。多くの国民が先行きに漠とした不安を感じており、その心情にこの歌のグルーミーさがマッチ。大ヒットとなりました。
＊それらを深く聞けば、反戦，厭戦、逃避などに聞こえてなりません。徴兵忌避について調査を進めていく中で、庶民の平和を求める気持ちが当時の流行歌の中にたくさん秘められているようでとても勉強になります。だからこそ、戦火を生き延びてきたものたちは心してこれらの歌を歌い、伝えていかなければと思います。
　主な曲

散りゆく花（昭和１３　詞 野川香文　曲　服部　良一　歌唱　ベティ稲田）
島の唄　　（野川香文　作詩　キング　作曲　紙恭輔　編曲）
センチメンタルダイナ（昭和１４　詞 野川香文　曲　服部　良一　歌唱　笠置シズ子）
　著書
1. ジャズ楽曲の解説ージャズの発達史 (1968年)
2. ジャズ楽曲の解説 (1951年)
3. ジヤズー現代人の音楽 (1949年)
4. ジャズ用語辞典 (1953年)

　品の良い哀愁と、浪漫に溢れた、和製タンゴの名曲。歌詞も、後半は繰り返しが多い、というのはかなり珍しい。子供の頃、たまに聴いたような気がするが、タンゴの意味するものを、まったく分かっていなかったので、自分から求めて聴くことはなかった。全体的に、夢のなかに誘われるような、歌詞とメロディーがとてもいい。霧島の、柔らかな歌唱も、この曲にドはまり。
カバーのなかでは、ボニー・ジャックスの技巧を凝らした歌唱が秀逸。
（作詞　奥山　靉　作曲　服部良一　昭和14）
１　夢いまだ　さめやらぬ
　　春のひと夜
　　君呼びて　ほほえめば
　　血汐おどる
　　ああ　若き日の夢
　　今君にぞ通う
　　この青春のゆめも
　　さめて散る花びら
　　過ぎし夢は　はかなく
　　消えて悲し　今はただ
　　君がやさし　面影
　　むねにえがき　今日もまた
　　ギターを弾きて　歌うは
　　君の大好きな　あの歌
　　今はせつなくひびく　恋の思い出よ
　　※ああ　若き日の夢　今君にぞ通う
　　この青春のゆめ　さめて散る花びら
（収集プロフィール）
奥山　靉（おくやま　あい、明治三十五年～？）東京生れ、日大医学部出身、甲府で内科小児科医院を開業していた。その後、東京品川で医院を営む。アメリカへ留学したこもあり、訳詞に「ケ・セラ・セラ」「シックステーン・トンズ」など。
＊奥山氏は、戦前コロムビアに舶来カヴァー曲訳詩作品が多数。松平晃の歌唱「泪のタンゴ」は、和製「ミロンガ調タンゴ」の名曲です。
＊この曲を最初に聴いたのは昭和30年代で、洋楽だとばかり思っていました。作曲はレオ、ハッターで、英語の歌詞でＳＰ盤が。後に「服部良一」の作曲と判り驚きました。それは、戦時中この様な「愛愁歌」は不謹慎と言う事で、カモフラージュしたモノと聞いてまたビックリ。ここまでして、良い曲を創ろうとした、当時の作曲家の苦労が伺えます。
＊服部良一がなんとかこの曲を世に出したいと思い、検閲官の目を逃れるために一計を案じ、外国人の名前を使ってレコード化したのでした。その題名は

「Love's Gone」とし、ラベルには作曲はReo.Hatter(R.ハッター)で、Vic Maxwell楽団演奏と印刷し、盟邦ドイツのタンゴ曲として検閲を逃れて発売。

華の昭和名歌３００　II

http://p.booklog.jp/book/25834

著者 : fb92745e
著者プロフィール：http://p.booklog.jp/users/fb92745e/profile

発行所 : ブクログのパブー（http://p.booklog.jp/）
運営会社：株式会社paperboy&co.

感想はこちらのコメントへ
http://p.booklog.jp/book/25834

ブクログのパブー本棚へ入れる
http://booklog.jp/puboo/book/25834